愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第89集

岩作城跡（やざこじょう）
能見城跡（のうみじょう）

2000

(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

本書は、中世の城館跡である「岩作城跡」および「能見城跡」の発掘調査報告を収録しています。

岩作城跡は愛知郡長久手町岩作に所在し、現在の長久手町役場南側一帯にあたります。ここは天正12年（1584）小牧・長久手の合戦の中心地域として知られ、古戦場址や関連するその他の史跡の整備も早くから進められてきました。

現在残されている記録や伝承からは、この岩作城について合戦当時の様相を窺うことはできませんが、昭和40年代まで土塁や池の痕跡がまだ残っていたようで、今日まで付近は城跡であったと伝えられてきています。県道田籾・名古屋線の道路改良工事に伴う今回の調査では、香流川右岸のこの一帯に営まれた岩作城構築以前の集落と、土塁をめぐらした岩作城築成当初の形態について成果を得ることができました。

能見城跡は東加茂郡旭町大字榊野に所在する戦国時代の城館跡であり、矢作川の支流、阿摺川上流左岸の丘陵部先端に築かれています。県道土岐・足助線道路改良工事に伴う調査成果では、小規模な城跡ながらも頂上には物見櫓の痕跡が認められ、また15世紀後半代の土師器、陶磁器、宋銭など生活に伴う遺物も多数出土しています。足助から明知・岩村方面へと続く街道筋を見下ろす砦のような性格をイメージさせるものでした。

さて、平成11年度、私共の組織は財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターと改め、新たな出発となりました。ここ数年来、多くの発掘調査や大規模な調査が行われたことによって、多様な情報が伝えられるようになり、地域の方々をはじめ、一般の埋蔵文化財への関心・興味にも質的な変化が現れはじめています。こうした中、私共も普及・活用の必要性と方法について新たな形態を模索しています。本報告が今後の研究と埋蔵文化財へのご理解の一助となれば幸いに存じます。

最後に、ご協力頂きました愛知県土木部・愛知県教育委員会・長久手町教育委員会・旭町教育委員会の各関係諸機関の方々、調査に関わった地域の作業員の皆様には、ここに御礼申し上げます。

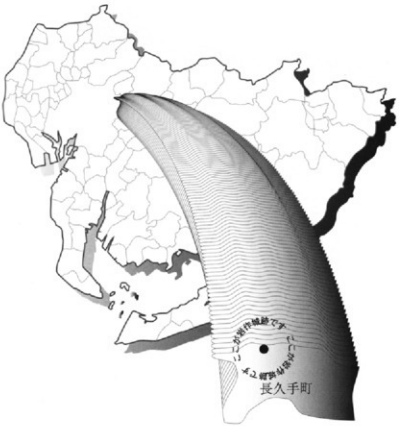
平成12年8月

財団法人　愛知県教育サービスセンター

理事長　久留宮泰啓

岩作城跡

愛知郡長久手町岩作



例　言

1 本書は愛知郡長久手町大字岩作（やざこ）に所在する岩作城跡の発掘調査報告書である。
2 調査は、県道田籾名古屋線の道路改良工事に伴う事前調査として愛知県土木部から県教育委員会を通して委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3 調査期間は平成10年4月～11月、調査面積は1,800㎡である。
4 発掘調査は、黒田哲生（主査・現五条高等学校）、浅井厚視（調査研究員・現美和小学校）、武部真木（調査研究員）が担当し、瀬戸かな子（調査補助員）が補佐した。
5 調査にあたっては、長久手町教育委員会社会教育課、長久手町郷土資料館、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部の各関係諸機関の御協力を得た。
6 調査記録および遺物整理等の作業には、阿部佐保子（研究補助員）、加藤豊子・服部里美（整理補助員）の協力を得た。
7 出土遺物の写真撮影には（有）深川写真　深川　進氏の手を煩わした。
8 本書の執筆は、第4章1を藍山誠一（調査研究員）、第4章2を鬼頭　剛（調査研究員）、第4章3を森　勇一（愛知県立明和高等学校教諭）が分担し、その他と編集を武部真木が行った。
9 本書をまとめるにあたり、次の諸氏にご指導、ご助言をいただいた。記して感謝したい。
赤羽一郎　遠藤才文　金子健一　柴垣勇夫　城ヶ谷和博　千田嘉博　七原恵史　楢崎彰一
福岡錦三　藤澤良祐　（順不同・敬称略）
10 今回の調査に使用した方位・座標は建設省の定めた平面直角座標第Ⅶ系に基づくものであり、海抜座標はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
11 本調査に関する記録・出土遺物等は、すべて愛知県埋蔵文化財調査センターおよび（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが管理・保管している。

岩作城跡　目次

第1章　調査の経緯・経過 …… 1
1　調査の経緯・経過
2　調査工程
第2章　遺跡の概要 …… 2
1　遺跡の立地　（鬼頭）2
a. 地形
b. 地質
2　歴史的環境　4
第3章　遺跡の調査 …… 6
1　調査の概要　6
a. 過去の周辺調査
b. 調査方法
c. 基本層序
d. 基本遺構図
2　古代の遺構と遺物　15
3　中世以降の遺構と遺物　19
4　石製品　31
第4章　自然科学分析 …… 35
1　金属製品・鍛冶関係資料　（藤山）36-40
2　微化石分析による岩作城跡の古環境　（鬼頭）41-50
3　愛知県岩作城跡から検出された昆虫群集とその意義
（森）51-56
第5章　小　結 …… 57

付表・図版
遺構一覧表　(1-3)
遺物一覧表　(1-4)
写真図版　(1-10)

図版目次

図版1　遺跡遠景　遺跡全景
図版2　調査区全景（A・B・C・D区）
図版3　SX10断面、SX09全景・断面
図版4　SD32-a,-b断面、SD36全景
図版5　遺構断面、遺物出土状態
（P38、P39、SK12）
図版6　遺物（1）
図版7　遺物（2）
図版8　遺物（3）
図版9　遺物（4）
図版10　遺物（5）

挿図目次

第1図　調査地点周辺図（S=1/5,000）
第2図　愛知県の地質概略図
第3図　岩作城跡周辺の地質
第4図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）
第5図　過去の調査地点（S=1/2,000）
第6図　岩作城跡調査区北壁土層断面図
（縦1/50、横1/300）
第7図　基本遺構図　A区（S=1/200）
第8図　基本遺構図　B区（S=1/200）
第9図　基本遺構図　C区（S=1/200）
第10図　基本遺構図　D区（S=1/200）
第11図　古代の遺物（1）
第12図　SB01平面（S=1/50）・断面図（S=1/20）
第13図　SK12・16,Pit38・39
平面図・断面図（S=1/40）
第14図　古代の遺物（2）
第15図　SX10平面図（S=1/80）・断面図（S=1/50）
第16図　SD25・28,SX09断面図（S=1/50）
第17図　SX09,SD38断面図（S=1/50）
第18図　SX03・04平面図（S=1/200）
・断面図（S=1/50）
第19図　中世の出土遺物（SX10）
第20図　中世の出土遺物
（P174,SK14,SX09,墨書陶器）
第21図　中世の出土遺物（SD25,陶丸）
第22図　中世の出土遺物
（SD36,SD32・33,SD27,SD28）
第23図　中世の出土遺物（SX09）
第24図　中世以降の出土遺物
（SX09,SX08,加工円盤,土錘）
第25図　石製品
第26図　遺構別遺物組成
第27図　灰釉系陶器碗・皿類　時期別分布
第28図　瀬戸美濃産陶器　時期別分布
第29図　金属製品
第30図　岩作城跡98C区の試料採取地点と採取層準
第31図　岩作城跡98D区SD32の
試料採取地点と採取層準
第32図　岩作城跡98C区P-1の花粉分析結果
第33図　岩作城跡98C区P-1の植物珪酸体分析結果
第34図　岩作城跡98C区P-1の珪藻分析結果
第35図　岩作城跡98C区P-2の植物珪酸体分析結果
第36図　岩作城跡98C区P-2の珪藻分析結果
第37図　岩作城跡98D区SD32の花粉分析結果
第38図　岩作城跡98D区SD32の植物珪酸体分析結果
第39図　岩作城跡98D区SD32の珪藻分析結果
第40図　岩作城跡における古環境変遷図
第41図　岩作城から発見された昆虫化石の組成
第42図　昆虫化石の顕微鏡写真
第43図　岩作城周辺地籍図

表　目次

表1　遺跡周辺の中世城館跡
表2　文献にみられる岩作城
表3　土師器・須恵器・灰釉陶器・磁器
遺構別破片数
表4　出土施釉陶器の組成
表5　鍛冶関係資料（1）
表6　鍛冶関係資料（2）
表7　鍛冶関係資料（3）
表8　岩作城跡98C区における^{14}C年代
表9　岩作城跡から産出した昆虫化石

第1章　調査の経緯・経過

1　調査の経緯・経過

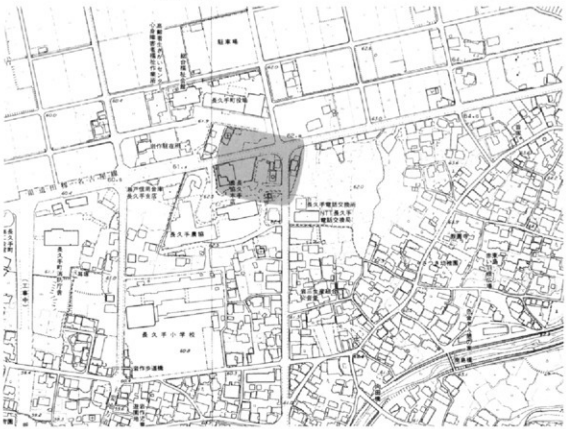
岩作城跡は愛知県愛知郡長久手町岩作字城ノ内・早稲田の地域に所在する遺跡である。

愛知県土木部にて県道田籾名古屋線の道路改良工事が計画され、周知の遺跡である岩作城跡の範囲にかかることが判明し、事前調査および記録保存の必要が認められた。そこで愛知県教育委員会を通して委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが平成10年4月～11月の期間で1,800㎡の範囲の発掘調査を行った。調査は、東側よりA,B,C,Dの4つの調査区を設定し、東から順次進めた。発掘作業員は主に地域住民から募集した13人が参加し、また長久手町役場には調査段階で全面的な協力を得た。

なお、今回の調査後の平成11年5月、国史跡指定60周年を記念して調査地点に『岩作城址』碑が設置された。

2　調査工程

調査担当
調査研究員　黒田哲生（主査）
浅井厚視
武部真木
発掘補助員　瀬戸かな子
発掘作業員　浅井教子　安形つや子　伊藤百江
伊藤守市　大橋久美　加藤孝洋
田川　勝　谷口智子　出崎佳代
野崎富士夫　服部益恵　原　糸恵



第1図　調査地点周辺図（1/5,000）

第2章　遺跡の概要

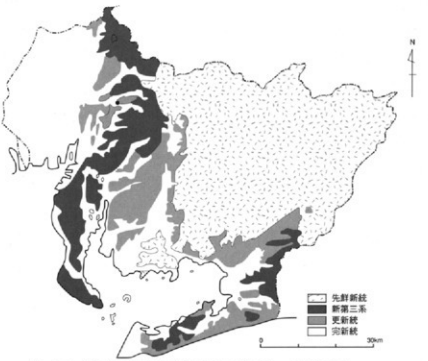
1　遺跡の立地

a. 地形

遺跡は名古屋市の北東、濃尾平野の北東部の愛知県愛知郡長久手町に位置する（第2図）。美濃三河高原（山地）から濃尾平野へと移行する境界地域にあたり、平野を取り囲む形で山地や丘陵地がほとんどを占める。濃尾平野の東縁は知多半島から南北方向に続く丘陵地帯によって境される。その北方にあたる丘陵地は尾張丘陵と呼ばれる。長久手町は尾張丘陵のほぼ中央に位置し、長久手町は全体に南東方向に高く（標高100～175m）、北西方向に低い（標高75m以下）地形をなす。尾張丘陵を挟んで北側には瀬戸市方面からの矢田川が、南側には香流川が西方へ流れ、さらに西の名古屋市に入ったところで北部から西部へ迂回するとともに、両河川は合流し、庄内川となって伊勢湾へ注ぐ。庄内川、矢田川の両岸に沿って段丘がみられ、庄内川の中央線定光寺駅の下流川、矢田川水系の瀬戸市街地や瀬戸市山口の下流川、香流川の長久手町岩作以西には比較的広く段丘が分布している。発掘調査地周辺は下位面（小牧面・越戸面）にあたっている（愛知県企画部土地利用調整課, 1983）。

長久手町には6つの丘陵地が知られており、遺跡は長久手町北部の標高80～120mの大草丘陵と中央部にある標高90～100mの岩作丘陵と標高80mほどの中央丘陵とに挟まれた沖積平野にある。南東にある三ケ峯丘陵を源とする香流川が遺跡から約400m南で流れる。古文書によると川筋の割りには流量が乏しく、渇水期には水の確保に苦労する一方で、大雨が降ると濁流となって民家や畑を押し流したという（長久手町, 1983）。本河川はかつては農業用水源として重要であったが、愛知用水の通水により、現在は排水路として利用されている。

発掘調査地は長久手町大字岩作字城之内および早稲田で、長久手町役場の南側約20mにあたり、県道田籾名古屋線が通る。周辺には住宅地と水田が広がる。

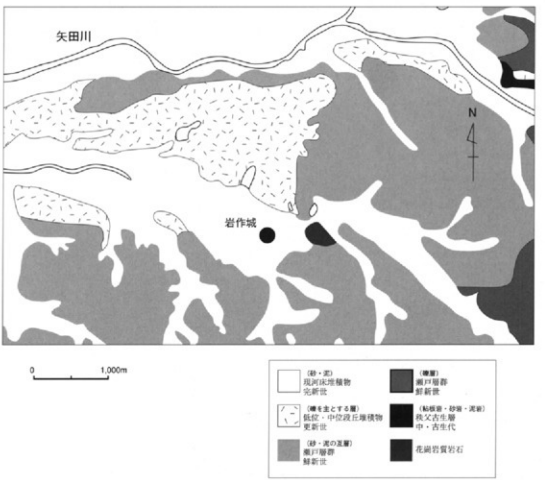


第2図　愛知県の地質概略図（●は岩作城跡の位置を示す）

b. 地質

濃尾平野を取り囲む丘陵地は半固結の礫・砂・泥層からなる。これらの地層は濃尾平野の地下にも伏在しており、ひとつの堆積盆地で形成された地層群として扱われ、東海層群と呼ぶ（石田・横山, 1969）。東海層群は伊勢湾をとりまく地域に分布するが、濃尾平野東縁に分布するものを瀬戸層群と呼ぶ。地下層序は古生層およびこれに貫入した花崗岩類を基盤岩とし、新第三系鮮新統および第四系更新統の礫層・砂層および粘土を含むシルト層からなる（第2図）。発掘調査地東方の岩作丘陵でもっとも高い高根山には古生層であるホルンフェルスが部分的に露出する。新第三系鮮新統は瀬戸層群と呼ばれ、瀬戸陶土層と矢田川累層とに分けられ、後者はさらに水野砂礫相・尾張夾炭相・猪高相に区分される。各層相は岩相の側方変化が激しく、各相の境界は相互に同時異相の関係をもって側方に移化する。岩作城跡発掘調査区の北側およそ20m北側には、長久手町役場がある。そこで行なわれたボーリング柱状図にも前述のような層相が明瞭に表れている（第3図）。更新統は、段丘堆積物として岩作字高山では名古屋市域の熱田層に相当する砂礫層が層厚3～4mで分布し、遺跡地下周辺には大曽根層に相当する砂礫層が層厚3～4mで認められる。遺跡南方を流れる香流川流域には完新統堆積物が分布し、住宅地とともに広大な水田地帯となっている。

参考文献
愛知県企画部土地利用調整課, 1983, 愛知県土地分類基本調査「岐阜・美濃加茂・瀬戸」5万分の1, 愛知県, 105p.
長久手町, 1983, 長久手町史 資料編二 自然, 長久手町役場, 492p.



第3図　岩作城跡周辺の地質

第４図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）
凸中世城館跡　●窯跡

2　歴史的環境

遺跡のある岩作地区周辺は、天正12年（1584）の小牧、長久手の合戦の中心地域であった。遺跡東方色金山山頂には、合戦時に徳川家康が陣を置き指揮をとったという床几石のほか、戦死者を葬ったとされる首塚、三将（池田恒興ら父子、森長可）の牌子を安置する安昌寺、御旗山など戦に関連する史跡も数多い。古戦場跡周辺は昭和14年に国史跡に指定されている。

岩作地区のある長久手町内において現在知られている最も古い時代の遺跡は、剥片石器、弥生土器等が採集された内万場遺物である。遺物散布地であるが、遺跡の詳細は明らかでない。古墳は主に熊張、前熊、岩作地区の丘陵末端や尾根上に築かれ、多くは7世紀前半代から中葉にかけての古墳時代後期に属する。西部の中央丘陵、長湫丘陵には確認されておらず、古墳は香流川中流域から上流域の丘陵付近に群集墳として分布する。周辺の猿投山の支陵である低位丘陵には、古代～中世の窯跡が点在する。これらは猿投山に展開する古代の窯跡群では最も北寄りのグループを形成する。長湫丘陵南部に築かれた丁子田古窯（I-17併行）が7世紀後半と最も古く、次いで北側に市ヶ洞第2号窯など7世紀後半からの生産が確認されている。岩作城跡より南方へ約1.5㎞の範囲内には8世紀中葉～後半の須恵器を焼成した棒振第1号窯（NN-32併行）、山越第2号窯（NN-32併行）、三ヶ峯第3号窯、11号窯、10世紀後半～11世紀前葉の灰釉陶器を焼成した山越第1号窯があり、南東方向からのびる三ヶ峯丘陵には平安時代～鎌倉時代にかけての窯跡群が確認されている。

中世の城館跡では遺跡西方に岩作西城（推定）、東西二つの方形郭からなる平城であったという長久手城址のほか東方の熊張地区の丘陵先端に大草城跡がある。大草城跡測量調査では三方を土塁と帯曲輪で囲んだ主郭を中心に周囲に複数の曲輪を配した構造であったと想定されている。

参考文献

長久手町　1981『長久手町史』　資料編1
長久手町　1997『長久手町史』　資料編5考古
長久手町町史編纂委員会　1987『大草城跡地形測量等調査報告書』
愛知県教育委員会　1991『愛知県中世城館跡調査報告　Ⅰ（尾張地区）』
長久手町教育委員会　1976『山越第1・2号古窯』
三ヶ峰古窯発掘調査会　1999『三ヶ峰古窯発掘調査報告書―三ヶ峰第9号窯・第10号窯・第12号窯―』

表1　遺跡周辺の中世城館跡

	遺跡名	所在	形態	時期	規模	調査の有無
1	岩作（東）城跡	愛知県長久手町岩作	平城		44×32間	発掘調査
2	岩作西城跡	愛知県長久手町	平城		30×10間	
3	大草城址	愛知県長久手町熊張	平山城	天正12廃か	20×20間、土塁	測量調査
4	長久手城跡	愛知県長久手町	平城	天正12廃	29×24間	
5	床田城跡（俊田ヶ城跡）	名古屋市守山区	平城		西北と南東に堀、内側に土塁？（伝承）	
6	岩陽城跡	尾張旭市	平城		35×33間、土塁、堀有り	発掘調査
7	浦川城跡	尾張旭市	平城	12～13C成立か？	23×30間、土塁有り	発掘調査
8	新居城跡	尾張旭市	平山城		土塁	
9	新居町砦	尾張旭市	平山城			
10	岩田城跡	尾張旭市	平城	15C後半～16C半ば	36×36間、土塁、堀有り	発掘調査
11	藤戸川城跡	尾張旭市	平城	16～17C前半	30×55間(本丸)、土塁、堀有り	発掘調査
12	岩原城跡	尾張旭市	平城	正中年間創		発掘調査
13	岡山城跡	瀬戸市	平山城			
14	戸村城跡	瀬戸市	平城			
15	城ヶ根城跡	瀬戸市	山城			
16	梁野城跡	瀬戸市	平城		37×37間	
17	大津城跡	瀬戸市	平城			
18	上梁野城跡	瀬戸市	平城	弘安4廃		
19	岡山城跡	瀬戸市	平山城			
20	上村城跡	名古屋市名東区	平山城	明暦2頃創		
21	岩井城跡	名古屋市名東区	平山城			
22	岩崎城跡	日進市	平山城	天文7創、天正12廃	85×100間、46×42間(本丸)、土塁、空堀、掘立柱建物、鍛冶工房跡、井戸跡	第3次発掘調査報
23	本城城跡	日進市	平城	文亀3創／天文7創	20.5×21.4間	
24	梅森城跡	日進市	平城	天文初期創	30×27間	
25	北野本城跡	日進市	平城		16×14間	
26	藤村城跡	日進市	平城		29×44間	
27	浜戸城跡	日進市	平城	文明3創、文亀3廃	25×18間	
28	戸上城跡	日進市				
29	野方東城跡	日進市	平城		18×18間	
30	野方西城跡	日進市	平城		15×15間	
31	岡田城跡	日進市	平城			
32	梅森東城跡	日進市	平山城		18×24間	
33	梅森北城跡	日進市	平山城		24×32間	
34	岩原城跡	日進市	平城			

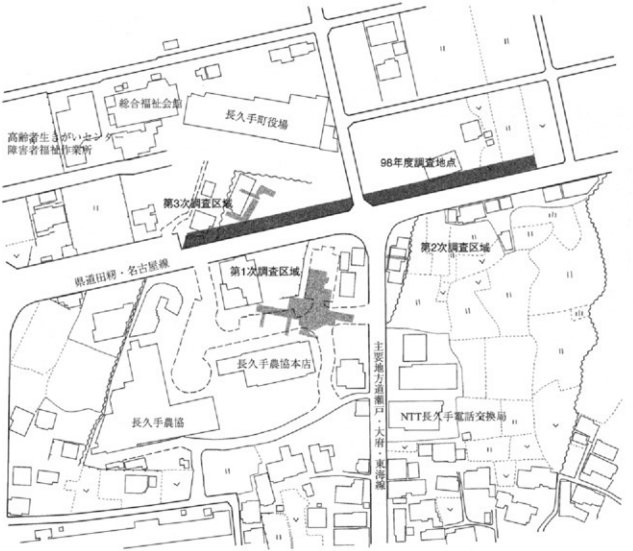
第3章　遺跡の調査

1　調査の概要

a. 過去の周辺調査

岩作城跡は遺跡番号（県15027）に登録されている中世城館跡であり、昭和60年に県教育委員会文化財課、岩作城址調査会（長久手町教育委員会）によって3次の発掘調査が行われている。これは長久手町農業組合店舗、駐車場建設、個人住宅兼店舗建設に伴う事前調査であった。第1次調査区域の範囲は岩作城の南側、大手門付近に相当しており、調査の結果、岩作城南辺の土塁の基部、井戸等が確認され、また14世紀後半～17世紀の陶磁器が出土するなど城の築成時期、存続期間についても大きな成果があった。

昭和60年調査で最も広く調査した第1次調査地区において検出された主な遺構は、岩作城南辺の「土塁」および虎口、作業場跡、井戸跡である。土塁付近に設定した第1,第2トレンチでは、江戸時代後期の近世陶磁を含む層、15～16世紀の陶磁が混入する盛土層をそれぞれ確認し、近世末



第5図　過去の調査地点（1/2,000）

以降の土塁の修復または畑地の整地の痕跡がみられた。ただし下層の黄色土層は（古い段階の）土塁の基部かと推定される。虎口付近では明治以降の土留のための木杭、花崗岩礫による補強の痕跡など後世の改変が明らかになった。報告書では、築成当初の形態は虎口そのものの単純な構造からみて「一重の土塁と濠に囲まれた方形単郭構造」であったと想定されている。居住空間となる土塁内側において検出された作業場跡では、大型の礫を含む10数個の石列とピット、周囲では炭が混じった焼土が検出されている。付近の井戸跡に廃棄された遺物は14世紀後半の山茶椀から17世紀中葉の瀬戸美濃産陶磁器であり、これが城館の成立から廃絶までの上限・下限の時期を示すものとなっている。明治18年地籍図から推定された土塁内外の水濠の有無について、確実な遺構の検出にはいたらなかった。

第2次調査区では明確な遺構は確認されていない。遺物は須恵器杯蓋（7世紀後半）、灰釉陶器長頸瓶（K-90）など古代の遺物も報告されている。

第3次調査区は地籍図より土塁、居住域の北側に配された園池などが想定されたが、実際にはそのいずれも検出されず、第2次大戦前の亜炭採掘穴1基が確認された。

この岩作城跡に関連して、古文献の記述に城の規模や城主について言及された部分がある。城主／規模／その他の項目に分け、表に示す。

表2　文献にみられる岩作城

資料名	資料成立年代	名称	所在	城主	規模	その他	
『寛文村々覚書』	寛文（1661～73）年年	古城跡		今井五郎太夫		今ハ畑ニ成。	
『張州府志』	宝暦2年（1752）	岩作城	在岩作村	今井五郎大夫			
『尾張徇行記』	文政5年（1822）	古城跡ニ区	東畠	今井四郎兵衛	一反ニ畝歩		
			西畠	鈴木権八	一反廿歩		
『尾張志』	天保14年（1843）	岩作東城	東畠	今井四郎兵衛	土居幅二間つゝ、ノ土居を省て東西四十四間南北三十二間／一段ニ畝歩	四面に土居の形猶残れり。／天正十二年四月九日岩崎籠城戦死の士に今井四郎三郎といふあるは四郎兵衛の子などにやあらむけむ。	
『愛知郡誌』	大正12年（1923）	岩作城跡／東城	長久手村大字岩作字城の内	今井四郎兵衛	東西四十四間、南北三十二間	西側細長の湿地あり、里人称して右外濠の残れるものなりと云ふ。	＊『尾張志』を引く
		西城					＊『尾張古城志』を引く
『岩作里誌』	大正13年（1924）			今井五郎太夫・四郎兵衛		里説には往昔年貢米事件激論の末村内某の濡損先が先頭に立ち城主を殺せしと傳ふ。／安昌寺記録及び過去帳に同人見えず、天正以前に全滅せし事明瞭也	

参考文献

長久手町教育委員会　1997『岩作城跡発掘調査概要報告書』

b．調査方法

調査前現況では、A区東半が水田であり、これより以西は道路と同じ高さに盛土・整地された宅地、畑、駐車場などであった。A区東半では層厚20～30cm水田耕作土層を、これより以西では厚さ約1mの整地層および旧水田耕作土層をバックホウで除去し、その後人力で遺構検出・遺構掘削を行った。城館土塁と思われる盛土部分では、数ヶ所にトレンチを設定し、一部分ではトレンチに沿ったベルト状に層位を確認しながら掘り下げを行った。

夏季までは地下水位の上昇により基盤層上位までが冠水し、作業期間中はポンプを常時稼動させて排水するなどして対応にあたったが、一部の遺構では最下層が確認できなかった。

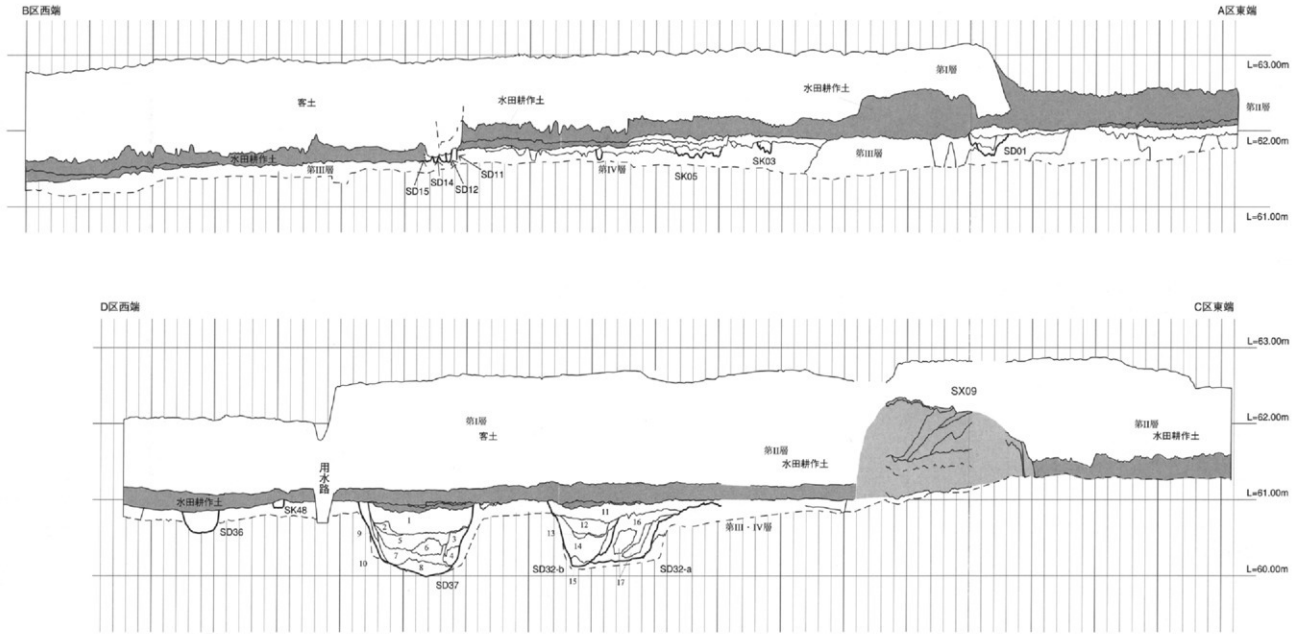
c．基本層序

調査区は、やや北にふれる東西方向の道路に沿って幅約8m、長さ約200mの細長い範囲である。調査区周辺は比較的平坦な水田地帯が広がっているが、地形は東部の丘陵から西側の沖積地へとわずかに下がっており、旧水田耕作土層下のレベルを基準とすれば200mの範囲で約100cmの傾斜が認められる。

基本層序は概ね以下の通りである。

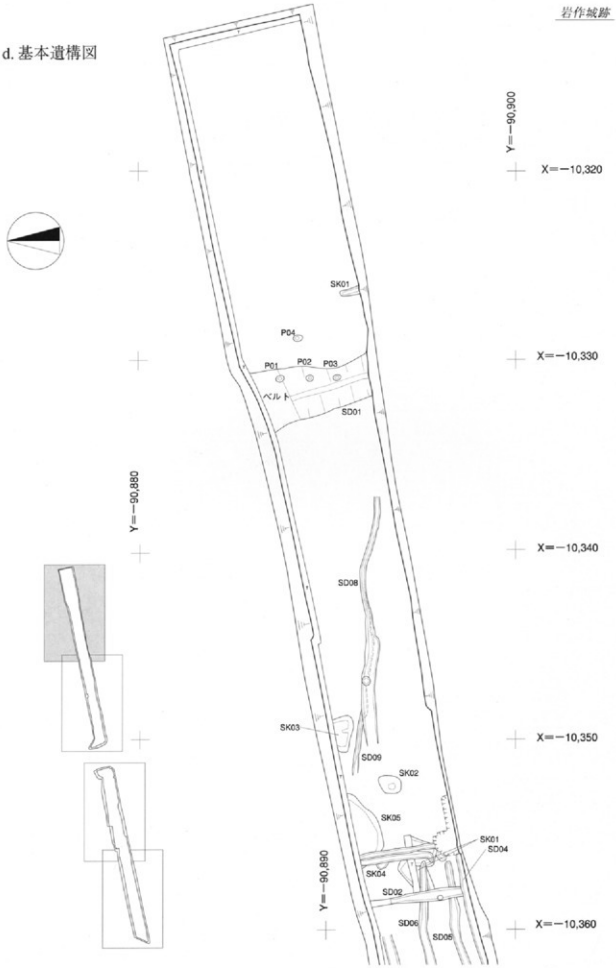
表土；礫を多く含む盛土（昭和40年代以降の整地層）
第I層；暗灰色砂質シルト層（旧水田耕作土）
第II層；暗褐色シルト層（包含層）
第III層；灰黄色粘土～シルト層（基盤層上層）
第IV層；灰黄色シルト～粗粒砂が充填する礫層（基盤層下層）

旧水田は昭和40年代に道路が建設されるまで耕作されていたもので、これ以前にすでに耕地整理が行われ、包含層は削平されていたものと思われる。調査では、第I層の水田耕作土および床土層で古代～近世の土器、陶磁器の細片を検出した。第II層は城館土塁と思われる盛土（SX09）の下層でのみ認められた。ただし、土塁構築時に攪拌されており堆積状況、遺構はともに明瞭ではなかった。時期、器種不明の土師器の細片や古代の須恵器片、中世陶器などが含まれる。この第II層上面で検出した主な遺構にはSX10がある。第III層は基盤を構成する粘土質の土層であり層厚5～20cmと一定せず、水田床土直下がすぐ第IV層に達する部分もみられる。遺構の大半はこの基盤層上位で検出した。

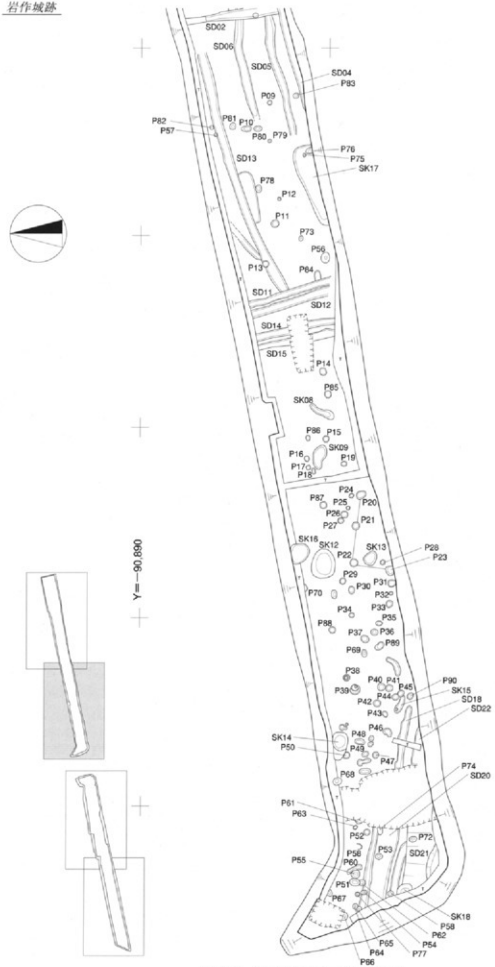


第６図　岩作城跡調査区北壁土層断面図

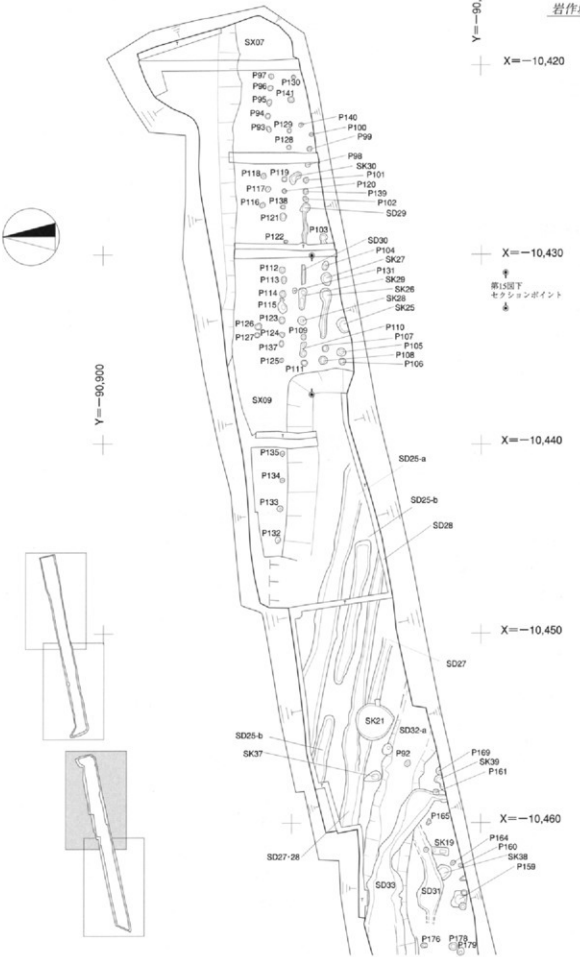
d. 基本遺構図



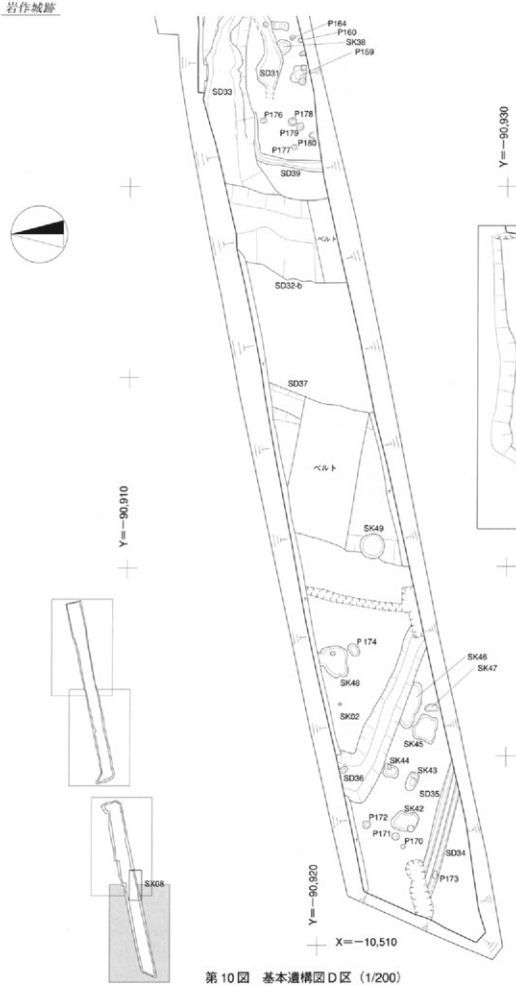
第7図　基本遺構図A区（S=1/200）



第８図　基本遺構図Ｂ区（S=1/200）



第9図　基本遺構図C区（1/200）



第10図　基本遺構図D区（1/200）

2　古代の遺構と遺物

調査範囲内では古代の明確な包含層は確認できなかったが、B区で基盤層を掘り込む土坑、ピット等を検出した。須恵器、灰釉陶器、古代の土師質土器等は中世以降の遺物包含層に混じりB区西半～C区（SX09）にかけての範囲に主に分布する。NN-32を中心とした時期にまとまりがみられ、8世紀末～9世紀初頭に集落が成立したと考えられる。

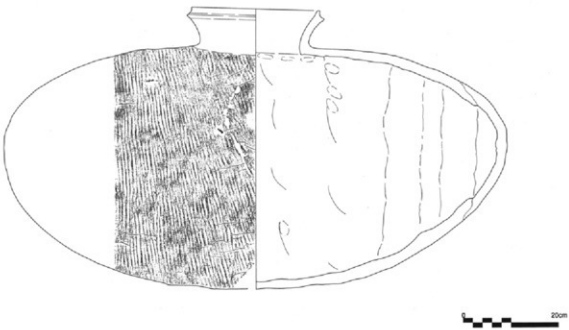
SB01　**SB01**　P20,21,22,23で構成される掘立柱建物跡。柱間は約180cm～198cm、Pit底のレベルは61.18～61.20m。埋土は砂混じりの黄灰色粘質土であり、基盤シルト層とは区別しづらい。

P31　**P31**　径約35cmの柱穴。SB01を構成する柱穴の規模、埋土とほぼ同様である。出土遺物は須恵器蓋（25）1点がある。

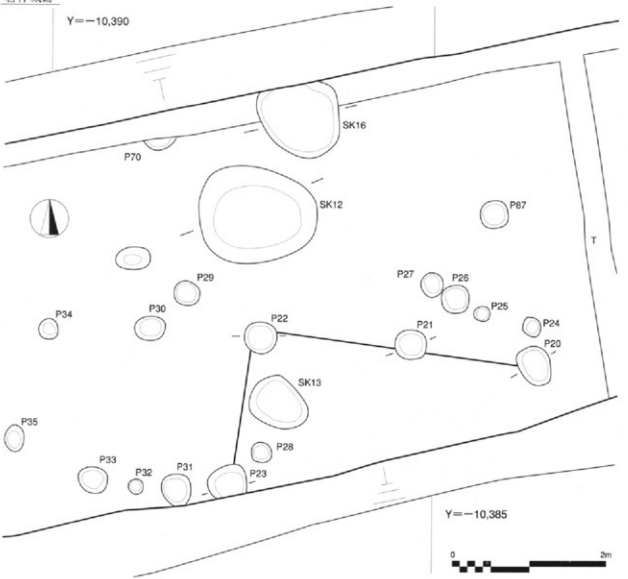
P38,39　**P38・39**　埋土暗灰色シルトの柱穴。P39下層から推定される柱の径は、径約12cm。遺物は含まれず。

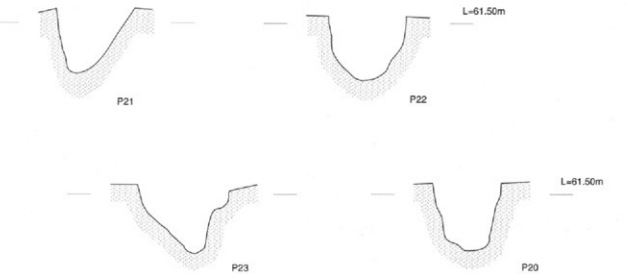
SK12　**SK12**　SB01の北西に掘削された円形の廃棄土坑であり、1.58×1.28m、深さは25cmを測る。(9)須恵器杯は焼成時に上下反転していたためか、平底底部が大きく内側に歪んでいる。胎土は白色砂粒を含みやや粗く、表面には黒色の斑点がみられる。外面底部回転ケズリ。(28)整の焼成は軟質で表面の摩滅が激しい。外面底部中央に糸切り痕をとどめる。蓋（26）の上半部はケズリ調整で、ツマミ部分を欠く。(18)土師器長胴甕は粗い刷毛目をもつ尾張型。

SK16　**SK16**　SB01の北西に掘削された楕円形の廃棄土坑であり、1.20×1.0m、深さは7cmを測る。須恵器椀（6）は、平底で底部糸切り痕を残す。蓋（24）の上半部はケズリ調整、擬宝珠形のツマミは低く扁平。(SK12出土資料と接合）土師器長胴甕底部（20）は径14cm前後の平底。埋土中には焼土の塊もみられた。

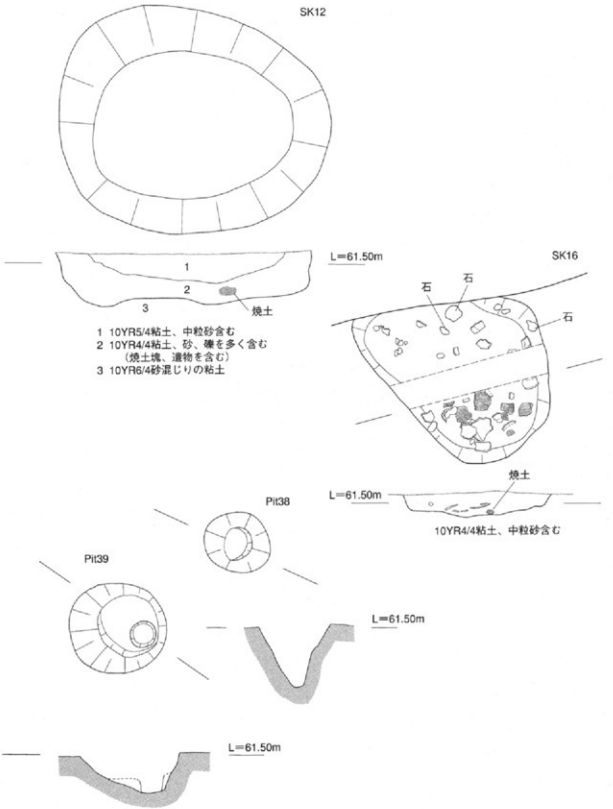


第11図　古代の遺物（1）

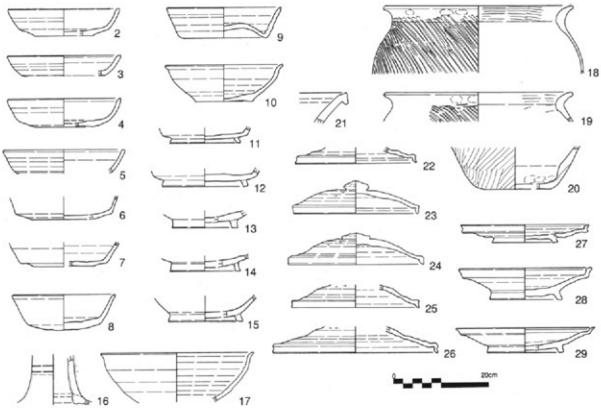




第 12 図　SB01 平面図（1/50）断面図（1/20）



第13図　SK12・16、Pit38・39平面図・断面図（S=1/40）



第14図　古代の遺物（2）

その他遺構外出土遺物

横瓶：(1) はA区下層で検出した段階で既に半分が欠損していた。胴部上半に焼成段階に生じた大きなひび割れがみられる。口縁部の残存は2/12程度。

杯A（体部が直線的に開く、高台なしの平底）：体部に僅かに丸みをもち口縁部内側がやや肥厚するもの（2,3,4,5）、体部が直線状にのび細く収まるもの(8)がある。底部が突出して腰部に稜をもつ個体が多く。底部は回転ケズリ。(8)外面底部は手持ちでのケズリ調整。粘土を追加しておりやや厚い。

杯B（輪高台）：体部、底部の境が明瞭。12は高台畳付に浅い沈線がめぐる。

椀A（深みのある体部が丸く彎曲する、高台無し）：17外面全体に自然釉がかかり、焼成時に蓋として利用されたと思われる。器厚は薄く一定し比較的丁寧なつくりである。10と同じ平底の椀であろう。

盤：高台をもち口縁端部を上方に折り返すもので、(29) は端部が細くなり外へ開く。13,14は底部中央が厚くやや下がり気味で盤（または杯）の底部と思われる。

瓶類：(16) は長頸瓶の頸部で三段接合技法。接合部やや上に2または3条の沈線がめぐる。他の須恵器等とほぼ同時期と思われる。(15) の胎土は比較的精良であり、水注か水瓶の底部片と思われる。

図示していないがその他器種に高脚盤、大型の壺・甕類、また少量の灰釉陶器椀、皿、瓶類などがある。墨書等は確認されなかった。

3　中世以降の遺構と遺物

中世の遺構

SD01　SD01　基盤（黄灰色粘質土層）上面で検出した最も幅広の部分で3.4m、深さ40cmの南北方向の溝である。埋土は灰褐色のシルト～粘質土で礫を含まず、漸次埋積したものと思われる。出土遺物は13世紀後半～14世紀前半の灰釉系陶器椀、皿、無釉の卸目皿など。溝に沿う西側には幅約80cmの硬く締まった部分が続いており、この直上は近世以降の水田大畦であった。（第6図北壁土層図参照）調査範囲内でこれより東側に遺構は展開しない。

SX10　SX10　鍛冶作業に関連する痕跡と思われる。SX09（岩作城土塁）構築以前の面で検出した。砂質土の埋土に炭化物を多く含む不整形の溝状の落ち込みであり、調査区南壁付近で炭化物の濃合が最も多い。調査範囲外南側の作業地点（推定）から廃棄物が流れて溝状に堆積したものと思われる。南寄り炭化物の濃合が多い部分の下層では、ホルンフェルス、チャートなどの30cm大の角礫が集中し、一部には被熱の痕跡がみられる。SX10とこの周辺に鉄滓の分布の中心があり、埋土からは少量ではあるが微細な鍛造薄片を採取した。（鉄滓については第4章1で分析結果とともに詳述する。）

SK40　SK40　SX09盛土の礫層掘り下げの際に灰釉系陶器の椀・皿類、片口鉢、大型の甕の破片等集中地点を検出した。平面プランは明瞭でないが、1.5×0.7m程度の楕円形の範囲に遺物が集中する。甕の口縁部は検出されず、内面はヨコ方向の工具ナデ、外面にも刷毛目状のナデ跡がみられる。多数の甕破片は同一個体と思われ廃棄土抗（甕）の下方の残存部分であったと思われる。SX10とほぼ同時期の遺構と思われる。

SK14　SK14　1.5×0.8m、深さ22cmの土抗で、平面楕円形、下層は正円に近い。遺物は尾張型8,9型式段階を中心とした灰釉系陶器椀、皿、片口鉢など。（第20図91,92）

SD27　SD27　基盤（黄灰色粘質土層）上面で検出。幅60cm、深さ11cmの東西方向の溝である。西側で重複するSD28より先行して掘削されている。また調査範囲外となるがSX09（岩作城土塁）直下に延長してのびることが予想される。出土遺物は少量で、灰釉系陶器椀、皿類（尾張型8,9型式段階）、土師器皿などがある。

SD28　SD28　基盤（第III層灰黄色粘質土層）上面で検出。幅75cm、深さ20cmの東西方向の溝である。SD27に重複して掘削されている。SD25-a、SD25-bなどと軸線を同じくする。少量の瀬戸・美濃産陶器、土師器皿など15世紀半ば～後半の時期を示す。

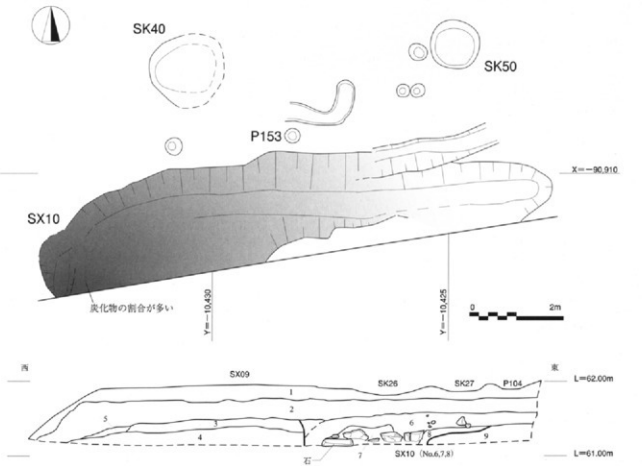
SD25　SD25　基盤（第III層灰黄色粘質土層）上面で検出。上層は水田耕作の影響を受け鉄分の沈着が多く掘削段階では判別できなかったが、実際には2条の並行する溝であった。北側（SD25-a）は幅105cm、深さ14cm、南側は幅105cm、深さ14cmを測る。2条は側溝のようなもので、南側（SD25-b）の溝は一部途切れており屋敷地などへの出入口と思われる。出土資料の下限は15世紀半ば～後半の時期にまとまりがみられる。

SD32　SD32　基盤（第III・IV層灰黄色粘質土～小礫層）上面で検出、C区ではSX08盛土の下となる。当初L字に屈曲する溝として調査を行ったが、実際には廃絶時期が前後する2条の溝であることが判明した。ただし、2条が重複する地点の断面観察では、溝の肩はなだらかで平面ではゆるやかなカーブを描く。ある時期L字状のコーナーの形状であったと思われるが、東西方向の溝（SD32-a）が先に廃絶している。東西方向は検出面で幅3m、深さ60cm、断面は逆台形状で底面

の幅は1.5mを測る。南北方向（SD32-b）は検出面で幅4.1m、深さ85cm、断面は逆台形状で底面の幅は1.8mを測る。これらは屋敷地を区画する溝と思われる。南北方向（SD32-b）の下層は粘土の堆積があり、SD32-a廃絶の後もしばらくは機能していたと思われる。中位以上は基盤層と同じ小円礫を多く含み短期間に埋められた様相を示す。D区検出部分のうち南北方向の溝は、東側からまず大型（15cm以上）の角礫が埋められ、次いで基盤層と同様の小円礫を含むシルト～粘質土が埋積する。角礫はこの周囲の建物など何らかの構造物に用いられていたものが東側より投棄されたと考えられる。遺物は上層に多く、古瀬戸後期後半段階を中心とする瀬戸美濃産陶器、常滑産大甕などがある。

SD36　SD36　基盤（黄灰色粘質土層）上面で検出。幅1.45m、深さ40cmのL字状に屈曲する溝であり、断面は緩やかに落ち込む浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂の混じる灰黄色シルトである。北部系の灰釉系陶器椀・皿、土師器皿、内彎型羽付釜のほか平碗1点があり、14世紀後半～15世紀前半の時期を示す。屋敷地の区画溝か。

SD37　SD37　基盤（礫混じり黄灰色粘質土層）上面で検出。岩作城の西辺を画する堀跡と推定される。幅7m、検出面より深さ約1m。溝の落ち込みは比較的緩やかで、最下層には青灰色の粘土層が堆積する。下層以上は基盤と同様な礫が大量に混じる粘質土層で、後述するSD38とは規模、形態、埋

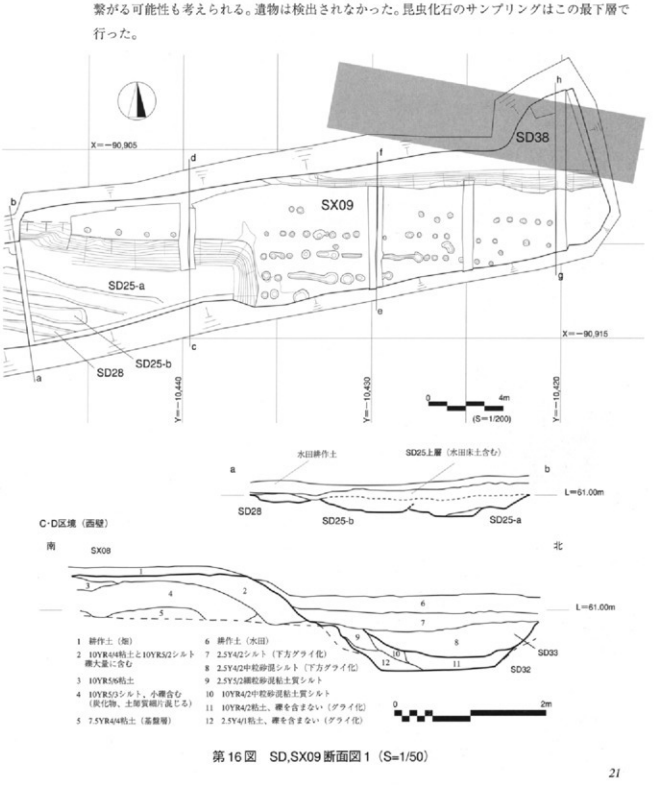


第15図　SX10平面図（S=1/80）・断面図（S=1/50）

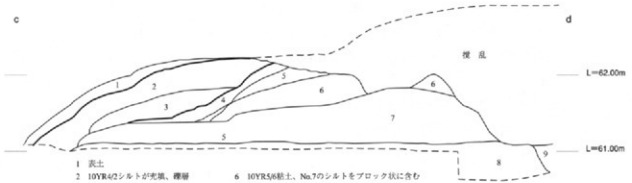
土ともに様相が異なる。短期間に埋められ廃絶したとみられる。西辺の土塁が想定されるSD37東側の地点には中世の遺構はなく、盛土の痕跡もみられなかった。（第6図北壁土層図参照）

SD38

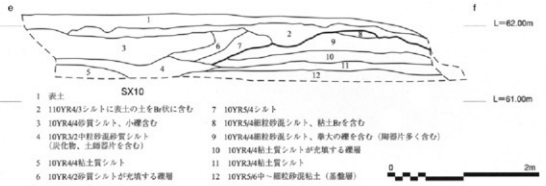
SD38　調査範囲が狭いため、平面で広くとらえることはできなかったが、岩作城の北辺を画する堀跡と思われる。SX09（土塁）と軸線が同じであり、掘削時の廃土が土塁の盛土に利用されたと考えられる。溝の上端は幅4.0m、下層幅80cm、深さ70cmを測る。断面は逆台形。最下層は層厚15cm程度の暗灰色粘土層の堆積がみられ、下層以上は砂が堆積し洪水等の影響を受け廃絶したとものと思われる。SD38以外に同様な砂層はみられず、堀が調査区外で外部の河川（水路）に繋がる可能性も考えられる。遺物は検出されなかった。昆虫化石のサンプリングはこの最下層で行った。



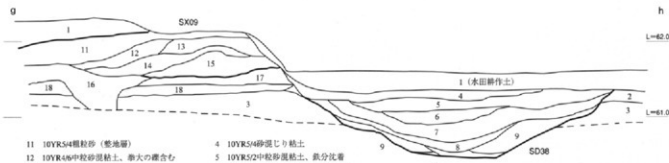
第16図　SD,SX09断面図1（S=1/50）



1 表土
2 10YR4/2シルトが充填、礫層
3 同上、拳大の礫多く含む
4 10YR4/4中粒砂混シルト
5 10YR4/2シルトが充填、礫層
6 10YR5/6粘土、No.7のシルトをブロック状に含む
7 10YR4/3細粒砂混粘土質シルト
8 7.5Y4/4粘土（基盤層）
9 細粒砂～シルト（SD38続きか？）



1 表土
2 110YR4/3シルトに表土の土をBr状に含む
3 10YR4/4砂質シルト、小礫含む
4 10YR3/2中粒砂混砂質シルト
（炭化物、土師器片を含む）
5 10YR4/4粘土質シルト
6 10YR4/2砂質シルトが充填する礫層
7 10YR5/4シルト
8 10YR5/4細粒砂混シルト、粘土Brを含む
9 10YR4/4細粒砂混シルト、拳大の礫を含む（陶器片多く含む）
10 10YR4/4粘土質シルトが充填する礫層
11 10YR3/4粘土質シルト
12 10YR5/6中～細粒砂混粘土（基盤層）



11 10YR5/4粗粒砂（整地層）
12 10YR4/6中粒砂混粘土、拳大の礫含む
13 10YR4/3中粒砂混粘土
14 10YR5/3中粒砂混シルト～粘土、礫少ない
15 10YR4/3中～粗粒砂、礫多く含む
16 SX10東端付近粗土
17 10YR5/3中～粗粒砂混シルト、礫多く含む
18 No.21に同じ、鉄分沈着
4 10YR5/4砂混じり粘土
5 10YR5/2中粒砂混粘土、鉄分沈着
6 10YR6/1粗粒砂、粘土レンズ状堆積
7 10YR5/1中～粗粒砂、粘土レンズ状堆積
8 2.5YR6/1粘土
9 10YR4/2中～粗粒砂が充填、拳大礫層
10 10YR3/3粘土、腐植質含む
（昆虫化石サンプリング地点）
1 表土
2 10YR4/6中粒砂混シルト（上部土壌化）
3 10YR5/4粗粒砂、礫

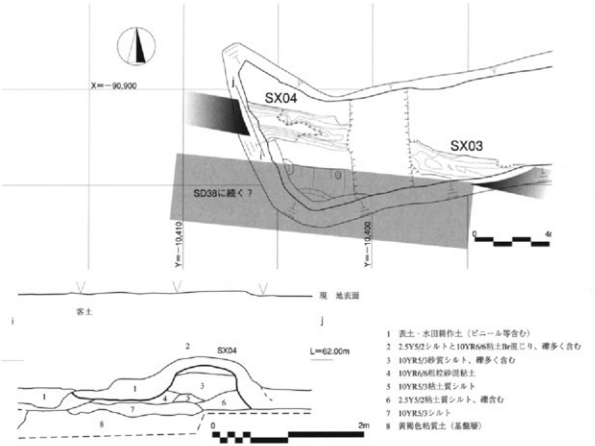
第17図 SX09、SD38断面図（S=1/50）

SX09　SX09　基盤層の礫を大量に含む盛り土である。これが「岩作城」土塁の痕跡と思われる。検出された規模は土塁上端のレベル62.2m、基部は幅約6mで、レベル61.05m。SD38底との比高差は約1.6mである。平面形態ではSD38に沿って帯状にのびる部分と、土塁上端とほぼ同じレベルで整地された平場の部分がある。土塁断面では下層の基部に近いところで、SD38に沿って断面半円形、カマボコ状の盛土があり(SX09土塁基部)、盛土の堆積層は基盤堆積層が逆転した順となっている。この盛土の内側（南側）平場（SX09整地層）と上部は基盤と同じ礫層で構成される。土塁は上部の崩れや、後世水田耕作の際の造成によって当初の形態とは異なるものと考えられる。大量の礫からなる盛土には須恵器、灰釉陶器、灰釉系陶器、瀬戸美濃産陶器など各時期の遺物を含む。15世紀後半～16世紀初頭に出土資料の時期下限があり、SX09に先行する溝との関係から16世紀初頭をさほど経ない時期に土塁が構築されたと考えられる。上面の土坑・ピット等は、現代の耕作地に関連する撹乱。

近世～現代の遺構

SX08　SX08　近世の陶器片を含む礫混じりの盛り土層である。上部は削平されているが、明治17年地籍図では細長い水田に囲まれた島状の畑地となっている。盛土には灯明皿、腰錆碗、染付碗、皿類などが含まれる。

SX03・04　SX03・SX04　近代（～現代）の水田に伴う大畦。幅1.4～1.6m、断面はカマボコ状で、水田面との比高差は約40cm。表土にはビニールなどが含まれる。明治17年地籍図では、この位置で道がのびており、岩作城外堀の北側を画するラインと推定される。



第18図　SX03,04 平面図（S=1/200）・断面図（S=1/50）

中世以降の出土遺物

中世の主な遺構は溝と土塁であり、一括性のある良好な資料は得られなかった。したがって出土遺物の時代観はかなりの幅をもっている。そこで出土遺物の時期別分布傾向と遺構の時期下限の判断材料としてカウント作業を行った。カウントの対象とした遺構は、岩作城土塁（SX09、粘土層の基部を「土塁」その上の礫層を「整地層」に分層）、これに近接または重複関係のある土塁構築以前の遺構（SD25,SD32・33,SD27,SD28）である。計測方法は、灰釉系陶器椀、皿類のみ接合後の総破片数で行い、その他の器種については**接合前の総破片数**をカウントした。なお、器種・時期の分類は瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏、金子健一氏に御教授いただいた。

SX10　SX10（鍛冶関連遺構　第19図）：炭化物を多く含んだ灰褐色砂質シルト層の埋土に含まれる。灰釉系陶器椀が大半を占め、尾張型では第7・8型式、北部系では大畑大洞古・新段階の資料が中心となる。13世紀後半～14世紀前半を主体とする。瀬戸・美濃産陶器では洗（76）、折縁深皿（77）は古瀬戸中期段階に比定されるものである。折縁中皿（75）、天目茶碗（78,79）、大型の筒形香炉（80）、花瓶（81）は古瀬戸後期後半段階で、これらは直上のSX09の混入と思われる。陶器以外には鉄滓を多く出土した。（第4章1に詳述）

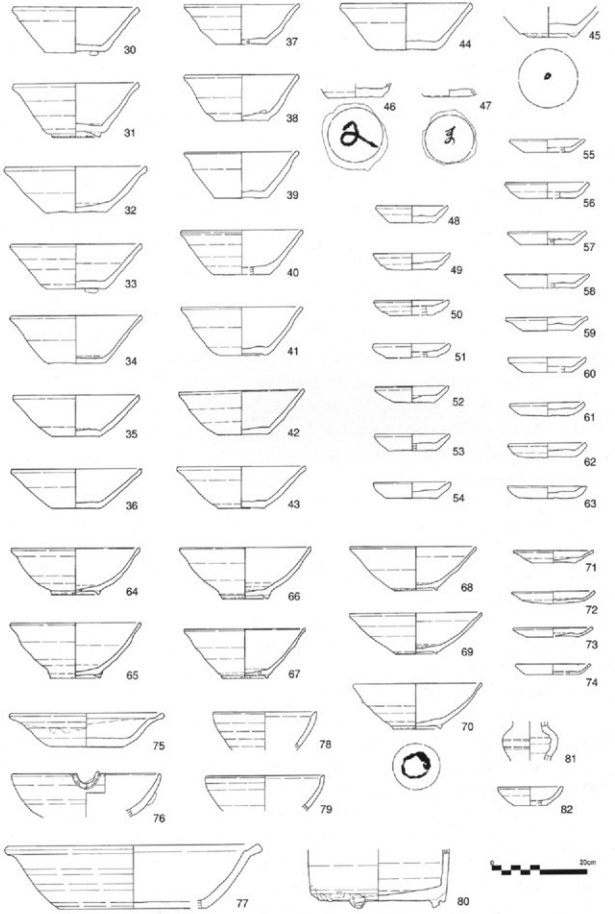
P174　P174（第20図83～90）：75×50cmの土坑から灰釉系陶器椀がまとまって出土した。第8型式段階に加え、第9型式段階の個体があり、これらの胎土は比較的密で白っぽく、底部径は一定せずばらつきがみられる。内外面の一部に油煙の煤が付着するものが多い。

SX09　SX09（第20図93～，第23図，第24図219～240）：岩作城の土塁の盛土（砂混じりの礫層）に含まれる資料である。土塁構築以前の遺構および包含層を破壊しているため、須恵器、灰釉陶器から16世紀初頭の瀬戸美濃産陶器までの幅広い時期の遺物が含まれるが、今回の調査区全体の時期別分布傾向を示すものとなっている。少量含まれる近世遺物腰硝擂（238）、長石釉の碗（239）などは、表土層の混入と思われる。灰釉系陶器では、尾張型は第7・8型式段階、北部系は大畑大洞窯段階にピークとなるが、その後も一定量が継続して出土している。尾張型灰釉系陶器のピークはSX10すなわち鍛冶が行われていた時期に相当する。古瀬戸は前期から後期までみられるが、主体となるのは後期後半段階であり、おそらくはSD28,25,32で区画される屋敷地の存続期間を示している。（197）は平底末広碗、古瀬戸中期Ⅱ段階。（205）は筒状の容器で器種は不明。内外面は薄く灰釉がかかり外面周囲に上段に格子の文様、その下には2段の波状文が付く。（207）は径9.6cm白磁皿。底部付近は露胎で高台畳付に4ヶ所の抉りがあり、内面見込に目跡が残る。（219）は小型の瓶子または水注と思われる。表面の鉄釉はほとんどが剥離している。印刻の花文、葉の文様パターンなどから品野北第1号窯 (1) で焼成されたものと思われる。古瀬戸中期Ⅰ段階。

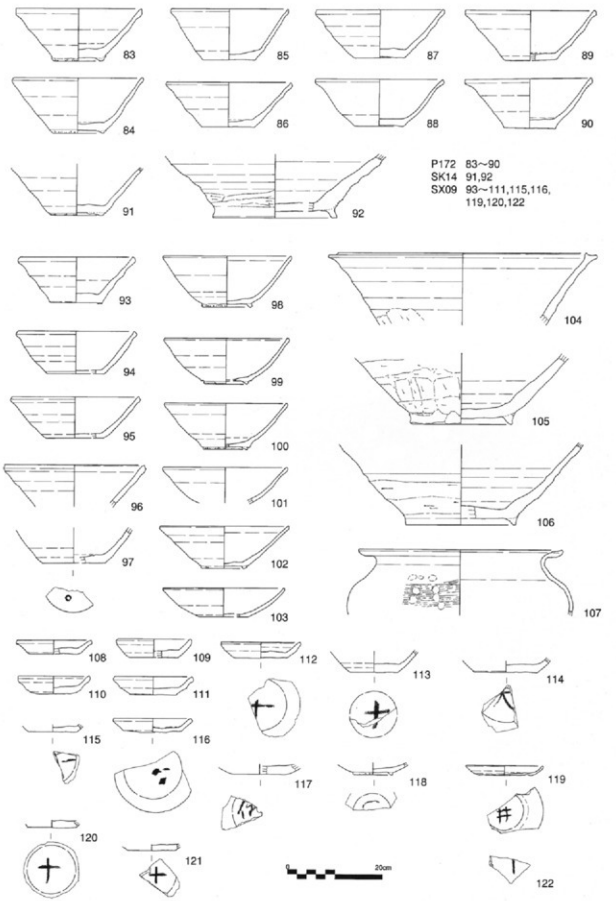
SD36　SD36（第22図160～164）：（160）は古瀬戸中期Ⅳ段階の平椀。その他には北部系大洞東段階の椀、皿、土師質内彎型羽釜がある。図示できないが土師器では南伊勢型鍋もわずかに検出している。

SD27・28　SD27（第22図185,188）・SD28（第22図181～184,186,187,189～191）：2条の溝は重複関係にあり、SD27が先行する。SD28は古瀬戸後期Ⅲ・Ⅳ段階の資料が中心となる。土師質の皿は細片が多く、図化できる資料は殆どない。径約7cmの手捏ねのもの（186,187）と径10～11cmのロクロ整形のもの（188～191）がある。明瞭な使用痕は認められない。

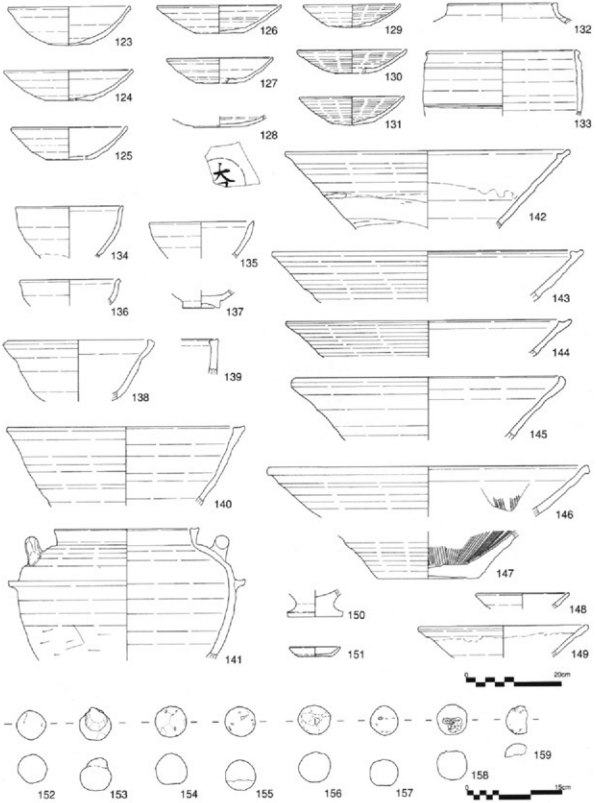
SD25　SD25（第21図123～149）：上層とした部分は一部水田床土層も含み、細片が多く近世遺物も混入している。下層でとらえたSD25-aとSD25-bではやはり古瀬戸後期後半を下限とする。下層では比



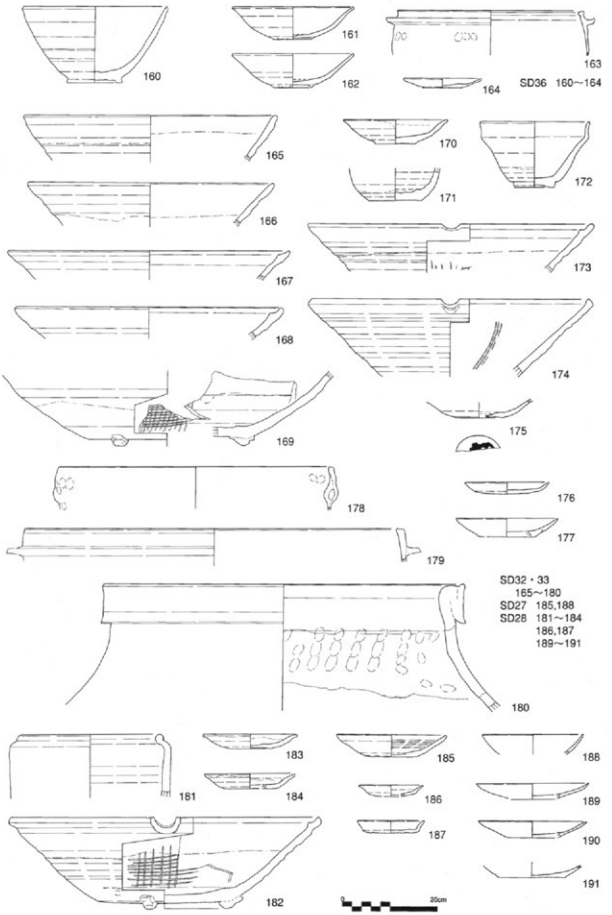
第19図　中世以降の出土遺物（SX10）



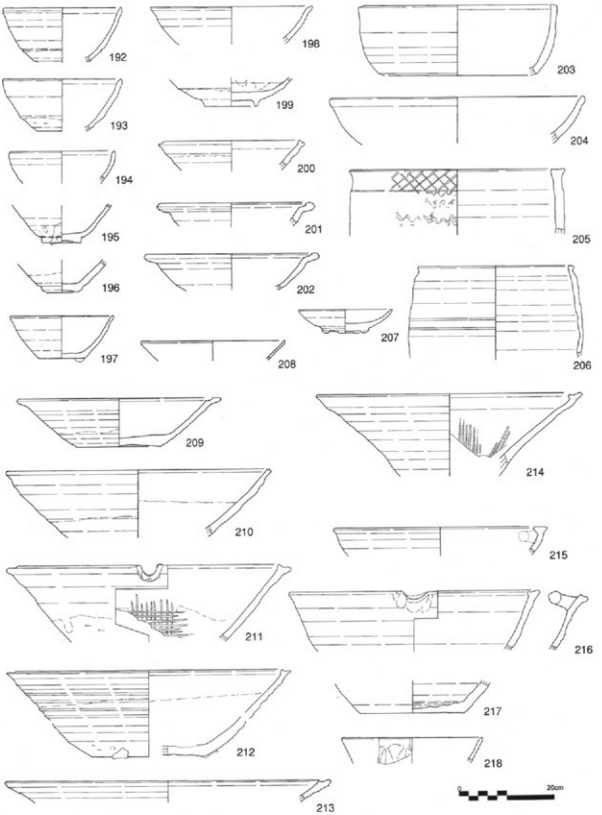
第 20 図　中世以降の出土遺物（P174,SK14,SX09 墨書陶器）



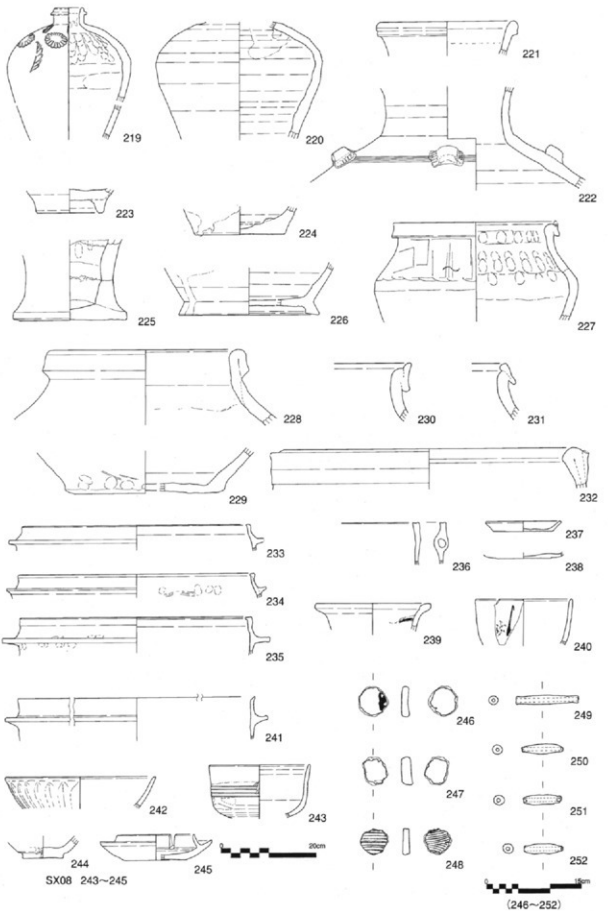
第21図　中世以降の出土遺物（SD25, 陶丸）



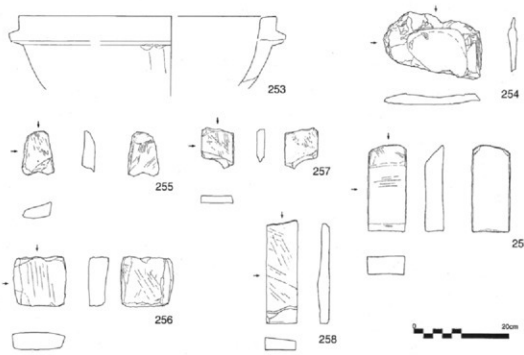
第22図　中世以降の出土遺物（SD36、SD32・33、SD27、SD28）



第23図　中世以降の出土遺物（SX09）



第 24 図　中世以降の出土遺物 6（SX09、SX08 その他）



第25図　石製品

較的大きい破片が多い。(136) 天目茶碗は大窯4前半段階、(148) は大窯Ⅱ段階の稜皿。灰釉系陶器は北部系の脇之島窯と生田窯段階にまとまった資料がある。その他に硯1点 (254) がある。

SD32　SD32 (第22図165～180)：古瀬戸後期Ⅳ段階が主体となる資料。(172) 天目茶碗の高台は露胎で体部上位のくびれが鋭く、稜をなす。常滑産の壺・甕類は主に上層 (SD33か) で出土した。

SX08　SX08 (第24図242～244)：近年まで上部が畑として利用されていた礫を含む盛土からは、灰釉系陶器、天目茶碗、青磁碗、腰錆碗、灯明皿など中世～近世の陶磁器類など細片が混在して出土した。

その他　**土製品** (写真図版) 260は型押しの土製模造貨幣。表に「一分銀」、裏は「定　銀座常是」(2) か。

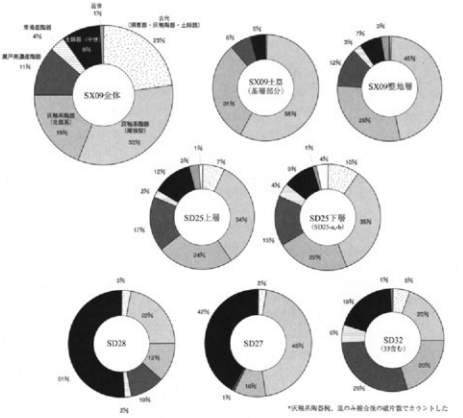
墨書陶器 (第20図45～47,70,97,113～123,128174)：墨書される部位はいずれも灰釉系陶器椀、皿の外面底部である。判読不明のものが多いが、「十」「井」「大」「大□」や仮名などの文字、「・」「∵」「○」など記号状のもの、花押状のもの (46,70,175) がある。

陶丸 (第21図152～159) 計7点を検出した。重量は12.5～16.8g。(153) には陶器片が融着する。(157) は籾跡がみられる。

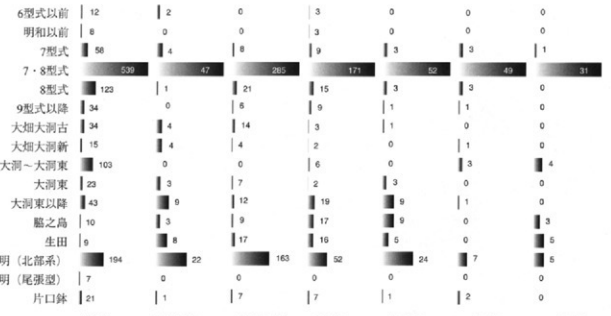
(1) 藤澤良祐 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』Vol.8
(2) 金子健一編 1992『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集

4　石製品

滑石製の石鍋片 (253) 1点。鍔の付近の破片で、口径は推定で14cm前後となる。外面に煤が痕跡程度に付着する。(254) の硯はかなり激しく使用され、陸部が磨耗し大きく窪んでいる。破損した後も加工し再利用した可能性がある。石材は頁岩。出土地点はトレンチであるが、SD25-aに含まれる可能性がある。(255～259) は砥石。(256) の石材は砂質凝灰岩、その他は凝灰岩である。時期は不明であるが、近世まで下る可能性もある。



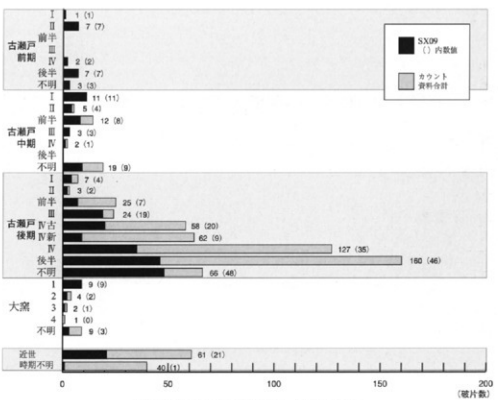
第 26 図　遺構別遺物組成



第 27 図　灰釉系陶器椀・皿類　時期別分布

表3　土師器・須恵器・灰釉陶器・磁器　遺構別破片数

		SD09			SD32・33	SD25上層	SD25-a	SD25-b	SD27	SD28	合計
		分層なし（ベルト含む）	土層	整地層							
土師器	兵庫鍋	0	3	2	1	0	0	3	0	0	9
	清輪型鍋	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	土師器皿（ロクロ）	38	2	0	6	4	12	1	4	17	84
	土師器皿（不明）	36	0	0	28	87	0	9	30	49	241
	土師器か？	44	7	4	5	15	28	7	18	8	136
	南伊勢系鍋	5	0	2	0	0	0	0	0	0	7
	内湾形羽釜	6	7	1	7	1	1	0	0	0	23
	鼎・釜か？	0	7	8	4	0	9	3	0	0	37
	半球形内耳鍋	2	0	0	1	2	1	1	0	0	7
	土錘	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	不明	8	14	12	0	0	0	0	0	0	34
	合計	141	41	29	52	116	51	24	52	74	580
須恵器	高坏	1			0	0	0	0	0	0	1
	坏	1			0	0	0	0	0	0	1
	蓋（ツマミ付）	32			3	12	5	1	0	0	53
	杯A（高台なし）	30			1	0	2	0	0	0	33
	杯B（輪高台）	14			0	0	0	0	0	0	14
	椀A（高台なし）	13			0	0	0	0	0	0	13
	椀B（輪高台）	5			0	0	0	0	0	0	5
	盤	12			0	0	0	0	1	0	13
	杯・椀か？（小片）	204			1	18	8	2	0	1	234
	盤・杯B・椀B か？（底部）				0	0	1	0	0	0	1
	小型壺・瓶類	5			3	0	5	0	0	0	13
	大型壺・甕類	180			4	5	8	4	0	3	204
	瓶	1			0	0	0	5	0	0	6
	不明	3			0	11	18	2	2	0	36
	合計	501			12	46	47	14	3	4	627
灰釉系陶器	椀・皿か？	6			1	18	4	0	0	0	29
	椀	0			0	0	3	1	0	0	4
	皿	0			0	0	0	1	0	0	1
	その他	7			0	0	0	0	0	0	7
	合計	13			1	18	7	2	0	0	41
磁器	白磁椀・皿類	0			0	0	0	0	0	0	0
	青磁椀・皿類	1			0	1	0	0	0	0	2
	合計	1			0	1	0	0	0	0	2



第28図　瀬戸美濃産陶器　時期別分布

表4　出土施釉陶器の組成

（SX09,SD32,SD25,SD28,SD27 資料のみカウント、接合前破片数）

		前期						中期							後期							大窯						近世	不明	合計
		I	II	前半	III	IV	後半	不明	前期II：中期II	I	II	前半	III	IV	後半	不明	I	II	前半	III	IV古	IV新	IV	後半	不明	後期II：大窯1	1・2	2	3	4	不明			
椀	平椀																				2			5		1								8
	天目茶椀																				3	3	7	8	4	2				1	1			29
	平底末広椀										1																							1
皿	底部目皿					1						2																						3
	折縁小皿											1				1																		2
	腰軸小皿													1					1	4		12	4	3	15									40
	折縁中皿												3							1					3	1								8
	腰縁中皿																							3										3
	腰折皿																					3												3
	那須		1			1					1	1					1	1			6			1		3								16
	端反皿																																	0
	端反皿か丸皿																										2							2
	重弧皿																											1						1
	稜皿																										1							1
	内禿皿																												1					1
鉢・擂鉢	折縁深皿										3	2			1		6	1																13
	腰縁大皿																		1	6	5	2	5	2										21
	那目付大皿																			7	19	17	10	2										55
	那目付鉢											2																						2
	擂鉢																		5	2	2		15	34	4									62
	擂鉢																			3	2	27	31	10		8	1							83
	洗		3																															3
壺・瓶	四（三）耳壺	1	2												1					4			1	5	2	8								24
	甕子						7					1			1					1				11										21
	花瓶																																	0
	片口小瓶																							1										1
	口広有耳壺																						5	1										6
	広口壺																			1														1
	壺・瓶類							3							10								3	10	16							1	43
	筒形容器																				1			1										2
	茶壺（福母懸壺）																							8	5									13
	水注		1																					4										5
	水注か瓶子									10																								10
その他	種壺形香炉																																	0
	筒形香炉																				2													2
	香炉か花瓶																							2										2
	茶入																																	0
	水筒																								6									6
	仏供											1																						1
	蓋																						3											3
	焼付片口														2																			2
	内耳鍋																						3											3
	鍋																						1	20										21
	土瓶、鍋、釜類																						5	9	1									15
	橋																						16	1										17
	入子								1																									1
	ハサミ皿																										1							1
	エンゴロ																													7				7
	緑釉（器種不明）																													1				1
	不明											1			2					7				28	19						40	20	117
合計		1	7	0	0	2	7	3	1	10	6	10	3	1	17		7	3	26	24	50	61	127	163	66	8	1	3	1	3	1	8	40	21	674

第4章　自然科学分析

1　金属製品・鍛冶関係資料

a. 金属製品

鉄製品では火打鎌1点（第28図260）、釘4点（第29図261・263）、刀子状鉄製品1点（262）が出土した。火打鎌は欠損部があるが刃長6.7cm、刃幅2.6cm、厚み0.2cmである。銅製品ではキセル雁首1点（264）出土している。鉛玉も1点（265）出土した。

b. 鉄資料の分布と構成

平成10年度に発掘調査された岩作城跡の98C区の東端側のSK40・SX10・SX09から多くの鉄滓等が出土した。これらの遺構の詳細は本報告において先述されているので省略するが、鍛冶関連資料とされる椀型滓、流動滓、含鉄遺物、鉄塊系遺物、フイゴの羽口、鍛造剥片、粒状滓について報告する（第28図266～272）。

鍛冶関連資料は98B区西端から98C区東端にかけて集中的に出土しており、ほぼ1つの遺物群として、認識できるものである。98C区のSK40とSX10は13世紀末～14世紀前半の時期のもので、SX09はこれらの時期の遺構を削りSK40・SX10の上に整地・形成された土塁状盛土にあたる。そのためSX09は古代から大窯期にいたる遺物を含むものであるが、SK40・SX10を中心とする時期の遺構から入ったものと考えられる。

今回分析した資料全体（先述した1群と考えられるもの）では、椀型滓126点、流動滓A19点、鉄塊系遺物2点、含鉄遺物12点、フイゴの羽口3点、鉄製品5点、鍛造剥片5点、粒状滓10点がある。この中で特徴的であるのは、椀型滓が資料全体（鍛造剥片・粒状滓を除く）で77%と圧倒的に多い点、流動滓とする鉄滓において表面の気泡が少なく黒色～黒褐色のガラス質1である流動滓Aのみである点、含鉄遺物・鉄製品・鉄塊系遺物を合わせて17点で全体の11%と少ない点である。椀型滓では比較的均質で気泡が少ないものが多いのも1つの特徴である。これらの特徴はSK40・SX10の鉄資料においても同様な構成を示しており、遺構ごとの違いは存在しない。また鍛造剥片・粒状滓の検出できたことは、近辺で鍛冶が行われた証拠と言える。

＊鍛冶関連資料についての分類は、鈴木正貴・藤山誠一2000「愛知県における鉄器生産を考える（4）朝日西遺跡を中心に一」『研究紀要』1、愛知県埋蔵文化財センターに基本的に依っている。

c. 椀型滓の形状と密度（第29図）

椀型滓は上面の形状と下面の形状により分類する。また鉄滓の密度を計測した。

椀型滓上面の形状から上面の気泡が少なくやや盛り上がりのある椀型滓A、上面の気泡が少なく比較的平坦な椀型滓B、上面の気泡は少ないもののやや凹凸がある椀型滓Cに分ける。また下面の形状からそれぞれ鉄滓断面の下面の立ち上がりが比較的明瞭な椀タイプ、鉄滓断面の下面の立ち上がりが不明瞭で全体が平たい平タイプに細別する。

椀型滓の上面形状が分かるもので、椀型滓A9点、椀型滓B95点、椀型滓C14点と上面形状では81%が椀型滓Bである。下面形状の分かるものでは、椀型滓Aでは椀タイプ6点、平タイプ2点、椀型滓Bでは椀タイプ38点、平タイプ18点、椀型滓Cでは椀タイプ6点、平タイプ1点と椀タイプが多く、平タイプが少ない。椀型滓Bで椀タイプと平タイプの比率がほぼ1：2と他の椀型滓に比べて平タイプが多い。

椀型滓の密度では全体で密度2.7g/cc以上～2.9g/cc未満をピークとする正規分布をしており、2.4g/cc以上～3.1g/cc未満において大部分を占める。椀型滓の種別では、密度3.0g/cc以上において椀型滓A・椀型滓Cはそれぞれ1点ずつあるのみであるが、全体の密度分布と各椀型滓の密度分布はほぼ同じ傾向を示すことから種別との対応は不明瞭である。

遺構ごとでは、SK40では椀型滓A1点、椀型滓B6点、SX10では椀型滓A3点、椀型滓B20点、椀型滓C4点と椀型滓全体の種別構成でも同様な傾向を示す。SK40の椀型滓の密度では密度3.0g/cc以上のものもあるが2.6g/cc未満の比較的軽いものが多く、SX10の椀型滓の密度では2.6g/cc前後と3.0g/cc前後に小さい密度分布のピークがあるものの椀型滓全体の密度分布の傾向とほぼ一致している。

d. 流動滓Aの密度と比重

流動滓Aでは、3点以外は密度が2.4未満の軽いものもばかりであったが、クレリチ重液を使ってほぼ2.50において区別すると1点を除いて全て沈み、ほぼ全ての流動滓Aの密度に修正が必要であった。また流動滓のような小型のものの計測には方法の改善が今後の課題として残る。

e. 鍛造剥片と粒状滓

98C区SX10(炭化物層)より、鍛造剥片5点、粒状滓10点を確認した。鍛造剥片は長径2～3㎜の薄い不整多角形の破片で、表面に鉄色の光沢が残る。粒状滓は径1㎜～5㎜の球形をしたもので、表面が比較的滑らかなものを粒状滓とした。径1.5㎜前後のものが多い。

f. 鍛冶関連資料の自然科学的分析

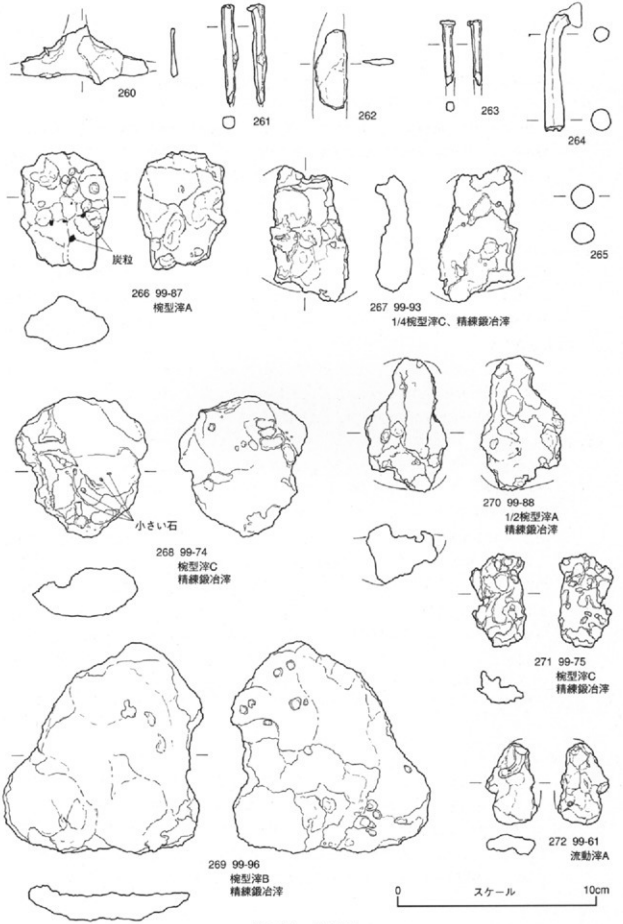
今回出土した鍛冶関連資料のうち椀型滓A椀タイプ1点、椀型滓B平タイプ1点、椀型滓C3点(内1点椀タイプ)、鉄塊系遺物(礫状)1点について、成分分析、実体顕微鏡による組織分析、蛍光X線分析を行った。成分分析では、椀型滓A・Bは全鉄成分が比較的多く、造滓成分が少ない、椀型滓Cは全鉄成分が椀型滓A・Bに比べて少なく、造滓成分が多い。実体顕微鏡による組織分析でも椀型滓ABではウスタイトの結晶組織が不均整であるが、椀型滓Cはウスタイトの結晶組織が均整のとれた繭状、骨骨状になっている。また蛍光X線分析においても、椀型滓Cでは椀型滓A・Bにはあまり顕著でないファイヤライトの強いピークが見られた。以上のことから椀型滓A・Bは鍛錬鍛冶工程を、椀型滓Cは精錬鍛冶工程による形成を推定されている。また鉄塊系遺物の実体顕微鏡分析による組織分析では、ウスタイトの結晶が見られずファイヤライトの結晶とその結晶の間にマグネタイトの微細結晶がみられることから製錬滓との分析結果が出た。

＊自然化学分析の成果は岡原正明・小川太一・伊藤俊治1999「愛知県岩作城跡・能見城跡出土鉄滓の分析・調査」川崎テクノリサーチ株式会社に依っている。

g. 岩作城跡の鍛冶工程

今回出土した98C区東端を中心に出土した鉄資料はこれまでの研究成果から考えると含鉄遺物が少ないものの流動滓では流動滓Aのみであること、椀型滓でも椀型滓Bが主体であること、椀型滓の密度では2.8g/cc前後をピークとするの正規分布が確認できたことから鍛錬鍛冶主体の工程が想定される。しかしSK40出土鉄塊系遺物の自然科学的分析で製錬滓が出土したことや、椀型滓Cについては精錬鍛冶滓である可能性が指摘されたことから、一部では精錬鍛冶を行っていたものと思われる。

(藍山誠一)


260
261
262
263
264
炭粒
265
266 99-87
椀型滓A
267 99-93
1/4椀型滓C、精錬鍛冶滓
小さい石
268 99-74
椀型滓C
精錬鍛冶滓
270 99-88
1/2椀型滓A
精錬鍛冶滓
271 99-75
椀型滓C
精錬鍛冶滓
269 99-96
椀型滓B
精錬鍛冶滓
272 99-61
流動滓A
0
スケール
10cm

第29図　金属製品

表5　鍛冶関係資料（1）

番号	調査区	グリッド	遺構		種別	形状	比重	重量	質量	長径	短径	厚さ	磁着	メタル1	メタル2	メタル3	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
99-87	98C		SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.58	134	52	7	6	2.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-87	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/椀	2.97	89	30	6.1	4.3	2.7	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-87	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	流動滓A	扁平	1.35	5.4	4	2.4	2.4	0.9	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-86	98C	XF3n	SX09（整地層）	古代～大窯初期	含鉄遺物	棒状	2	4	2	4.5	4.5	0.9	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-85	98C	XF2n	SX09（整地層）	古代～大窯初期	1/4椀型滓	凹/ﾌﾙ/椀	2.54	12.7	5	2.8	2.8	1.6	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	下面鉄滓付着
99-84																								
99-83	98C	XF2n	SX09（整地層）	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.97	116	39	6.2	5.2	2.1	4	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	2回打ち欠く
99-83	98C	XF2n	SX09（整地層）	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.96	68	23	5.6	3.8	2.2	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	錆着多い
99-82	98C	XF2q	攪乱		1/4椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/	2.53	22.8	9	3.4	3	1.4	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-80	98C	XF2m	SX09	古代～大窯初期	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	2.68	91	34	7	5.2	1.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-79																								
99-77	98C	XF3o	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.346	30.5	13	3.7	3.3	1.7	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-78	98C	XF3p	SX10東	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	1.98	9.9	5	3.2	2.3	0.8	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-78	98C	XF3p	SX10東	尾張型第8型式	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	2.55	102	40	6.2	4.2	3.7	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-81	98C	XF3o	SX09	古代～大窯初期	含鉄遺物	棒状	1.4	1.4	1	2.2	0.8	0.5	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-81	98C	XF3o	SX09	古代～大窯初期	重複椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/椀	2.65	138	52	6.7	6	2.2	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	下1/4分割椀型滓、上完形椀型滓
99-96																								
99-94																								
99-97	98C	XF20p	検出Ⅲ(包含層)	～14世紀前半？	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	1.98	9.9	5	3.4	2.3	0.7	1	欠	0	0	欠	○	×	×	×	×	1・2	
99-93	98C	XF2o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.43	36.5	15	4.4	2.9	2.4	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	0	
99-93	98C	XF2o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	含鉄遺物	棒状	2.3	2.3	1	2.7	1	0.6	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-93	98C	XF2o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	流動滓A	礫状	-2.2	2.2	-1	1.6	1.2	1	1	0	0	0	完	×	×	×	×	×	1	
99-93	98C	XF2o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	流動滓A	礫状	-1.8	1.8	-1	1.5	1.2	0.9	1	0	0	0	完	×	×	×	×	×	1	
99-95	98C	XF2p	検出Ⅲ	～14世紀前半？	1/2椀型滓	凹/ﾌﾙ/椀	3.33	70	21	5.1	4.9	2	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-95	98C	XF2p	検出Ⅲ	～14世紀前半？	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	1.74	8.7	5	3	2.4	1	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-95	98C	XF2p	検出Ⅲ	～14世紀前半？	流動滓A	棒状	-0.8	0.8	-1	2.1	1	0.5	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-92	98C	XF2n	検出Ⅲ(包含層)	～14世紀前半？	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.1	65	21	5.1	4.3	2.1	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-92	98C	XF2n	検出Ⅲ(包含層)	～14世紀前半？	1/4椀型滓	ﾌﾙ/凹/	3.3	19.8	6	3.5	2.6	1.6	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-92	98C	XF2n	検出Ⅲ(包含層)	～14世紀前半？	流動滓A	扁平	1.53	4.6	3	2.2	1.5	1	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-91	98C	XF1o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.93	8.8	3	3.4	2.3	0.8	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-91	98C	XF1o	検出Ⅲ	～14世紀前半？	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.78	27.8	10	4.6	3.4	1.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-90	98C	XF2l	検出Ⅲ	～14世紀前半？	鬼板	扁平	2.3	62	27	9	4.9	1.5	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-89	98C	XF2l	検出Ⅲ	～14世紀前半？	釘・ボルト		4.08	98	24	8.6	2.4	2.2	3	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	
99-88	98C	XF3o																						
99-75	98C	XF3o																						
99-76	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/4椀型滓		3.02	18.1	6	3.9	2.3	1.5	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-76	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/8椀型滓		2.93	23.5	8	3.2	2.8	2.2	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-74-1	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	2.62	157	60	6.8	4.3	2.5	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	大きな石が固着（石＝チャート5.0×3.9×2.8）
99-74-2	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.78	89	32	6.6	5.1	1.9	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-74-3	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/4含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.93	82	28	5.1	5.1	2.2	1	1	2	2	欠	○	×	×	×	×	1	ひび割れあり
99-74-4	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3.02	45.3	15	5.6	4.3	1.3	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-74-5	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/2含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.5	70	20	5.3	3.5	2.2	3	1	2	2	欠	×	×	×	×	×	1	
99-74-6	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	2.97	50.5	17	4.6	3.1	1.9	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-74-7	98C	XF3n	SX10(溝状、炭化物層)	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	2.52	22.7	9	4.5	3.5	1.3	1	1	1	0	完	○	×	×	×	×	1	
99-73	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/椀	2.61	188	72	7.7	7.5	3	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	下面に鉄滓付着
99-73	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾌﾙ/凹/	2.86	60	21	4.9	4.8	1.4	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-73	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	流動滓A	礫状	2.18	8.7	4	2.3	1.8	1.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-72	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/平	2.66	101	38	6.9	5.5	2.3	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-72	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3.08	77	25	5.2	3.4	2.1	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-72	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.6	20.8	8	3.9	2.7	1.5	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-72	98C	XF3n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/2椀型滓	凹/凹/	2	14	7	3.1	3.1	1.3	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-71	98C	XF2n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/4椀型滓	凹/ﾌﾙ/椀	2.59	106	41	7.1	5.1	2.3	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-71	98C	XF2n	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	椀型滓	凹/凹/椀	2.7	108	40	6.5	5	2.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	上面に流動滓付着
99-70	98C	XF2n	SX09	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.11	115	37	5.2	4.5	3.3	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-69	98C	XF3p	SX09・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.29	69	21	5.2	4.5	1.8	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-69	98C	XF3p	SX09・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/4重複椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.23	31.2	14	4.5	3.2	1.9	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	下面で重複の状態で観察できる
99-69	98C	XF3p	SX09・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/2椀型滓		3.5	3.5	1	2	1.6	1.1	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-69	98C	XF3p	SX09・検Ⅲ	古代～大窯初期	含鉄遺物	棒状	2.3	2.3	1	3.1	1	0.6	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-68	98C	XF3o	SX09(整地層)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.8	70	25	5.6	4	2.1	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	他に石1つあり
99-67	98C	XF3p	SX09(整地層)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ盛/凹/平	2.77	61	22	4.9	4.7	2	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-66	98C	XF3o	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	3.1	130	42	8.1	6.4	2.2	2	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	他に石1つあり
99-66	98C	XF3o	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/	2.53	30.4	12	3.8	2.9	1.6	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-66	98C	XF3o	SX10（炭化物層）	尾張型第8型式	1/8椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.23	13.4	6	3	2.4	1.7	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	上面に流動滓B付着
99-64	98C	XF3n	SX09(土坑)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.71	230	85	8.1	7	2.7	2	1	1	1	欠	○	×	×	×	×	1	
99-64	98C	XF3n	SX09(土坑)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ盛/凹/椀	3.38	98	29	7	4	2.8	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-64	98C	XF3n	SX09(土坑)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	1.94	29.1	15	4.4	4	1.5	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	上面に流動滓B付着
99-64	98C	XF3n	SX09(土坑)	古代～大窯初期	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.76	55.2	20	5.7	4.4	1.9	2	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	

表６　鍛冶関係資料（2）

番号	調査区	グリッド	遺構		種別	形状	比重	重量	質量	長径	短径	厚さ	着磁	メタル1	メタル2	メタル3	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
99-64	98C	XF3n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.04	10.2	5	3	2.8	0.9	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-62	98C	XF2p	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.87	204	76	7.2	6.6	2.1	4	1	2	3	欠	○	×	×	×	×	1	
99-62	98C	XF2p	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.66	31.9	12	4	3.3	1.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-62	98C	XF2p	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/4含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.71	24.4	9	3.5	2.9	1.1	3	1	1	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-62	98C	XF2p	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/4椀型滓	円/ﾌﾙ/	2.58	15.5	6	2.9	2.6	1.5	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-62	98C	XF2p	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	鬼板				1															
99-63	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	2.48	49.6	20	5.7	4	2.1	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	塊に石1つあり
99-63	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	流動滓A	礫状	1.65	6.6	4	2	1.9	1.7	1	0	0	0	欠	×	○	×	×	×	1	
99-65	98C	XF3o	SX09最下層	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.76	160	58	7	6	3	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-65	98C	XF3o	SX09最下層	古代～大窯初期	1/8椀型滓		2.88	11.5	4	2.5	2.4	1.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-61	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/椀	2.79	53.1	19	5.6	3.6	2.2	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-61	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	円/ﾌﾙ/椀	2.99	44.9	15	4.1	3.7	1.7	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-61	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	流動滓A	扁平	3.05	18.3	6	4.9	2.2	1.2	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-60																								
99-59	98C	XF2o	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3	60	20	7	4.5	1.3	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-59	98C	XF2o	SX09(土塁)・検Ⅲ	古代～大窯初期	含鉄遺物	棒状	2.5	2.5	1	2.6	0.9	0.8	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-58	98C	XF2o	SX09(土塁)	古代～大窯初期	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.5	100	40	6.3	5.5	2.1	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	平面形方形
99-58	98C	XF2o	SX09(土塁)	古代～大窯初期	鉄塊系遺物	礫状	3.8	57	15	4.1	3.5	2.3	3	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	ひび割れあり
99-58	98C	XF2o	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.03	27.3	9	4.4	2.7	1.4	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-57	98C	XF2o	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.47	24.7	10	4	3.7	1.3	4	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-56				古代～大窯初期																				
99-55	98C	XF2o	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/平	2.71	103	38	8.1	5.4	1.7	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-54	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト10層	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/椀	3.04	70	23	6.7	3.8	2.2	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-54	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト10層	古代～大窯初期	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	2.27	43.1	19	5.2	5	1.1	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	平面形方形
99-53	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト6層	古代～大窯初期	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.7	62	23	5.5	4.4	2.1	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-53	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト6層	古代～大窯初期	流動滓A	礫状	1.94	9.7	5	2.8	1.9	1.9	2	0	0	0	完	×	×	×	×	×	1	ひび割れあり
99-52	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト10層	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	3.24	55	17	4.5	4.3	1.8	2	1	1	1	欠	×	○	×	×	×	1	
99-52	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト10層	古代～大窯初期	1/4椀型滓	凹/ﾌﾙ/	2.04	14.3	7	3.3	3	1.5	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-51	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト	古代～大窯初期	1/4椀型滓	凹/ﾌﾙ/	2.85	171	60	7	5.5	3.1	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-51	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト	古代～大窯初期	1/4椀型滓	凹/ﾌﾙ/	2.42	80	33	5.7	4.1	2.7	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-50	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト9層	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.17	31.7	10	4.7	2.8	1.7	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-50	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト9層	古代～大窯初期	羽口		2.04	16.3	8	3.5	3.3	1.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
99-49	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト10層	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.12	78	25	6.1	5.6	1.5	2	0	0	0	欠	○	○	○	×	×	1	平面形が変
99-47	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト2層	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3.05	180	59	8.5	5.8	2.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-47	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト2層	古代～大窯初期	1/4含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	2.89	110	38	7	4.7	1.8	2	1	1	1	欠	○	○	×	×	×	1	
99-48	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト7層	古代～大窯初期	1/2含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.78	100	36	6.1	5.1	1.9	2	1	1	1	欠	○	○	×	×	×	1	
99-48	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト7層	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ/凹/	3.8	7.6	2	2.8	1.5	1	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-45	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	2.86	60	21	6	4.4	1.2	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4含鉄椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	3.2	80	25	5.8	3.4	2.4	4	1	2	2	欠	○	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3.85	77	20	6	3.5	1.5	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	3.38	40.6	12	5.3	3.8	1.1	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3.47	52.1	15	4.1	4	1.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.76	22.1	8	4	2.5	1.2	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-44	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/8椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.48	24.8	10	3.5	2.8	2	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾌﾙ盛/ﾌﾙ/平	2.87	132	46	7	5.5	2.4	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/凹/	3.16	98	31	5.8	4.2	2.6	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/凹/	2.77	49.9	18	6.9	3	1.5	2	0	0	0	欠	○	×	○	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.64	45	17	4.5	3.9	1.6	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	3.14	34.5	11	3.9	3.2	1.5	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.41	21.7	9	4.8	2.8	1.6	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.4	14.4	6	3	2.5	1.3	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	羽口		1.6	8	5	3.2	2	1.6	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	流動滓B付着
99-43	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/8椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	1.72	8.6	5	2.8	2	1.3	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	不明土製品41
99-46	98C	XF2n・o	SX09南北ベルト11層	古代～大窯初期	流動滓A	扁平	1.9	7.6	4	3	2.5	1	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-42	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2重複椀型滓	/ﾌﾙ/	2.23	87	39	6	4.6	3.3	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-41	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	椀型滓		1.63	6.5	4	2.8	2	1	1	0	0	0	完	○	○	×	×	×	1	塊に石2つ
99-38	98C	XF2k	SX09	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	3.05	61	21	4.8	4.4	1.8	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	塊に鬼板1ヶ
99-36	98C	XF4i	SX08表層	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	2.82	62	22	5.6	4.8	1.9	3	0	0	0	欠	○	×	×	○	×	1	
99-40	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2重複椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.42	92	38	6.7	4	3.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	キラキラ光る鍛造剥片か？
99-40	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/凹/平	2.63	71	27	5.1	5	1.9	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-40	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	凹/ﾌﾙ/平	2.86	28.6	10	4.9	3.8	1.1	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-40	98C	XF2n	SX09(土塁)	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	2.4	16.8	7	3.3	2.9	1.5	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-39	98C	XF2n	SX09断ち割り	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/	3.26	35.9	11	5.1	3.1	1.2	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	断面図7
99-35	98C	XF4n	SX08表層	近世	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	3	81	27	6.1	4.5	1.5	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-1	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/2椀型滓	ﾌﾙ盛/凹/椀	2.31	83	36	7.5	4.2	1.9	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-2	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/椀	2.83	65	23	5.6	4.6	2	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
99-31-3	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾌﾙ/ﾌﾙ/平	1.77	31.8	18	5.2	3.7	1.5	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	

表7　鍛冶関係資料（3）

番号	調査区	グリッド	遺構		種別	形状	比重	重量	質量	長径	短径	厚さ	磁着	メタル1	メタル2	メタル3	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
99-31-4	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.59	38.8	15	4.2	3.8	1.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-5	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.27	25	11	4	3.7	1.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-6	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/椀	3.04	15.2	5	3.4	3.1	1.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-7	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.48	12.4	5	3.3	2.3	1.1	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-8	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	流動滓A	扁平	2.6	5.2	2	2.5	2.2	0.7	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-9	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	流動滓A	礫状	2.33	7	3	2.4	1.9	1.4	3	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
99-31-10	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	流動滓A	礫状	2.18	8.7	4	2.5	2	1.8	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-31-11	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/8椀型滓		1.83	7.3	4	2.5	1.8	1.3	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-31-12	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	鉄片付着礫		2.15	17.2	8	1.7	1.2	0.2	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	大半が石
99-30	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	3.5	70	20	5.7	4.6	1.2	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-29	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	鬼板				17				0											
99-28	98C	XF3n	SK25		含鉄遺物	扁平	1.85	3.7	2	2.4	1.4	0.7	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	塊に石が1ケ
99-32	98D	XH6t	SK43																					土が固着しただけ、計3点
99-27	98C	XF4n	SD31		火打鎌		2.37	14.2	6	6.7	2.6	0.2	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-33	98B	XG1a	SX03	近世～現代	釘		1.3	3.9	3	5.1	0.8	0.6	2	0	0	0	完	×	×	×	×	×	0	
99-37	98C	XF4h	SX08表土	近世	キセル雁首		2.2	8.8	4	6	1.1	1.1	0	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	
99-34	98C	XF2p	SX07		鉄輪			250	×	9.8	9.2	0.6	3	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	新しい
99-233	98C	XF2n	検Ⅲ		1/2椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/椀	2.88	150	52	8	4.5	3.5	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-232	98C	XF3p	SX10東		1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.97	53.5	18	5.7	3.7	2.2	2	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-230	98C	XF3n	SX10	尾張型第8型式	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.37	47.3	20	5.2	3.6	1.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-231	98C	XF3n	SX10	尾張型第8型式	流動滓A	礫状	2.13	6.4	3	2.5	1.5	1.2	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-229	98C	XF3p	検Ⅲ・SX09(土塁)	古代～大窯初期	鬼板	扁平	1.48	5.9	4	3.2	2.1	0.6	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
99-228	98C	XF3n・o	SX09南北ベルト2層	古代～大窯初期	1/8椀型滓		2.16	21.6	10	3.5	3	1.5	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-227	98C	XF3n	SX09東西ベルト整地層	古代～大窯初期	流動滓A	礫状	3.03	9.1	3	2.8	1.9	1.6	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	1	
99-226	98C	XF3o	SX09(整地層)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/椀	3.2	16	5	3.9	2.2	1.6	1	1	1	1	欠	○	×	×	×	×	1	
99-225	98C	XF2m	SX09(整地層)	古代～大窯初期	1/2椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.34	16.4	7	4	2.2	1.4	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	1	
99-224	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	1/8椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.81	16.9	6	3	2.7	1.2	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-224	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	1/8椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	2.2	11	5	2.8	2.7	0.9	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-223	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	含鉄遺物	礫状	2.81	44.9	16	4.5	3.1	2	3	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	鉄滓っぽくない
99-222	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	1/8椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/	3.08	15.4	5	3.4	2	1.5	1	0	0	0	欠	×	○	×	×	×	1	
99-221	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	流動滓A	扁平	1.74	8.7	5	2.5	2.1	1	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-220	98C	XF2l	SX09	古代～大窯初期	流動滓A	扁平	1.51	9.1	6	4.3	2.2	0.9	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
99-219	98C	XF2l	SX09	古代～大窯初期	1/4椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/平	2.14	19.3	9	4	3.9	0.9	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-218	98C	XF3j	SK22		釘		2.1	2.1	1	3.4	0.7	0.7	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF3j	SD25上層	古瀬戸後期後半	流動滓A	礫状	1.44	7.2	5	2.5	1.9	1.4	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
	98B	IXG19g	SX02	近代～現代	刀子？		2.1	4.2	2	4.2	1.7	0.3	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF4j	検Ⅰ-b		含鉄遺物	扁平	2.3	4.6	2	2.4	1.9	0.8	2	1	1	1	欠	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF3o	SX10(炭化物層)	尾張型第8型式	粘土塊	礫状	1.97	11.8	6	3.5	2.7	1.5	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	石1つあり
	98C	XF3o	SX10(炭化物層)	尾張型第8型式	粘土塊	礫状	1.23	3.7	3	2	1.7	1.1	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF3l	検Ⅰ		炉壁	礫状	1.02	15.3	15	4.9	3.4	2.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓B付着
	98C	XF2l	SX09	古代～大窯初期	流動滓A	礫状	0.875	3.5	4	2.1	1.7	0.9	1	0	0	0	完	×	○	×	×	×	1	端に石1ケ
	98B	IXG20f	検Ⅱ		含鉄遺物	棒状	0.9	0.9	1	3.1	0.4	0.3	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98B	IXG20f	検Ⅱ		含鉄遺物	棒状	1.6	1.6	1	2.7	0.6	0.5	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF3n	検Ⅰ		鬼板？	扁平	2.19	26.3	12	5.8	3.7	1.4	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98B	IXG20e	検Ⅰ		釘		2.15	8.6	4	5.1	1.9	0.6	3	0	1	1	完	×	×	×	×	×	0	
	98B	IXG20b	検Ⅰ		含鉄遺物	棒状	1.5	1.5	1	2.3	0.9	0.7	2	0	0	0	完	×	×	×	×	×	0	釘か？
	98C	XF3l	SX09	古代～大窯初期	羽口		2.22	11.1	5	2.8	2.6	1.5	1	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	流動滓B付着
	98C	XF3o	検Ⅰ		含鉄遺物	棒状	1.25	2.5	2	2.2	0.9	0.5	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	98B	IXG20e	検Ⅰ		銅銭(一銭？)		2.25	9	4	2.7	2.7	0.15	0	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	新しい(明治)
	98B	IXG20f	検Ⅰ		鉛玉		8.9	8.9	1	1.3	1.2	1	0	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	
	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	炉壁？	礫状	2.07	31	15	5.6	2.5	1.7	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	0	アスファルト等の可能性ある、他に石2ケあり
	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	炉壁？	礫状	2.06	22.7	11	3.9	2.7	2	0	0	0	0	欠	×	○	×	×	×	0	アスファルト等の可能性ある
	98C	XF2p	SX09(土塁)	古代～大窯初期	炉壁？	礫状	1.7	6.8	4	2	1.9	1.5	0	0	0	0	欠	×	○	×	×	×	0	アスファルト等の可能性ある
	98D	XF4e・5e	検Ⅰ		粘土塊	3ケ																		
	98C	XF4j	SX08表層	近世	石				1															
99-74	98C	XF3n	SX10	尾張型第8型式	椀型滓	凹/ﾜﾙ/椀	2.796	145.4	52	7.3	6.5	2.3	1	0	0	0	完	○	×	○	×	×	1	
99-96	98B	IXG20e	検Ⅲ	～14世紀後半？	椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/平	2.339	271.4	116	12.3	9.7	1.9	3	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
99-93	98C	XF2o	検Ⅲ		1/4椀型滓	凹/ﾜﾙ/	2.824	70.6	25	7.3	3.8	1.8	2	0	0	0	欠	○	○	○	×	×	1	
99-75	98C	XF3o	SX10	尾張型第8型式	椀型滓	凹/凹/	2.855	25.7	9	5	2.7	1.7	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	溝状に東へのびる部分より遺物のみ拾う
99-88	98B	XF1t	検出Ⅰ		1/2椀型滓	ﾜﾙ/ﾜﾙ/椀	2.856	85.7	30	7.1	4.1	3.2	3	0	0	0	欠	○	○	×	×	○	1	
99-31	98C	XF2n	SK40	尾張型第8型式	鉄塊系遺物	礫状		64.5					3	1	1	2	欠	×	×	×	×	×	0	

2　微化石分析による岩作城跡の古環境

岩作城周辺の古環境情報を得るために花粉・植物珪酸体・珪藻微化石分析と^{14}C年代測定を行なった。城の堀内堆積物の微化石分析を行なった例としては、愛知県西春日井郡清洲町の清洲城下町遺跡において珪藻分析を行なった森（1990）、鬼頭・尾崎（1997）や、豊明市の大脇城跡において昆虫遺体分析を行なった森（1999）、花粉・珪藻分析を行なった鬼頭ほか（1999）がある。今回は15世紀末～16世紀初頭の時期に堀と土塁を掘削して成立した岩作城跡について報告する。

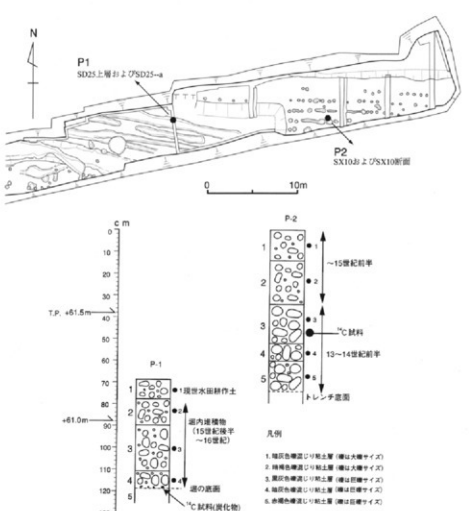
a. 試料　採取した試料は98C区のP-1地点（SD25-aを含むベルト）で4試料、P－2地点（SX10・SX09の堆積するベルト）で5試料（第30図）、98D区SD32-a下層で2試料（第31図）の合計11試料である。考古遺物を包含する堆積物は、大～巨礫サイズの円礫を含む粘土層からなる。^{14}C年代測定用試料は98C区、P－1地点の鍛冶遺構SX10を埋積する紫灰色礫混じり粘土層より得られた炭化物と、同区P－2で認められた3層から採取された黒灰色礫混じり粘土層の土壌2試料である。

b. 分析方法　採取した試料を各分析項目ごとに以下のような手順で分析した。なお、分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。また、^{14}C年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社を通じて学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

花粉分析は試料を湿重で10gを水酸化カリウム処理、篩別（250 μ m）、重液分離（臭化亜鉛、比重2.2）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下で出現する全ての種類（taxa）について同定・計数を行う。各種類の割合は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が花粉・胞子総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。

珪藻分析は湿重10gの試料をビーカーにとり、過酸化水素水と塩酸を加えて加熱しながら泥化および有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去する。この操作を4～5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分の除去を行い、希釈したうえでカバーガラス上に滴下して乾燥させる。プリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。検鏡は油浸600倍または1000倍で行い、200個体を目安に同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては同定・計数は行っていない。珪藻の同定と種の生態性については、Krammer & Lange－Bertalot（1986～1991）、伊藤・堀内（1991）などを用いる。

植物珪酸体は試料5gを過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250mHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト、比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。希釈後、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を同定・計数する。

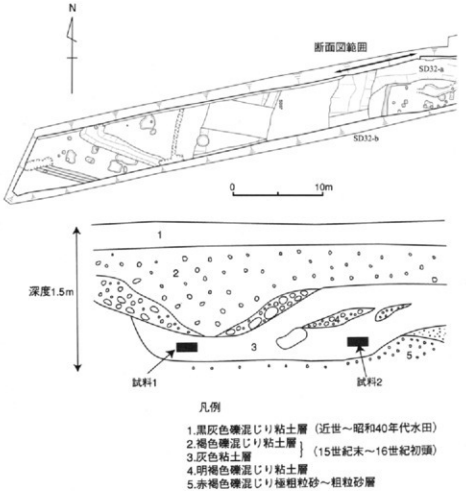


第30図　岩作城跡 98C区の試料採取地点と採取層準
●は微化石および^{14}C試料採取層準を示す

c.結果　分析結果を試料採取地点ごとに花粉・植物珪酸体・珪藻化石の順に述べる。

98C区　P-1地点（下層はSD25-a、15世紀半ば～後半）

本地点では4試料を分析した。花粉化石について下位層準の試料4・3では、ともに花粉・胞子化石の産出が非常に少なく、シダ類胞子のほかにコウヤマキ属・ハンノキ属・ブナ属・イネ科などがわずかに産出する程度である。試料2における花粉・胞子化石の全体構成比は木本花粉が50.8%を占め、次いで草本花粉が35.3%、シダ類胞子が12.8%である。木本花粉の中ではマツ属（ほとんどがニヨウマツ型のマツ属複維管束亜属）が卓越し、89%を占める。そのほかにモミ属・ツガ属・スギ属・ブナ属・コナラ亜属・モチノキ属などを産出するがいずれも5%以下と少ない。草本花粉とシダ類胞子ではイネ科が多産し、28%を占める。ほかにカヤツリグサ科・サナエタデ節—ウナギツカミ節・ソバ属・アブラナ科・ワタ属・トウナス属・ゼンマイ属・サンショウモなどを4%以下で産出する。試料1では草本花粉がもっとも多く67.6%を占める。そして木本花粉27.1%、シダ類胞子3.7%の順に続く。木本花粉の中ではマツ属（そのほとんどがニヨウマツ型の複維管束亜属で

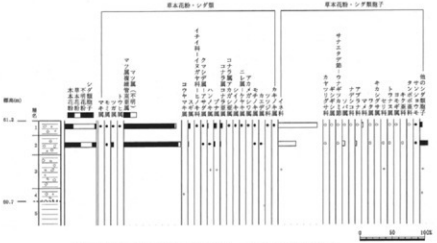


第31図　岩作城跡98D区SD32の試料採取地点と採取層準

ある。）が卓越し、80％を越える。そのほかの本本花粉の産出は少なく、マキ属・スギ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属（以後、コナラ亜属と記す。）・コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と記す。）などを5％以下で産出するにすぎない。草本花粉ではイネ科が卓越し、61％を占める。カヤツリグサ科・サナエタデ節一ウナギツカミ節・ソバ属・マメ科・キカシグサ属・ワタ属・トウナス属・ヨモギ属・サンショウモが3％以下の低率で産出する（第32図）。

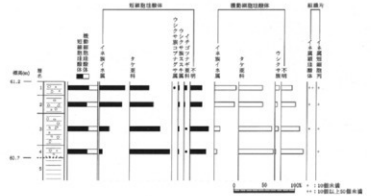
植物珪酸体化石は全ての試料で良好に検出された。試料4・3からタケ亜科の産出がめだち、栽培植物のイネ属も認められる。ウシクサ族（ススキ属を含む）・イチゴツナギ亜科なども検出される。試料2・1でも同様な種類が見られるが、タケ亜科とともにイネ属の産出がめだつ。なお、検出されたイネ属には短細胞列や頴珪酸体も認められる（第33図）。

珪藻化石は試料すべてから多くの珪藻化石が検出された。生態性について、塩分に対する適応性では試料1・2において貧塩一不定性種が優占し、全体の80％を占めている。貧塩一好塩性種は皆無に等しい。試料3・4ついては貧塩一嫌塩性種が45～60％を占めており、次いで貧塩一不定性種が40％前後認められる。この2試料においても貧塩一好塩性種の産出率は低く、2試料とも5％以下である。pHに対する適応性では、試料1・2において好アルカリ性種が40～55％と優占し、15～40％の好酸性種および不定性種を伴っている。試料3・4では好酸性種が優占しており、2試料とも70％前後を占める。好アルカリ性種とpH不定性種は5～20％程度である。流水に対する適応性では、全体に流水不定性種が優占するものの、試料1・2では好流水性種と好止水



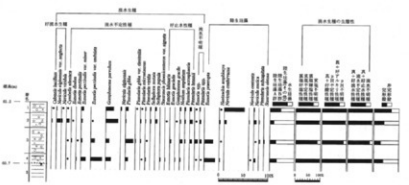
第 32 図　岩作城跡 98C 区 P-1 の花粉分析結果

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は 1％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。



第 33 図　岩作城跡 98C 区 P-1 の植物珪酸体分析結果

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は 1％未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋、＋＋の記号で示す。



第 34 図　岩作城跡 98C 区 P-1 の珪藻分析結果

海水・汽水・淡水種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 1％未満の試料について検出した種類を示す。

表8　岩作城跡 98C 区における ^{14}C 年代

調査区	地点・層準	試料番号	試料	$\delta^{13}C$ (‰)	補正^{14}C年代 (yrs BP)	暦年代交点	測定No.
98C区	P-1・4層	No.6	紫灰色礫混じり粘土層	-27.6	930±60	A.D.1020	Gak-20197
98C区	P-2・3層	No.7	黒灰色礫混じり粘土層	-27.4	610±80	A.D.1340	Gak-20198

性種はいずれも低率であり、3～15%程度である。一方、試料3・4では流水不定性種が優占するものの、好止水性種も卓越し、33～40%程度認められる。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、本試料では水生珪藻が55～85%、陸生珪藻が15～45%であり、全体に水生珪藻が優勢である。多産あるいは優占した種は、流水不定性種の *Eunotia pectinalis var.undulata*、*Gomphonema parvulum*、*Pinnularia gibba*、陸生珪藻の *Eunotia praerupta* などである（第34図）。

紫灰色粘土層よりなる4層中に含まれる炭化物（標高＋60.7m）の^{14}C年代は930±60 yrs BPであった（表8）。

98C区　P-2地点（下層SX10、上層SX09岩作城土塁）

本地点では5試料を分析した。花粉化石はいずれの試料においても非常に悪く、花粉化石とシダ類胞子化石が僅かに産出するにすぎない。

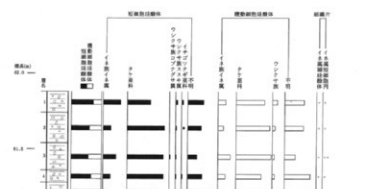
植物珪酸体化石について全ての試料でタケ亜科の産出がめだち、イネ属・ウシクサ族（ススキ属を含む）・イチゴツナギ亜科なども検出される。試料2・1ではタケ亜科とともにイネ属の産出がめだつ。イネ属には短細胞列や顕珪酸体も認められ、特に試料3で短細胞列の検出個数が多い（第35図）。

珪藻化石は試料1・2から比較的多くの珪藻化石が検出されたが、試料3～5では1プレパラートあたり50個体に満たない。生態性について、塩分濃度に対する適応性では95%以上が貧塩一不定性種で占められ、その他は貧塩—嫌塩性種と貧塩一不明種が若干認められるが、貧塩一好塩性種は皆無である。pHに対する適応性では好アルカリ性種が最も優占し、全体の60～70%を占めている。他はpH不定性種が20～35%認められるが、好酸性種は5%以下である。流水に対する適応性では、流水不定性種が95%以上を占めており、他は数%の好止水性種と流水不明種で構成される。好流水性種は全く検出されない。一方、水生珪藻と陸生珪藻の比率は2試料とも陸生珪藻が90%以上の産出率を示し、水生珪藻は極めて低率にしか認められない。多産した種は陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Stauroneis obtusa* である（第36図）。

巨礫サイズの礫を含む黒灰色粘土層からなる3層の土壌（標高＋61.0m）の^{14}C年代は610±80 yrs BPであった（表8）。

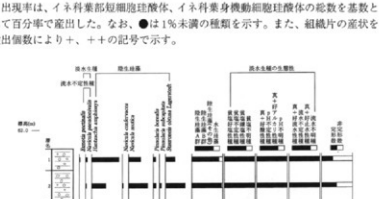
98D区 SD32-a下層堆積物（屋敷地区画溝）

本地点では同一層準を採取地点を変えて2試料を分析した。花粉化石の産出は試料1・2ともに多く、保存状態もよい。試料1における花粉・胞子化石の全体構成比は、木本花粉が45.0%、草本花粉21.3%、シダ類胞子29.7%である。木本花粉ではマツ属が優先し、46%を占める。なお、マツ属はそのほとんどがニヨウマツ型の複維管束亜属であるが、わずかにゴヨウマツ型の単維管束亜属も認められる。次いで、スイカズラ属13%・イボタノキ属10%が続き、ツガ属・クルミ属・ブナ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属—ケヤキ属・ウコギ科・ツツジ科・カキノキ属・



第35図　岩作城跡 98C 区 P-2 の植物珪酸体分析結果

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で産出した。なお、●は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋、＋＋の記号で示す。



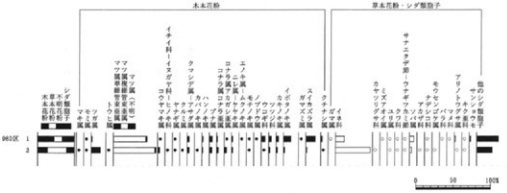
第36図　岩作城跡 98C 区 P-2 の珪藻分析結果

淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、＋は100個体未満の試料。

クチナシ属など多くの花粉化石を5%以下で産出する。草本花粉とシダ類胞子ではイネ科12%・ソバ属6%のほかに、ガマ属・ユリ属・クワ科・サナエタデ節一ウナギツカミ節・アリノトウグサ属・キク亜科・ゼンマイ属・サンショウモなどを2%以下で産出する。試料2では草本花粉が52%と最も多く、木本花物26.4%、シダ類胞子20.4%の順に続く。木本花粉ではマツ属が58%を占める。これに次いでツガ属が13%を産出するが、そのほかにマキ属・モミ属・コウヤマキ属・クマシデ属一アサダ属・ブナ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ属一ケヤキ属・ウコギ科・ツツジ科・カキノキ属・スイカズラ属・クチナシ属などを5%以下で産出する。草本花粉とシダ類胞子ではイネ科が優占し、47%を占める。そのほかにカヤツリグサ科・ユリ属・サナエタデ節一ウナギツカミ節・ソバ属・アリノトウグサ属・キク亜科・ヒカゲノカズラ属などを3%以下で産出する（第37図）。

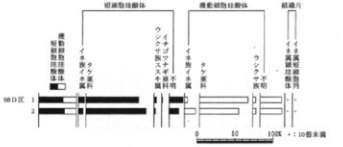
植物珪酸体化石は試料番号1・2ともタケ亜科の産出がめだち、イネ属・ウシクサ族（ススキ属を含む）・イチゴツナギ亜科なども検出される。イネ属には短細胞列や頴珪酸体も認められる（第38図）。

珪藻化石は2試料とも比較的多くの珪藻化石が検出された。生態性について塩分濃度に対する



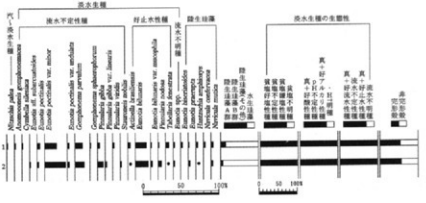
第37図　岩作城跡 98D 区 SD32 の花粉分析結果

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。



第38図　岩作城跡 98D 区 SD32 の植物珪酸体分析結果

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。



第39図　岩作城跡 98D 区 SD32 の珪藻分析結果

汽水・淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

適応性は、試料1では貧塩一嫌塩性種が45%、貧塩一不定性種が50%であり、貧塩一好塩性種は3%程度と低率にしか認められない。試料2では貧塩一嫌塩性種が約70%、貧塩一不定性種が28%であり、この両者でほとんどを占めている。貧塩一好塩性種については全く検出されない。pHに対する適応性は2試料とも好酸性種が優占し、55～75%を占めている。pH不定性種および好アルカリ性種は8～23%程度しか検出されない。流水に対する適応性は流水不定性種が優占し、全体の65%を占めている。次いで、30%前後の好止水性種が検出されている。好流水性種については、2試料とも5%以下で極低率にしか検出されない。水生珪藻と陸生珪藻の比は、2試料とも水生珪藻が80%以上を占めており、水生珪藻が優勢である。多産あるいは優占する種としては、流水不定性種の *Eunotia pectinalis var.minor*、*Gonphonema parvulum*、好止水性種の *Eunotia bilunsris* である（第39図）。

d. 考察　試料採取地点から出土する考古遺物から相対年代や遺構の性格が推定される。考古学的な所見も加味して、相対年代に沿って各遺構ごとに考察を加える。また、古環境変遷図を第40図に示す。

13世紀後半～14世紀前半

SX10は14世紀後半の製鉄に伴う鍛冶遺構と推定されている。本遺構の堆積物は98C区P-1地点の4層と同区P-2地点の3～5層にあたる。これらの層では花粉化石以外の微化石が確認された。植物珪酸体化石ではタケ亜科が多産し、珪藻化石は *Eunotia* 属や *Gomphonema parvulum* といった流水不定性種とともに、*Eunotia praerupta* や *Navicula mutica* などの陸生珪藻が確認された。P-1の最上位で採取した現世水田耕作土試料と比較すると、植物珪酸体はイネ族イネ属とタケ亜科とがほぼ同率で産出するのに対し、SX10ではイネ族イネ属に比べ、圧倒的にタケ亜科が優占している。タケ亜科にはネザサ類が含まれる。遺構の周辺にはネザサ類が繁茂していた。

Eunotia 属や *Gomphonema parvulum* は水生植物などに付着生育する珪藻種群である。また、地表のコケなどに付着し、耐乾性のある陸生珪藻も見られることから、SX10の堆積時には乾湿の繰り返される環境変化が生じていたことがわかる。

15世紀半ば～16世紀初頭

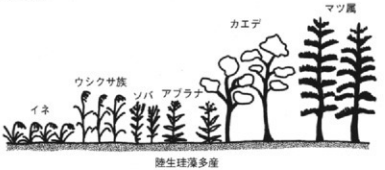
98D区で検出された溝SD32-aを埋積する堆積物は、出土遺物する考古遺物から15世紀半ば～16世紀初頭、また、98C区の土塁盛土SX09は16世紀初頭以前の相対年代が得られている。以下では、遺構ごとに述べる。

屋敷地区画溝（SD32- a）灰色粘土層

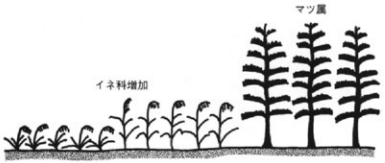
98D区で検出された内堀SD37を埋積する堆積物は、出土遺物する考古遺物から、15世紀半ば～16世紀初頭の相対年代が得られている。本層準からは2試料を採取し、花粉・植物珪酸体・珪藻微化石ともに豊富に産出した。花粉分析からは、木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科が卓越した。この傾向は岩作城試料の全体に言える結果である。他に、木本花粉ではツガ属・ウコギ属・ツツジ科・カキノキ属・イボタノキ属・スイカズラ属が、草本花粉ではソバ属が比較的多く見られた。ツツジ科やカキノキ属の産出は、愛知県豊明市の16～17世紀の相対年代を示す大脇城遺跡の城館を巡る溝試料からも確認されている（鬼頭ほか, 1999）。城の周囲にはそれらが植栽されてい

14世紀前半

15世紀末～16世紀初



現代



第40図　岩作城跡における古環境変遷図

た可能性もある。また、ソバ属には栽培種のソバが含まれる。周辺で畑作が行なわれていたのかもしれない。植物珪酸体分析ではタケ亜科が多産した。タケ亜科にはネザサ類が含まれる。灰色粘土層堆積時には周辺域にはネザサ類が繁茂していた。珪藻分析では *Eunotia* 属や *Gomphonema parvulum*、*Pinnularia gibba* といった水生植物に付着生育する珪藻種群とともに *Eunotia bilunaris*、*Eunotia bilunaris var. mucophila*、*Pinnularia nodosa* といった止水域を好む種が多産する。陸域にも成育できる *Eunotia biseriatoides*、*Hantzschia amphioxys* などを産することとも合わせると、屋敷地区画溝内は湿水環境にあったものと思われる。

岩作城土塁盛土（SX09）

SX09は16世紀初頭の頃の堀の掘削と同時に作られた土塁跡と考えられている。周辺の造成を行った際の盛土であり、前時期の包含層を含んでいる。本遺構の堆積物は98C区P-2地点の1・2層にあたる。これらの層からは、花粉・植物珪酸体・珪藻化石が得られた。花粉化石はマツ属・ツガ属・カエデ属といった木本花粉が多産し、草本花粉ではイネ科・ソバ科・アブラナ科・ワタ科・セリ科・キク亜科が産出した。現世水田耕作土の花粉分析結果と比較すると、SX09で確認されたツガ属・カエデ属の木本花粉やソバ属・アブラナ科・セリ科・キク亜科の草本花粉は、現世堆積物では減少するか、あるいは全く消滅する。ソバ属は栽培種のソバを含み、アブラナ科は

現代の栽培作物であるダイコン・カブ・アブラナなどを含む。分類群が全て栽培種とは言えないが、SX09で見つかるそれらの花粉化石は、屋敷地の周辺域で畑作の可能性が考えられる興味深い結果である。

植物珪酸体化石はタケ亜科が多産し、遺構の周囲にはネザサ類が繁茂していた。一方、P-2地点において、下位層から上位層に向かいタケ亜科が減少傾向を示し、対してイネ族イネ属は増加傾向を示す。14世紀前半以降にはネザサ類が若干減少し、水田面積が拡大、あるいは居住域に近接して水田耕作が行われるようになったと考えられる。

珪藻化石では陸生珪藻を産することから乾いた環境を経験していることがわかる。特に98C区P-2地点では*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Stauroneis obutusa*といった陸生珪藻で全体の90%以上を占めた。同区のP-1地点では好流水生種や流水不定性種も見られる。このことから、同じ岩作城内でもP-1よりP-2地点の方がより乾燥した環境であったことがわかる。

e. まとめ　岩作城の98C区、98D区より堆積物を採取し、花粉・植物珪酸体・珪藻化石分析を行ない、以下の事柄がわかった。

1. 岩作城周辺では14世紀後半～16世紀初頭にかけて、マツ属やイネ科、タケ亜科などの植物が卓越していた。

2. 土塁の築かれた16世紀初頭は木本花粉の占める割合が高い。また、ソバ属・アブラナ科などの栽培植物が期待できる草本花粉が比較的多い。

3. 15世紀半ば～16世紀初頭までにはタケ亜科が減少するとともに、イネ族イネ属の植物珪酸体が増加傾向を示す。これは周辺域での水田の拡大による可能性がある。

4. 鍛冶作業での廃棄層と考えられる試料の^{14}C年代測定では、14世紀半ばを中心とする数値を得た。

（鬼頭　剛）

文献

Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, 35- 47 .

安藤一男，1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，2, 73- 88 .

伊藤良永・堀内誠示，1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布古環境解析への応用，珪藻学会誌，, 23- 45 .

Krammer,K. and LangeBertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil1, Navivulaceae. Band 2/ 1von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, GustavFischer Verlag, 876p .

Krammer, K. and LangeBertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil2, Epithemiaceae, .Bacillariaceae. Surillaceae. Band2/ 2von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p .

Krammer, K. and LangeBertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil3, Epithemiaceae, . Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band2/ 3von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae , Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomohonema. Band 2/ 4 von : Die Susswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

杉山真二，1987, 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．　植生史研究，第2号，27 － 37.

杉山真二，1987, タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，70 － 83.

藤原宏志，1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）- 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -，考古学と自然科学，9，15 － 29.

藤原宏志・杉山真二，1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）- プラント・オパール分析による水田址の探査 -，考古学と自然科学，17, 73 － 85.

鬼頭　剛・尾崎和美，1997, 珪藻群集より推定される清州城下町遺跡の古環境変遷，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第70集「清州城下町遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，134-141.

鬼頭　剛・吉野道彦・堀木真美子・尾崎和美，1999, 微化石分析による大脇城跡の古環境解析，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第86集「大脇城遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，189-202.

森　勇一，1990, 清州城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸（付：昆虫遺体），愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集「清州城下町遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，103-108.

森　勇一，1999, 愛知県大脇遺跡から産出した昆虫群集と古環境，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第86集「大脇城遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，203-208.

3　愛知県岩作城跡から検出された昆虫群集とその意義

森　勇一（愛知県立明和高等学校）

1．はじめに

今日，私たちが見るような昆虫の組成は，歴史を遡った先史～歴史時代においてもはたして変わらないものだったのだろうか。こうした手がかりは，地層中に残された昆虫化石を調べる以外に方法はない。

だが，外骨格がキチン質で覆われた昆虫にも残りやすいものと残りにくいものとがあり，生息していた当時のすべてが化石となって私たちの目にふれるわけではない。チョウやガなどの鱗翅目はこれまで遺跡中から発見された記録がなく，トンボの仲間（蜻蛉目）やハチ（膜翅目）なども，残りにくいグループの代表である。残りやすいものに甲虫目（鞘翅目）があるが，このグループは現在地球上で最も繁栄を誇っている昆虫の仲間であり，種数・個体数ともに他の昆虫を圧倒している。甲虫目の種数は，現在わかっている既知種だけで50万種とも100万種ともいわれ，実に多様な環境に適応して生活している。甲虫目は，大きさや色彩・形態だけでなく，生息環境や食性なども多岐にわたっている。

土に埋もれた甲虫目を調べるだけで，冒頭の疑問に答えることができるだけでなく，発見された甲虫目の種の生態を調査することにより，古環境に関する多くの情報を集めることが可能となる。

本論では，愛知県愛知郡長久手町に位置する岩作城跡の中世後期（16世紀初頭）の溝中から，多くの興味深い昆虫化石を得ることができたので，その意義とともに述べる。

2．分析試料

岩作城跡は，三ケ峰丘陵に端を発し長久手町から名古屋市北東部を東流して，庄内川に注ぐ矢田川水系香流川右岸に位置する。遺跡は町役場の南にあたり，標高約60mの沖積面上に立地している。本遺跡の南方1.4kmには，小牧長久手の戦い（1584年）で知られる国史跡・長久手古戦場跡があり，岩作城も織田信長の天下統一過程の間に作られたいわゆる中世城館の一つであると考えられている。

昆虫分析試料は，岩作城（掘削面積1,800m²）の計4調査区（A～D区）のうちのC調査区の東北端より検出された溝（SD38）内から採取されたものである。分析試料の湿潤重量は43.5kg，昆虫化石を包含する地層は灰褐色シルト層であった。

昆虫化石の検出は，愛知県埋蔵文化財センターの水洗乾燥室で実施し，この任は主に同センター科学分析室の宇佐美美幸があたった。昆虫標本の同定は，クリーニングののち顕微鏡下で一点ずつ筆者採集の現生標本を用いて行った。同定後の標本は，50%アルコールを注入したのち，密閉容器（SS型角シャーレ）に収納し，愛知県埋蔵文化財調査センター収蔵庫にて保管している。

3．昆虫化石群集

岩作城跡の中世後期（16世紀初頭）の溝中から発見された昆虫化石は，計774点であった。それらを分類群ごとにみると，目レベルまで分類できたもの3目12点，科レベルでは17科215点，

亜科レベル3亜科8点，族レベル1族1点，属レベルは6属59点，種まで同定できたものは42種426点であった。これ以外に，不明甲虫としたものは計52点であった。

検出部位別では，鞘翅（Elytron）が最も多く299点，続いて腿脛節（Legs）が185点，前胸背板（Pronotum）が89点，腹部（Abdomen）80点の順であった。

生態別では，食肉性ないし食植性の水生昆虫が96点（12.4%），食糞性ないし食屍性の地表性歩行虫が20点（2.6%），その他の地表性歩行虫が90点（11.6%），陸生の食植性昆虫が503点（65.0%）であり，その他の昆虫は計65点（8.4%）であった。

特徴的な種についてみると，食肉性の水生昆虫ではゲンゴロウ科 Dytiscidaeの中型種であるキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis*とヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus*が検出されたものの，大型のゲンゴロウやクロゲンゴロウは見いだされていない。このほか，ミズスマシ *Gyrinus japonicus*・オオミズスマシ *Dineutus orientalis*・コガシラミズムシ *Peltodytes intermedius*が含有される。食植性の水生昆虫では，ガムシ *Hydrophilus acuminatus*・コガムシ *Hydrochara affinis*・ヒメガムシ *Sternolophus rufipes*・セマルガムシ *Coelostoma stultum*という各サイズのガムシ科Hydrophilidaeが発見された。これらの水生昆虫は，近現代の水田内および水田周辺にも普通に認められ，いずれも水田指標昆虫として著名なものばかりである（森，1996・1999）。また，稲作害虫として知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti*も計2点検出された。

地表性昆虫では，ミヤマダイコクコガネ *Copris pecuarius*・コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*・マグソコガネ *Aphodius rectus*などの食糞性甲虫と，エンマムシ *Merohister jekeli*・オオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica*などの食屍性甲虫が認められた。ミヤマダイコクコガネはやや山地性種であり，他の食糞ないし食屍性甲虫はいずれも人家周辺や畑作地に多い種群であるといえる。

これ以外の地表性昆虫では，湿潤地表面を好むツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.・ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.，ヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica*などが見いだされ，これらはいずれも水田周辺に多く水田指標昆虫と考えてよいものばかりである。1点産出したオオゴミムシ *Lesticus magnus*は，乾燥した地表面上や畑作地などでよく見かける大型の食肉性歩行虫である。

陸生の食植性昆虫では，おおまかに3タイプのものが認められた。第一群は，森林性のクロカナブン *Rhomborrhina polita*・アオカナブン *R. unicolor*・ヒラタクワガタ *Serrognathus platymelus*・カミキリムシ科Cerambycidae・ハナムグリ亜科Cetoniinaeを中心とした樹液や朽木に集まる種群，第2群は人が植栽した畑作物や果樹・二次林の樹葉や花粉などに多いヒメコガネ *Anomala rufocuprea*・サクラコガネ *A. daimiana*・ドウガネブイブイ *A. cuprea*・マメコガネ *Popillia japonica*・コガネムシ *Mimela splendens*・コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*・アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi*などであり，第3群ではアカマツ林に生息するスジコガネ *Mimela testaceipes*・クロコガネ *Holotrichia kiotoensis*・クロカミキリ *Spondylis buprestoides*・ノコギリカミキリ *Prionus insularis*などをあげることができる。これ以外に，ヤナギルリハムシ *Plagiodera versicolora*・ルリハムシ *Linaeidae aenea*・ドウガネサルハムシ *Scelodonta lewisii*などのハムシ類，およびアオドウガネ *Anomala albopilosa*・コフキコガネ *Melolontha japonica*・ウスチャコガネ *Phyllopertha diversa*・アシナガコガネ族 Hoplini など，従来の遺跡産出の昆虫組成ではあまり記録されたことがなかった種群が検出された。

4．昆虫群集が示す古環境およびその意義

本化石群集の特徴は，一言でいえば種数が多く，かつ陸生の食植性昆虫の出現率が高いことであろう。このことは，中世における岩作城跡周辺の環境がきわめて多様であったことを示すものとして重要であり，とくに食植性昆虫の種数や個体数が多いことから，当時の植生環境を考察するうえで興味深い。

古環境に関する情報では，ヒメゲンゴロウ・セマルガムシ・ガムシなどの水生昆虫や，ヤマトトックリゴミムシ・ミズギワゴミムシ属などの地表性歩行虫に水田指標昆虫が多く含有され，遺跡の周りに水田が存在したか，水田に伴う水路，灌漑水を導水するための溜池などを含め広義の水田生態系が遺跡周辺に成立していたことを示唆している。

必ずしも多くはないが，コブマルエンマコガネやマグソコガネ・エンマムシ・オオヒラタシデムシなどの人家周辺に多い食糞・食屍性昆虫や，汚物食と考えてよい双翅目 Diptera の囲蛹などが本群集中に認められたことから，遺跡一帯では人為による環境汚染が及んでいたものと推定される。

植生についての情報は，食植性昆虫の組成より遠近２タイプの植生空間について考察することが可能である。昆虫化石群集を産出した遺構とじかに接するところに存在した植生については，ヒメコガネやマメコガネ・ドウガネブイブイなどといった人間が植栽した畑作物や果樹などを加害する畑作指標昆虫の多産によって示される。これらは，従来，日本各地の中世における遺跡産昆虫群集と共通するものであり，この時期の人々の山林開発の様子を物語る物的証拠として重要である。ヤナギルリハムシ・ドウガネサルハムシなどのハムシ類や，アオハナムグリ・コアオハナムグリ・ハナムグリなどの小型のハナムグリ類も，遺跡に近いところに存在した植生に起因するものであると考えられる。

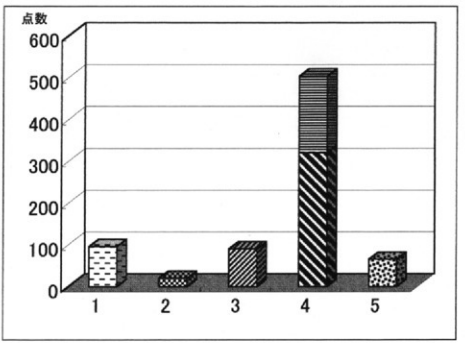
もう一つは，遺跡のバックグラウンドの植生空間に由来する昆虫群が前者と明瞭に識別される。ヒラタクワガタやコクワガタ・クロカナブン・アオカナブンなどは，現在は雑木林のクヌギ・コナラ・アベマキなど落葉広葉樹の樹液に集まる種群であり，これらは岩作城跡の濠の周囲かこれより幾分離れた林内から飛来したものと考えられる。多様な種組成を示した食植性昆虫の多くは，このグループに含まれる。一方，こうした林がこの時期すでに相当荒廃しつつあったことを示すものとして，ノコギリカミキリやクロカミキリ・クロコガネなどアカマツ林に多い昆虫の存在をあげることができる。

そして，両タイプの食植性昆虫の出現は，中世後半のころ，名古屋近郊の林内にどんな植物が生え，これらを人々がどのように利用していたかについての情報を提供する。すなわち，人々が生活物資や自給的な資源確保のために入り込んで利用し，攪乱することで維持されてきた里山林の原形がそこにあり，昆虫組成から考えると，16世紀初頭には，岩作城跡付近の里山林は皆伐されて二次林化し，近現代の丘陵地に見るようなアカマツの優占する貧弱な林相を呈していたことが窺われる。

「うさぎ追いしかの山，こぶな釣りしかの川」と歌われた里山のルーツは，本遺跡における昆虫相解析によって，16世紀にまで遡ることが明らかになった。そして，それは，昭和中頃の高度経済成長期における日本列島大改造の時代まで継続したのである。

今回，岩作城跡から掘り出され，明るみになった昆虫相は，筆者が昭和の中頃に里山林を駆けめぐって採集した甲虫群集と酷似しており，まるで少年時代の昆虫標本箱を覗き込むかのごとく懐かしいものだったことを付け加えておきたい。

文　献
森　勇一（1996）稲作農耕と昆虫．季刊考古学第56号，特集・稲作の伝播と長江文明，雄山閣，59-63.
森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史．歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」，国立歴史民俗博物館研究報告第81集，国立歴史民俗博物館，311-342.



（凡例）
1　水生昆虫　2　食糞・食屍性昆虫　3　地表性歩行虫
4　食植性昆虫（うち上半部はバックグラウンドの植生に由来）　5　その他

第41図　岩作城から発見された昆虫化石の組成

表9 岩作城跡から産出した昆虫化石

生態		和名	学名	ⅡUYZ98C SD38 XF2q(外堀) 検出部位												計
				An	H	M	S	P	E	W	T	A	L	O	C	
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae					2	7		1	2				12
		キベリクロヒメゲンゴロウ	*Ilybius apicalis* Sharp						1							1
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae						1		3					4
		ヒメゲンゴロウ	*Rhantus pulverosus* (Stephens)								1					1
		ミズスマシ	*Gyrinus japonicus* Sharp						2							2
		オオミズスマシ	*Dineutus orientalis* Modeer						2							2
		コガシラミズムシ	*Peltodytes intermedius* (Sharp)						1							1
		水生半翅目	Hemiptera							2				1		3
	食植生	ガムシ科	Hydrophilidae					2	5				2			9
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky					2	15		2	2	15			36
		コガムシ	*Hydrochara affinis* (Sharp)					1	6				7			14
		ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes* (Fabricius)										2			2
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (Walker)					1	6							7
		イネネクイハムシ	*Donacia provostii* Fairmaire						2							2
地表性	食糞性	ミヤマダイコクコガネ	*Copris pecuarius* Lewis						1							1
		エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.						1		1		4			6
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atripennis* Waterhouse		3			1	1			1	1			7
		マグソコガネ	*Aphodius rectus* (Motschulsky)						1							1
	食屍性	エンマムシ科	Histeridae									1				1
		エンマムシ	*Merohister jekeli* (Marseul)					1				1				2
		シデムシ科	Silphidae						1							1
		オオヒラタシデムシ	*Eusilpha japonica* (Motschulsky)						1							1
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae		7			6	9			17	4			43
		ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus* sp.						6							6
		ミズギワゴミムシ属	*Bembidion* sp.						3							3
		ヤマトトックリゴミムシ	*Lachnocrepis japonica* Bates						2							2
		オオゴミムシ	*Lesticus magnus* (Motschulsky)						1							1
		キマワリ属	*Plesiophthalmus* sp.						3							3
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae										2			2
		ハネカクシ科	Staphylinidae		1			12	13			4				30
陸性	食植生	コガネムシ科	Scarabaeidae	1	1				13		3	8	14			40
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.		2			2	5			5	21			35
		サクラコガネ	*Anomala daimiana* Harold		1							1	1			3
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope					1	4			11	6			22
		アオドウガネ	*Anomala albopilosa* Hope					3	1							4
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	2	6	2	4	29	67		4	7	33			154
		マメコガネ	*Popillia japonica* Newmann					1	2				4			7
		スジコガネ亜科	Rutelinae										1			1
		スジコガネ	*Mimela testaceipes* Motschulsky		1								1			2
		コガネムシ	*Mimela splendens* Gyllenhal					2	32		1	3	11			49
		クロコガネ	*Holotrichia kiotoensis* Brenske		2			5	1				8			16
		コフキコガネ	*Melolontha japonica* Burmeister		1											1
		アシナガコガネ族	Hoplini										2			2
		ウスチャコガネ	*Phyllopertha diversa* Waterhouse						2							2
		カナブン属	*Rhomborrhina* sp.		1				1			1	3			6
		カナブン	*Rhomborrhina japonica* Hope									2				2
		クロカナブン	*Rhomborrhina polita* Waterhouse		1											1
		アオカナブン	*Rhomborrhina unicolor* Motschulsky		1				3		1		3			8
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae										3			3
		アオハナムグリ	*Eucetonia roelofsi* (Harold)				2		1				1			4
		ハナムグリ	*Eucetonia pilifera* Motschulsky					1	2							3
		クロハナムグリ	*Glycyphana fulvistemma* Motschulsky						1							1
		コアオハナムグリ	*Oxycetonia jucunda* (Faldermann)					2	1							3
		カミキリムシ科	Cerambycidae									1	8			9
		クロカミキリ	*Spondylis buprestoides* Linne			1		1								2
		ノコギリカミキリ	*Prionus insularis* Motschulsky		1				15		3	6	21			46
		タマムシ科	Buprestidae						1							1
		クワガタムシ科	Lucanidae		2			1			1	3	2			9
		ヒラタクワガタ	*Serrognathus platymelus* (E. Saunders)					1								1
		コクワガタ	*Macrodorcas rectus* (Motschulsky)			1										1
		コメツキムシ科	Elateridae					10	14		1		1			26
		アカアシオオクシコメツキ	*Melanotus cete* Candeze						2							2
		ハムシ科	Chrysomelidae						19			1				20
		ルリハムシ	*Linaeidae aenea* (Linne)						1							1
		ヤナギルリハムシ	*Plagiodera versicolora* (Laicharting)						7							7
		ドウガネサルハムシ	*Scelodonta lewisii* Baly								1					1
		ゾウムシ科	Curculionidae		1				4		2					7
		オトシブミ科	Attelabidae								1					1
その他		テントウムシ科	Coccinellidae						2							2
		不明甲虫	Colepptera				1	2	7			2	4	36		52
		カメムシ目	Hemiptera				2					1				3
		アリ科	Formicidae		2											2
		双翅目	Diptera												6	6
合計				3	34	4	9	89	299	2	26	80	185	37	6	774

(検出部位凡例)
H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腮 S(Scutellum):小楯板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):囲蛹 E(Elytron):鞘翅
W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Others):その他

1. ミズスマシ *Gyrinus japonicus* Sharp
左右上翅　長さ4.1mm（標本252）
2. イネネクイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire
右上翅　長さ4.8mm（標本273）
3. コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse
頭　部　最大幅3.5mm（標本141）
4. ノコギリカミキリ *Prionus insularis* Motschulsky
上翅片　長さ14.6mm（標本558）
5. コクワガタ *Macrodorcas rectus* (Motschulsky)
大　腮　長さ13.0mm（標本122）
6. アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi* (Harold)
右上翅　長さ12.5mm（標本292）
7. コガネムシ *Mimela splendens* Gyllenhal
右上翅　長さ7.2mm（標本45）
8. マメコガネ *Popillia japonica* Newmann
左上翅　長さ6.2mm（標本356）
9. アオウスチャコガネ *Phyllopertha irregularis* Waterhouse
右上翅　最大幅6.8mm（標本450）

第42図　昆虫化石の顕微鏡写真

第5章　小　結

ここでは、これまでの発掘調査によって得られたデータを整理し、岩作城を含む遺跡の景観について述べることにする。

古代

尾張東北部に位置する岩作の一帯は、古代には山田郡に属した。今回の調査では、わずかではあるが古代8世紀末～9世紀代の須恵器等を含む遺構（土坑2基と掘立柱建物跡と思われる柱穴列）を検出した。B区南側にあたる前回第2次調査区域においても同時期の須恵器出土が報告されており、少なくともこの段階に成立した集落の広がりが推測される。遺跡より1.5㎞範囲内には山越第2号窯、榊振第1号窯など当該時期の須恵器を焼成した窯跡があり、出土した須恵器の大半はおそらくここから運ばれたものと思われる。

鍛冶関連遺構

中世の包含層は、岩作城土塁の下層で一部を確認することができた。遺構は、13世紀後半～14世紀前半の灰釉系陶器椀皿類を含む廃棄土坑と炭を大量に含む不整形の落ち込み（SX10）があり、鉄滓の検出状況や分析結果により、周辺は鍛冶に関連する作業場跡であったと推定される。遺構からは鍛冶工房の具体的な施設を復元することはできなかったが、分析結果は、ここでの鍛冶作業が大鍛冶、すなわち原料鉄材の加工を部分的に行いつつ、中心は何らかの鉄製品を製作する鍛造工程（小鍛冶）であったことを示している。調査会による第1次調査区域北半で検出された作業場跡（石列、柱穴、椙炭を含んだ焼土と三和土が分布する）もおそらく同様の鍛冶に関わるものと推測される。したがって岩作城土塁構築以前には広い範囲で、あるいは比較的長い期間に亙って鍛冶作業が行われていたと考えられる。

屋敷地区画

土塁構築以前の遺構として新たに確認されたのは、屋敷地を区画する溝（SD32）とこれに並行する道側溝と推定される小規模の溝（SD25,28）である。これらの溝の方向はいずれも土塁の軸線とは整合しない。SD32下層粘土層の堆積からは、わずかな水位で湛水し、澱んだ状況であったことが窺われる。また陶磁器片の出土も多く、生活域はごく近い範囲に展開していたものと思われる。SD32の掘削時期は判然としないが、存続期間中に東西方向の溝が先に埋められるなど少なくとも2時期があり、人為的な堆積状況から土塁構築を契機として完全に廃絶したと考えられる。

岩作城

今回の北辺土塁および堀跡の調査からは、一重の土塁と堀で囲まれた方形単郭の形態が推定された。これは前回の南辺土塁、虎口付近の調査での所見を裏付けるものであった。地籍図から内堀が想定された北辺土塁の南側の水田区画（～近代）では土塁と同時期の遺構は確認されなかった。土塁構築時に盛土されず、さらに後世水田として窪められ低くなったものと考えられる。

土塁の構築時期であるが、北辺土塁の盛土礫層に含まれる古瀬戸後期後半段階～大窯1段階の陶磁器類の年代観から、早くて16世紀の初頭以降と考えられる。表土層以外には近世陶器を含まず、しかも大窯段階の遺物もほとんど検出されないことなどから、16世紀初頭をさほど経ずしてこの造成が行われたとみられる。基本的には僅らの溝（堀）の掘削土を掻き上げた単純な構造であり、南辺虎口でみられたような枕や大型の石材を用いた補強はやはり後世の修復時のものである。今回の北辺の調査では土塁と同時に存在した内側の居住空間については明確な遺構・遺物ともに確認されなかった。前回の第1次調査区域では古瀬戸とほぼ同量（破片数）の大窯製品が

検出されており、しかもこれらは、大窯第1～4段階まで連続して認められる。また井戸の廃棄遺物として17世紀前葉～中葉の登窯製品が出土している(1)のと今回の調査区では大きく様相が異なる。北辺付近は土塁構築以後、生活域として利用度の低い空間であったと考えられる。建物等が配された居住域についてはこれらの調査範囲外に求めるしかなく、城館が機能していた段階の活動の様子については依然明らかではない。

周辺の景観

分析の結果からは、部分的ではあるが次のような植生景観が推測される。まず岩作城跡中世の鍛冶工房の時期は、周囲はネザサ類などが多く繁茂する環境であった。周辺にはまだ水田がさほど広がっていなかったと予想される。その後15世紀代のある時期、屋敷地が営まれた頃は、木本花粉でツガ属、ウコギ属、ツツジ科、カキノキ属、イボタノキ属、スイカズラ属が多くみられ、周囲にこれらが植栽されていたようである。ツツジ科やカキノキ属の産出はやや時期のくだる大脇城遺跡(豊明市)の城館周辺でも確認されている。また、植物珪酸体の分析からは周辺水田域の拡大が推定され、現生水田では少ないソバ属、アブラナ科、セリ科、キク科の草本花粉がみられた。分類群すべてが栽培種とはいえないものの、栽培種とすればソバやダイコン、カブ、アブラナがこれに含まれ、城館周辺で畑作が行われた可能性が想定される。(2)

中世岩作ムラ

尾張で調査された朝日西遺跡・朝日遺跡、土田遺跡・森南遺跡・阿弥陀寺遺跡・大渕遺跡など12世紀後半以降に水田開発にともない出現してきた中世集落は、15世紀代に多くが姿を消していく。15世紀代のある時期にひとつの画期が想定されている。(3) また、当該時期の資料が増加した尾張北西部の馬引横手遺跡(一宮市・尾西市)・門間沼遺跡(木曽川町)・大毛池田遺跡・大毛神遺跡遺跡(一宮市)などの中世集落も16世紀初頭までに姿を消し、集落再編への様相をみせている(4)。

岩作城跡の中世集落は13世紀後半より出現し、堀と土塁で囲まれた城館がそれまでの館を拡張し構築されたのは16世紀初頭以降であった。17世紀半ば以降に館(居住域)としての役目を終えると思われるが、当主も含めその間の事情は文献にも不明である。絵図にある近世岩作村の水田景観は、さほど水量の多くない香流川といくつかの溜め池に水源を頼っていた。(5) 大規模な水田開発にはまず充分な水源の確保が必要であり、この要因からも尾張低地部とは違った中世集落出現、展開の過程をたどったものと想像される。

註・参考文献

(1) 長久手町教育委員会の御厚意により『長久手町史』編纂にむけて作業段階にある資料の一部を参考とした。
カウントは金子健一氏(瀬戸市埋蔵文化財センター)による。
(2) 地域の古老に聞くところによれば、記憶にある範囲では桑畑であったという(昭和20年～40年代か)。地籍図では草生地となっている。調査では土塁上で～近現代の肥溜1基を検出した。
(3) 佐藤公保　1989「清須周辺の中世集落」　第5回東海埋蔵文化財研究会『清須―織豊期の城と都市―』
「再編」後清須城下町遺跡については、尾張守護所との関連を指摘している。
(4) 伊藤太佳彦編　1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第84集
石黒立人　1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第80集
武部真木編　1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第72集
永井宏幸　1996『大毛神遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第66集
(5) 『長久手町史』　資料編　一

『長久手町史』　資料編　五
長久手町教育委員会　1997『岩作城跡発掘調査概要報告書』
長久手町教育委員会　1989特別展図録『長久手の中世―その城跡を中心に』
近世の「鍛冶」に関連する「カジャゴ」(鍛冶屋敷)なる地名が岩作・前熊・北熊に伝えられてたという。実際に岩作のどの地域に存在したのかは明らかでない。

第 43 図　岩作城周辺地籍図

遺構登録一覧

土坑（SK）

調査区	遺構No.	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底部レベル(m)	主な出土遺物
98A	SK01	IXG19o	1.05	0.38	0.11	61.93	-
98A	SK02	IXG19j	1.33	0.93	0.28	61.62	-
98A下層	SK03	IXG19i・j	1.95	0.88	0.14	61.73	灰釉系、土師器鍋
98A下層	SK04	IXG19i	0.93	0.35	0.17	61.59	須恵器横瓶
98A下層	SK05	IXG19i・j	3.75	1.40	0.18	61.59	-
98A	SK06	IXG19・20i	1.03	0.58	0.16	61.59	-
98B	SK08	IXG20e	1.45	0.35	0.26	61.34	-
98B	SK09	IXG20d	1.28	0.60	0.12	61.45	近世陶器
98B	SK10	XF1・2t					灰釉系、染付
98B	SK11	XF1t					近世？
98B	SK12	IXG20c	1.58	1.28	0.25	61.31	須恵器、土師器
98B	SK13	XG1c	0.80	0.60	0.07	61.48	-
98B	SK14	XG1a	1.53	0.85	0.22	61.23	須恵器、灰釉系
98B	SK15	XG1a・b	1.00	0.30	0.11	61.39	-
98B	SK16	IXG20c	1.20	1.00	0.07	61.40	須恵器、土師器
98B	SK17	IXG20g	4.40	0.75	0.15	61.72	須恵器、灰釉系
98B	SK18	XF1t	0.90	0.43	0.21	61.15	-
98C	SK19	XF4b	1.43	0.40	0.16	61.29	灰釉系
98C	SK20	XF4h・1					-
98C	SK21	XF3i・j,4i・j	1.95	1.90	0.24	60.78	灰釉系
98C	SK22	XF3j	0.78	0.47	0.15	60.85	灰釉系
98C	SK23	XF3k	27.30	0.40	0.08	60.94	灰釉系、古瀬戸、近世
98C	SK24	XF3k	1.04	0.40	0.05	60.95	灰釉系、土師器鍋
98C	SK25	XF3n	0.83	0.50	0.12	61.79	灰釉系
98C	SK26	XF3n	2.68	0.50	0.14	61.81	灰釉系
98C	SK27	XF3n	0.73	0.58	0.08	61.88	-
98C	SK28	XF3n	0.50	0.43	0.11	61.85	近代？
98C	SK29	XF3n	1.18	0.35	0.13	61.84	-
98C	SK30	XF2・3o	0.70	0.35	0.05	62.04	灰釉系
98C	（SK31）SD25-b	XF3k	（東）7.68/（西）3.45	0.75/0.60	0.12/0.18	60.75/60.75	灰釉系、古瀬戸
98C	SK32	XF3j					灰釉系
98C	SK33	XF3j・k	1.36	1.20	0.19	60.57	古瀬戸
98C	SK34	XF4h	0.85	0.72	0.10	60.90	灰釉系
98C	SK35	XF4h	0.28	0.25	0.10	60.93	-
98C	SK36	SD33に変更					灰釉系、古瀬戸、雪消
98C	SK37	XF3i	0.93	0.46	0.12	60.84	灰釉系
98C	SK38	XF4h	0.65	0.62	0.17	60.98	灰釉系
98C	SK39	XF4i					-
98C	SK40	XF2n	1.52	0.70	0.22	61.46	須恵器、土師器皿か、灰釉系、古瀬戸
98C	SK41	XF3j・k	3.33	1.40	0.31	60.55	須恵器、灰釉系、雪消
98D	SK42	XE5・6t	1.50	0.93	0.21	60.74	灰釉系、古瀬戸
98D	SK43	XE5・6t	1.00	0.55	0.19	60.76	灰釉系
98D	SK44	XE5t	0.90	0.63	0.19	60.74	灰釉系
98D	SK45	XF6a	1.65	1.08	0.10	60.83	灰釉系
98D	SK46	XF5・6a	2.50	0.75	0.3	60.63	灰釉系、土師器鍋
98D	SK47	XF6a	7.00	0.35	0.05	60.88	-
98D	SK48	XF5a・b		2.50	0.17	60.75	灰釉系
98D	SK49	XF5c	1.33	1.28	1.26	59.61	古瀬戸
98C	SK50	XF2o・p	1.08	1.02	0.13		-

柱穴・土坑（Pit）

調査区	遺構No.	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ	底部レベル(m)
98A	P01	IXG18n	0.45	0.35	0.17	61.81
98A	P02	IXG18n	0.40	0.35	0.22	61.58
98A	P03	IXG19n	0.43	0.30	0.33	61.44
98A	P04	IXG18o	0.50	0.35	0.07	61.93
98A	P05	IXG19k	-			
98A下層	P06	IXG20i	0.23	0.22	0.07	61.58
98A下層	P07	IXG20i	0.47	0.29	0.13	61.62
98B	P08	IXG20f	-			
98B	P09	IXG20h	0.28	0.25	0.09	61.77
98B	P10	IXG20h	0.53	0.28	0.10	61.68
98B	P11	IXG20g	0.40	0.40	0.09	61.69
98B	P12	IXG20g	0.20	0.18	0.10	61.68
98B	P13	IXG20f	0.35	0.35	0.08	61.66
98B	P14	IXG20e	0.40	0.35	0.05	61.56
98B	P15	IXG20d	0.38	0.35	0.05	61.53
98B	P16	IXG20d	0.33	0.28	0.06	61.52
98B	P17	IXG20d	0.25	0.25	0.05	61.54
98B	P18	IXG20d	0.33	0.18	0.03	61.54
98B	P19	XG1d	0.30	0.28	0.05	61.52
98B	P20	XG1d	0.53	0.38	0.37	61.20
98B	P21	XG1c	0.40	0.38	0.32	61.25
98B	P22	XG1c	0.43	0.40	0.35	61.20
98B	P23	XG1c	0.53	0.40	0.36	61.18
98B	P24	XG1d	0.25	0.23	0.04	61.54
98B	P25	XG1d	0.20	0.20	0.07	61.51
98B	P26	XG1d	0.38	0.35	0.08	61.50
98B	P27	XG1c・d	0.33	0.28	0.04	61.55
98B	P28	XG1c	0.28	0.28	0.05	61.50
98B	P29	XG1c	0.35	0.30	0.05	61.50
98B	P30	XG1c	0.40	0.28	0.04	61.51
98B	P31	XG1c	0.40	0.38	0.04	61.51
98B	P32	XG1c	0.20	0.20	0.04	61.53
98B	P33	XG1c	0.40	0.38	0.09	61.47
98B	P34	XG1b・c	0.28	0.28	0.04	61.51
98B	P35	XG1b	0.35	0.25	0.08	61.48
98B	P36	XG1b	0.38	0.35	0.09	61.46
98B	P37	XG1b	0.43	0.38	0.07	61.47
98B	P38	XG1b	0.38	0.35	0.23	61.28
98B	P39	XG1b	0.55	0.50	0.21	61.30
98B	P40	XG1b	0.43	0.38	0.10	61.42
98B	P41	XG1b	0.40	0.38	0.08	61.45
98B	P42	XG1b	0.40	0.38	0.08	61.43
98B	P43	XG1b	0.35	0.28	0.08	61.42
98B	P44	XG1b	0.38	0.33	0.08	61.43
98B	P45	XG1b	0.35	0.30	0.20	61.32
98B	P46	XG1a	0.53	0.33	0.15	61.33
98B	P47	XG1a	0.38	0.30	0.05	61.41
98B	P48	XG1a	0.53	0.30	0.05	61.42
98B	P49	XG1a	0.35	0.28	0.06	61.41
98B	P50	XG1a	0.40	0.30	0.05	61.43
98B	P51	XF1t	0.60	0.40	0.10	61.21
98B	P52	XF1t	0.33	0.33	0.06	61.34
98B	P53	XF1t	0.38	0.33	0.18	61.24
98B	P54	XF1t	0.33	0.23	0.20	61.28
98B	P55	XF1t	0.48	0.45	0.20	61.16
98B	P56	IXG20f	0.53	0.50	0.12	61.62
98B	P57	IXG19h	0.23	0.18	0.07	61.70
98B	P58	XF1t	0.33	0.28	0.01	61.36
98B	P59	XF1t	0.26	0.22	-	61.34
98B	P60	XF1t	0.85	0.18	0.03	61.25

調査区	遺構No.	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ	底部レベル(m)
98B	P61	XF1t	0.43	0.23	0.04	61.32
98B	P62	XF1t	1.13	0.23	0.14	61.24
98B	P63	XF1t	0.28	0.20	0.05	6.32
98B	P64	XF1s	0.30	0.25	0.14	61.25
98B	P65	XF1s	0.30	0.25	0.13	61.26
98B	P66	XF1s	0.40	0.25	0.08	61.29
98B	P67	XF1t	0.28	0.30	0.08	61.29
98B	P68	XG1a	0.48	0.40	0.09	61.34
98B	P69	XG1b	0.38	0.28	0.22	61.31
98B	P70	IXG20c	0.38	0.15	0.04	61.48
98B	P71	IXG20c	0.48	0.30	0.09	61.40
98B	P72	XF1t	0.40	0.28	0.19	61.11
98B	P73	IXG20f	0.28	0.25	0.08	61.64
98B	P74	XF1t	0.38	0.28	0.07	61.31
98B	P75	IXG20g	0.20	0.18	0.22	61.50
98B	P76	IXG20g	0.38	0.33	0.15	61.57
98B	P77	XF1t	0.25	0.20	0.11	61.28
98B	P78	IXG20g	0.40	0.33	0.14	61.59
98B	P79	IXG20g・h	0.20	0.18	0.40	61.38
98B	P80	IXG19h	0.43	0.30	0.12	61.66
98B	P81	IXG19h	0.38	0.33	0.06	61.70
98B	P82	IXG19h	0.23	0.20	0.16	61.61
98B	P83	IXG20h	0.33	0.30	0.20	61.65
98B	P84	IXG20f	0.50	0.33	0.07	61.72
98B	P85	IXG20e	0.38	0.38	0.06	61.55
98B	P86	IXG20d	0.30	0.23	0.05	61.55
98B	P87	IXG20d	0.38	0.38	0.10	61.49
98B	P88	XG1b	0.35	0.35	0.10	61.45
98B	P89	XG1b	0.53	0.35	0.08	61.46
98B	P90	XG1b	0.38	0.28	0.08	61.44
98C	P91	XF3k	0.31	0.28	0.07	60.86
98C	P92	XF3・4i	0.61	0.50	0.36	60.50
98C	P93	XF2 p	0.35	0.23	0.13	62.09
98C	P94	XF2 p	0.33	0.25	0.10	62.13
98C	P95	XF2 p	0.35	0.28	0.09	62.16
98C	P96	XF2 p	0.30	0.28	0.07	62.18
98C	P97	XF2 p	0.28	0.28	0.08	62.17
98C	P98	XF3o	0.28	0.23	0.07	62.03
98C	P99	XF3p	0.28	0.28	0.11	62.03
98C	P100	XF3p	0.23	0.23	0.08	62.08
98C	P101	XF3o	0.30	0.28	0.07	62.00
98C	P102	XF3o	0.38	0.25	0.05	61.97
98C	P103	XF3o	0.53	0.33	0.07	61.92
98C	P104	XF3n	0.53	0.33	0.08	61.88
98C	P105	XF3m・n	0.48	0.43	0.17	61.73
98C	P106	XF3m	0.38	0.35	0.07	61.82
98C	P107	XF3m・n	0.38	0.33	0.08	61.85
98C	P108	XF3m	0.45	0.43	0.07	61.85
98C	P109	XF3m	0.33	0.28	0.03	61.92
98C	P110	XF3m・n	(東) 0.3 (西) 0.40	0.28 0.35	0.10 0.13	61.85 61.82
98C	P111	XF3m	0.35	0.33	0.05	61.89
98C	P112	XF2n	0.33	0.33	0.06	61.93
98C	P113	XF2n	0.38	0.30	0.05	61.93
98C	P114	XF2n	0.38	0.33	0.04	61.92
98C	P115	XF2n	(東) 0.23 (西) 0.63	0.15 0.45	0.05 0.09	61.93 61.88
98C	P116	XF2o	0.30	0.25	0.10	61.99
98C	P117	XF2o	0.33	0.30	0.08	61.98
98C	P118	XF2o	0.30	0.30	0.13	61.95

調査区	遺構No.	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ	底部レベル(m)
98C	P119	XF2o	0.30	0.28	0.07	62.03
98C	P120	XF2o	0.25	0.25	0.06	62.01
98C	P121	XF2o	0.43	0.35	0.06	61.99
98C	P122	XF2o	0.23	0.20	0.06	61.98
98C	P123	XF2n	0.35	0.33	0.05	61.91
98C	P124	XF2n	0.28	0.25	0.05	61.90
98C	P125	XF2m	0.23	0.23	0.04	61.89
98C	P126	XF2n	0.40	0.35	0.05	61.90
98C	P127	XF2n	0.28	0.25	0.07	61.89
98C	P128	XF2p	0.25	0.25	0.07	62.08
98C	P129	XF2p	0.25	0.25	0.07	62.12
98C	P130	XF2・3p	0.25	0.23	0.08	62.11
98C	P131	XF3n	0.28	0.23	0.03	61.93
98C	P132	XF2k・l	0.35	0.30	0.18	62.01
98C	P133	XF2l	0.33	0.30	0.11	62.03
98C	P134	XF2l	0.28	0.25	0.07	62.07
98C	P135	XF2l	0.28	0.25	0.06	62.07
98C	P136	XF3・4j	0.22	0.21	0.17	60.69
98C	P137	XF2n	0.29	0.25	0.04	61.90
98C	P138	XF2o	0.23	0.22	0.10	61.96
98C	P139	XF3o	0.33	0.25	0.06	61.98
98C	P140	XF3p	0.23	0.20	0.03	62.11
98C	P141	XF2・3p	0.38	0.33	0.12	62.07
98C	P142	XF3j・k	0.26	0.15	0.16	60.83
98C	P143	XF3j	0.21	0.15	0.17	60.74
98C	P144	XF3j	0.54	0.25	0.13	60.79
98C	P145	XF3j	0.20	0.19	0.12	60.72
98C	P146	XF3j	0.52	0.39	0.11	60.75
98C	P147	XF3・4j	0.31	0.29	0.32	60.65
98C	P148	XF4j	0.25	0.24	0.10	60.85
98C	P149	XF3j・k	0.39	0.37	0.08	60.63
98C	P151	XF3n	0.29	0.28	0.29	60.99
98C	P152	XF2n	0.37	0.36	0.14	61.33
98C	P153	XF2o	0.33	0.31	0.32	61.03
98C	P154	XF2o	0.29	0.27	0.14	61.18
98C	P155	XF2o	0.32	0.27	0.08	61.23
98C	P156	XF2o	0.41	0.34	0.19	61.09
98C	P159	XF4h	0.39	0.35	0.10	60.91
98C	P160	XF4h	0.22	0.18	0.11	60.92
98C	P161	XF4i	0.30	0.26	0.11	60.92
98C	P162	XF4i	0.34	0.24	0.10	60.91
98C	P163	XF4h	0.30	0.12	0.09	60.94
98C	P164	XF4h	0.31	0.21	0.07	60.96
98C	P165	XF4h・i	0.26	0.20	0.18	60.86
98C	P166	XF4h	0.30	0.26	0.16	60.78
98C	P167	XF4h	0.20	0.14	0.15	60.88
98C	P168	XF4h	0.27	0.24	0.17	60.80
98C	P169	XF4i	0.45	0.26	0.13	60.93
98D	P170	XE5t	0.25	0.23	0.05	60.89
98D	P171	XE5t	0.40	0.35	0.18	60.76
98D	P172	XE5t	0.43	0.40	0.06	60.87
98D	P173	XE6s	0.43	0.25		60.81
98D	P174	XE5b	0.75	0.50	0.17	60.77
98D	P175	XE6a	-			
98D	P176	XF4g	0.29	0.26	0.23	60.61
98D	P177	XF4g	0.26	0.25	0.42	60.44
98D	P178	XF4g	0.40	0.36	0.29	60.53
98D	P179	XF4g	0.37	0.36	0.24	60.63
98D	P180	XF4g	0.32	0.27	0.16	60.70

溝（SD）

調査区	遺構No.	グリッド	断面形状	幅(m)	深さ(m)	底部レベル	残存長
98A	SD01	IXG18・19n	U字形	2.90	0.50	61.48	5.10
98A	SD02	IXG19・20i	皿状	0.45	0.09	61.77	4.90
98A	SD03	IXG19・20i	皿状	0.25	0.06	61.81	3.80
98A・B	SD04	IXG20i・j	逆台形	0.30	0.13	61.75	3.15
98A・B	SD05	IXG20i	皿状	0.40	0.12	61.78	3.13
98A・B	SD06	IXG20i	皿状	0.43	0.10	61.77	(1.03)
98A	SD07	IXG19i	皿状	0.25	0.06	61.78	3.70
98A	SD08	IXG19k～m	皿状	0.50	0.05	61.86	13.10
98A	SD09	IXG19j'l	皿状	0.35	0.11	61.81	9.60
98B	SD10	IXG20g	皿状	-			
98B	SD11	IXG20f	皿状	0.35	0.13	61.74	4.50
98B	SD12	IXG20f	皿状	0.43	0.08	61.72	4.30
98B	SD13	IXG20f～19h	皿状	0.53	0.13	61.64	(13.38)
98B	SD14	IXG20e・f	皿状	0.38	0.08	61.58	4.30
98B	SD15	IXG20e	皿状	0.40	0.06	61.61	4.15
98B	SD16	XF1・2t	U字形	-			
98B	SD18	XG1a	皿状	0.40	0.06	61.40	3.38
98B	SD19	XF1s・t	皿状	0.80	0.10	SD20上	
98B	SD20	XF1s・t	皿状	1.33	0.08	61.31	(4.05)
98B	SD21	XF1s・t,2t	皿状	(0.60)	0.15	61.02	(1.75)
98B	SD22	XG1a	皿状	(0.25)	0.06	61.40	(2.05)
98C	SD23	XF3・4j	皿状	0.40	0.05	60.98	(46.70)
98C	SD24	XF3・4j	皿状	0.40	0.06	60.97	(46.30)
98C	SD25	XF3g・h・i・j・k・l・m,4h・i・j・k・l・m	皿状	1.05	0.14	60.73	(11.00)
98C	SD26	XF4i・j	皿状	-			
98C	SD27	XF3i・j、4 j	皿状	0.60	0.11	60.88	(7.20)
98C	SD28	XF3 h・i・j・k	皿状	0.75	0.20	60.73	(14.00)
98C	SD29	XF3o	皿状	0.25	0.07	61.95	(2.13)
98C	SD30	XF3n	皿状	0.20	0.05	61.93	1.03
98C	SD31	XF4h	皿状	0.90	0.09	60.95	4.78
98C・D	SD32	XF3h・I,4f～1,5f	逆台形	4.10	0.89	60.14	-
98C・D	SD33	XF3h,4h・I	皿状	1.30		60.60	7.79
98D	SD34	XE6s・t	皿状	0.33	0.03	60.90	(5.80)
98D	SD35	XE6s・t	皿状	0.35	0.04	60.91	(5.70)
98D	SD36	XE5t/XF5a・b,6a・b	U字形	1.45	0.40	60.52	
98D	SD37	XF4c・d,5b・c・d	U字形	7.00	1.00	59.85	(5.65)
98C	SD38	XF1g・q,2n～q	逆台形	セクション図参照			
98D	SD39	XF4・5g	皿状	0.45	0.11	60.76	(3.54)

その他（SX）

調査区	遺構No.	グリッド	種別	備考
98A下層	SX01	IXG19・20i	古代包含層？	
98B	SX02	IXG20f～h	近現代水田	
98B	SX03	XG1a・b	近現代大畦	地籍図道
98B	SX04	XF1s・t	近現代大畦	地籍図道
98C・D	SX08	XF4g'i,5g	近現代畑	地籍図畑
98C	SX09	XF2k'q,3k'q	岩作城土塁基部	地籍図草生地
98C	SX10	XF2n'p,3n'p	最古関連遺構	

遺物登録一覧

E -	遺構番号	産地・時期	材質	器種	口径(cm)	器高	底径	残存/12	釉薬	備考
1	SK04		須恵器	壺蓋	(13.6)	30.5				
2	SD05		須恵器	杯	11.6	2.9	6.2	2		
3	検出		須恵器	杯	11.8	(2.2)	8.4	3		
4	検出		須恵器	椀	11.8	3.0	6.0	3		
5	SX01		須恵器	杯	12.6	(2.5)	-	2		
6	SK16		須恵器	杯	-	(2.4)	6.6	-		
7	撹乱		須恵器	杯	-	(2.5)	(6.4)	-		
8	SD32		須恵器	杯A	10.8	3.8	(7.6)	2		
9	SK12		須恵器	杯	11.8	3.3	9.0	12		
10	SK12No.4 SK16No.1		須恵器	椀	12.2	3.9	6.0	7		
11	SX09南北ベルト4層		須恵器	杯B	-	(1.7)	7.6	-		
12	SX09（土器）		須恵器	杯B	-	(1.9)	9.0	-		
13	SX09最下層		須恵器	椀B か？	-	(1.8)	7.0	-		
14	SX09		須恵器	椀B か？	-	(1.7)	7.4	-		
15	SX09トレンチ		須恵器	椀B	-	(2.7)	7.8	-		
16	SX09（土器）		灰釉系陶器	長頸瓶頚部	-	(5.1)	-	-	灰	
17	検出		須恵器	高杯	16.0	(5.2)	-	4		脚部は欠損
18	SK12		土師器	長胴甕	19.4	(7.2)	-	2		粗ハケメ
19	SX09整地層		須恵器	甕口縁	39.0	(3.2)	-	1		
20	検出		土師器	長胴甕	19.4	(3.1)	-	1		粗ハケメ
21	検出		須恵器	蓋	-	(1.7)	(12.6)	2		
22	検出		須恵器	蓋	13.0	3.5	-	9		
23	SK12・SK16		須恵器	蓋	14.2	3.3	-	2		
24	Pit31		須恵器	蓋	13.4	(2.4)	-	2		
25	SK12		須恵器	蓋	17.2	(2.8)	-	3		
26	SK16		土師器	長胴甕（底部）	-	(4.5)	(6.6)	-		粗ハケメ
27	検出		須恵器	壺	-	(1.4)	(13.4)	2		
28	SK12		須恵器	壺	13.8	3.4	7.6	6		
29	SX09（土器）		須恵器	壺	14.8	2.6	8.2	1		
30	SX10	第7型式	灰釉系陶器	椀	13.0	5.3	6.2	10		高台刻印、内面マメツ
31	SX10（最下層）	第7型式	灰釉系陶器	椀	13.2	5.7	5.0	1		内面マメツ
32	SX10（撹乱）	第8型式	灰釉系陶器	椀	14.8	4.9	6.4	2		内面マメツ
33	SX10（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.6	5.3	(6.2)	2		内面マメツ、長石フキダシ
34	SX10	第8（9）型式	灰釉系陶器	椀	13.6	5.1	6.0	8		外面スス付着
35	SX10（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.2	4.4	5.0	5		内面マメツ？長石フキダシ
36	SX10（最下層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.6	4.2	5.0	4		長石フキダシ
37	SX10	第8型式	灰釉系陶器	椀	12.0	4.3	5.4	3		長石フキダシ
38	SX10（炭化物層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	11.8	4.9	5.6	1		長石フキダシ
39	SX10	第8型式	灰釉系陶器	椀	11.8	4.9	5.6	4		長石フキダシ
40	SX10（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	12.6	6.75	6.0	1		長石フキダシ
41	SX10（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	12.4	5.1	4.8	4		長石フキダシ
42	SX10（炭化物層）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.0	5.3	5.2	10		内面マメツ、長石フキダシ
43	SX10（撹乱）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.4	4.4	4.8	6		外面スス付着、長石フキダシ
44	SX10（撹乱）	第8型式	灰釉系陶器	椀	13.6	5.0	6.4	6		内面マメツ
45	SX09東西トレンチ（炭化物層上）	第7型式	灰釉系陶器	椀	-	3.2	4.8	-		墨書「・」
46	SX10周辺（包含層）	8（9）型式	灰釉系陶器	椀	-	-	5.8	-		墨書花押状
47	SX10	8型式	灰釉系陶器	椀	-	-	5.2	-		墨書花押状
48	SX10（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.4	1.8	4.6	5		
49	SX10（最下層）	第6型式	灰釉系陶器	皿	8.2	1.8	5.4	2		
50	SX10	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.8	1.6	4.8	2		
51	SX10（最下層）	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.8	1.5	5.4	3		
52	SX10（最下層）	第7型式	灰釉系陶器	皿	7.7	1.8	4.5	12		
53	SX10	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.8	1.8	5.0	4		
54	SX10	第8型式	灰釉系陶器	皿	8.0	1.7	5.6	12		底部外面マメツ
55	SX10	第7型式	灰釉系陶器	皿	7.6	1.4	5.0	2		
56	SX10	第7型式	灰釉系陶器	皿	8.6	1.7	5.8	4		
57	SX10（トレンチ）	第8型式	灰釉系陶器	皿	4.0	1.4	5.6	2		長石フキダシ
58	SX10（最下層）	第7型式	灰釉系陶器	皿	8.8	1.5	6.0	3		
59	SX10（撹乱）	第7型式	灰釉系陶器	皿	8.6	1.5	5.3	10		
60	SX10	第7型式	灰釉系陶器	皿	8.2	1.6	5.2	2		
61	SX10（撹乱）	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.8	1.5	5.5	12		
62	SX10周辺（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	皿	8.0	1.5	5.9	7		
63	SX10（最下層）	第8型式	灰釉系陶器	皿	8.2	1.3	6.0	4		長石フキダシ
64	SX10	大畑大洞古か	灰釉系陶器	椀	13.4	5.0	5.0	6		内面マメツ
65	SX10	大畑大洞古か	灰釉系陶器	椀	13.6	5.9	(5.2)	2		
66	SX10	大畑大洞古か	灰釉系陶器	椀	13.6	5.5	4.6	4		内面マメツ
67	SX10（撹乱）	大畑大洞新か	灰釉系陶器	椀	12.6	5.3	(4.6)	2		内面マメツ？
68	SX10	大畑大洞新か	灰釉系陶器	椀	13.2	4.7	4.5	7		内面マメツ
69	SX10（撹乱）	大畑大洞古か	灰釉系陶器	椀	13.8	4.4	4.4	2		内面マメツ
70	SX10（最下層）	大畑大洞古か？	灰釉系陶器	椀	-	4.8	5.0	1		外面底部墨書「〇」
71	SX10	北部系	灰釉系陶器	皿	8.4	1.3	4.6	3		
72	SX10	北部系	灰釉系陶器	皿	8.6	1.3	4.5	10		
73	SX10（最下層）	北部系	灰釉系陶器	皿	8.4	1.0	5.4	4		
74	SX10	北部系	灰釉系陶器	皿	7.7	1.1	5.8	1		
75	SX10	古瀬戸後期Ⅳ古		折縁中皿	16.0	3.6	7.5	9	灰	SX09より混入か？
76	SX10最下層	古瀬戸中期？	灰釉系陶器	段	15.6	(4.6)	-	2	灰	
77	SX10（炭化物）	古瀬戸中期Ⅱ		折縁深皿	26.3	6.8	15.6	2	灰	SX09より混入か
78	SX10（炭化物層）	古瀬戸後期Ⅳ新		天目茶碗	10.3	(4.1)	-	2	鉄	SX09より混入か？
79	SX10	古瀬戸後期Ⅳ新		天目茶碗	12.4	(3.8)	-	2	鉄	SX09より混入か？
80	SX10	古瀬戸後期Ⅲ・Ⅳ		瓶形香炉	-	(6.3)	12.4	-	灰	大型の香炉、SX09より混入か？

E -	遺構番号	産地・時期	材質	器種	口径(cm)	器高	底径	残存/12	釉薬	備考
81	SX10（灰化物層）			花瓶	-	(4.2)	-	-	鉄	
82	SX10	近世？		皿	6.8	2.0	3.4	1	緑	
83	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	(13.2)	5.6	4.6	1		スス付（内）
84	Pit174	第7型式	灰釉系陶器	椀	13.7	5.9	5.2	7		スス付（内・外）、長石ウキダシ
85	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	12.2	5.5	5.5	6		スス付（口縁内側）
86	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.1	4.75	5.5	10		スス付（内・外）
87	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.4	5.3	5.2	8		スス付（口縁内側）、油煙？
88	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.4	5.0	5.2	1		スス付（内・外）
89	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.6	5.4	5.4	9		
90	Pit174	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.3	5.5	5.3	11		
91	SK14	第7型式	灰釉系陶器	椀	-	(5.1)	5.4	-		
92	SK14			片口鉢	-	(6.8)	13.0	-		
93	SX09南北ベルト2層	第8型式	灰釉系陶器	椀	11.8	5.0	5.4	2		
94	SX09南北ベルト10層	第8型式	灰釉系陶器	椀	12.2	4.55	6.0	3		
95	SX09南北ベルト	第9型式	灰釉系陶器	椀	13.4	4.4	6.0	3		
96	SX09南北ベルト4層	第8型式	灰釉系陶器	椀	14.8	(4.4)	-	2		
97	SX09（土層）	第9型式		椀	-	(3.5)	6.6	-		墨書「・」
98	SX09南北ベルト4層	明和	灰釉系陶器	椀	13.4	5.5	5.0	4		
99	SX09南北ベルト10層	大畑大洞（古）	灰釉系陶器	椀	13.0	4.9	(4.4)	1		
100	SX09南北ベルト10層	大畑大洞（古）	灰釉系陶器	椀	12.8	5.0	(4.6)	5		
101	SX09南北ベルト10層	大畑大洞（古）	灰釉系陶器	椀	13.0	(3.8)	-	4		
102	SX09南北ベルト10層	大畑大洞（古）	灰釉系陶器	椀	13.4	4.6	4.2	2		
103	SX09南北ベルト10層	脇之島	灰釉系陶器	椀	12.6	3.1	5.2	2		
104	SX09整地層	常滑11型式		片口鉢	26.0	(7.7)	-	2		
105	SX09南北ベルト10層	瀬戸8.9型式簡行		片口鉢	-	(7.5)	(10.6)	-		
106	SX09南北ベルト10層	如多		片口鉢	-	(8.7)	(11.6)	-		
107	SX09トレンチ		土師器	東伊勢系鍋	21.6	(7.0)	-	2		
108	SX09	第8型式	灰釉系陶器	皿	7.8	1.5	5.0	4		
109	SX09南北ベルト10層	第6型式	灰釉系陶器	皿	7.6	2.0	5.2	5		
110	SX09南北ベルト10層	第7型式	灰釉系陶器	皿	7.6	1.9	(5.2)	2		
111	SX09南北ベルト10層	第8型式	灰釉系陶器	皿	8.1	2.0	5.0	5		
112	検出（包含層）	第8型式	灰釉系陶器	皿？	8.3	1.7	(5.6)	4		墨書「十」か
113	攪乱	第8型式	灰釉系陶器	椀	-	(2.4)	5.0	-		墨書「十」
114	検出	第8型式	灰釉系陶器	椀	-	(1.5)	(6.6)	-		墨書・底外「大」か？
115	トレンチ	尾張型	灰釉系陶器	皿	-	(0.8)	(5.2)	-		墨書「廿」か
116	SX09（土層）	第8型式	灰釉系陶器	皿	8.2	1.5	6.2	5		墨書「・」
117	検出	第8型式	灰釉系陶器	椀	-	-	5.6	-		墨書「作」？
118	表土はぎ　トレンチ	大畑大洞新か？	灰釉系陶器	椀	-	1.2？	4.0	-		墨書
119	SX09整地層	北部系	灰釉系陶器	皿	(8.0)	1.0	(4.0)	3		墨書「井」
120	SX09（土層）	第（？）8型式	灰釉系陶器	椀	-	-	5.2	-		墨書「十」
121	SK41	尾張型	灰釉系陶器	皿	-	(0.7)	(5.0)	-		墨書・底外「十」
122	SX09東西トレンチ	尾張型	灰釉系陶器	椀か皿	-	-	-	-		底外墨書
123	SD25（北）	脇之島	灰釉系陶器	椀	12.8	4.2	4.6	8		
124	SD25（北）	脇之島	灰釉系陶器	椀	13.4	3.2	(5.0)	4		
125	SD25（北）	脇之島	灰釉系陶器	椀	12.2	3.4	(4.2)	1		
126	SD25	脇之島	灰釉系陶器	椀	12.8	3.0	4.8	1		
127	SD25（北）	生田	灰釉系陶器	椀	11.0	2.7	3.4	3		
128	SD25	脇之島	灰釉系陶器	椀	-	(1.0)	5.4	-		墨書「大（口？）」
129	SD25下層	生田	灰釉系陶器	椀	10.1	2.6	4.5	9		
130	SD25（北）	生田	灰釉系陶器	椀	11.4	2.5	3.6	3		
131	SD25（北）	生田	灰釉系陶器	椀	11.0	3.0	4.6	4		
132	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ		広口壺	11.8	(1.9)	-	2	灰	
133	SD25	古瀬戸後期Ⅳ		筒型容器	15.4	(7.0)	-	2	鉄	
134	SD25（北下層）	古瀬戸後期Ⅳ新		天目茶碗	11.2	(5.5)	-	2	鉄	
135	SD25（下層）	古瀬戸後期Ⅲ		天目茶碗	10.8	(3.9)	-	2	鉄	
136	SD25トレンチ	大窯Ⅳ前半		天目茶碗	10.4	(2.8)	-	2	鉄	
137	SD25	古瀬戸後期Ⅳ新		天目茶碗		(1.9)	3.8	-	鉄	底部被熱の痕跡
138	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅳ		内耳鍋	14.8	(6.5)	-	3	錆	
139	SD25（南）	古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ		筒形香炉	-	(3.7)	-	-	灰	
140	SD25（北・南）	古瀬戸後期Ⅳ		内耳鍋	25.0	(8.4)	-	2	鉄	
141	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅳ		茶壺	15.2	(14.0)	-	2	鉄	
142	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅳ新		卸目付大皿	11.2	(8.1)	-	1.2	灰	
143	SD25（下層）	古瀬戸後期III-IV古		卸目付大皿	32.6	(5.5)	-	2	灰	
144	SD25（下層）	古瀬戸後期Ⅳ新		擂鉢	29.8	(3.9)	-	2	鉄または錆	
145	SD25（下層）	古瀬戸後期Ⅳ新		擂鉢	28.0	(6.7)	-	2	鉄	
146	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅳ		擂鉢	33.6	(5.4)	-	1	錆？	
147	SD25（南）	古瀬戸後期Ⅳ		擂鉢	-	(5.1)	(10.6)	-	鉄	
148	SD25	大窯Ⅱ		焼塩	9.8	(1.6)	-	2	鉄	
149	SD25（北）	古瀬戸後期Ⅳ		直縁中皿	17.6	(3.4)	-	4	灰	
150	SD25（北）	古瀬戸中期Ⅰ・Ⅱ		仏供	-	(2.9)	5.6	-	灰	
151	SD25（北・南）		土師器	皿	5.3	1.0	3.4	3		非ロクロ
152	SX10（廃棄）			陶丸		13.3g		2.3×2.2cm		表面は滑らか
153	検出			陶丸		14.9g		2.4×2.3cm		大きさは付着物除く

E -	遺構番号	産地・時期	材質	器種	口径(cm)	器高	底径	残存/12	釉薬	備考
154	SD31			陶丸	16.8g		2.5×2.3cm			
155	表土はぎ トレンチ			陶丸	11.1g		2.3×2.3cm			欠損
156	SX10（包含層）			陶丸	13g		2.5×2.3cm			
157	SD21			陶丸	12.5g		2.3×2.5cm			モミ痕アリ
158	SK41			陶丸	15.6g		2.4×2.4cm			
159	SD25（北）			陶丸	4.5g		2.1cm			1/2残欠
160	SD36	古瀬戸中期IV		平椀	15.0	8.2	5.6	6	灰	
161	SD36	大洲東	灰釉系陶器	椀	13.0	3.4	4.1	6		
162	SD36	大洲東	灰釉系陶器	椀	13.0	3.6	4.0	3		
163	SD36		土師器	羽付釜	19.6	(4.7)	-	1		
164	SD36	北部系	灰釉系陶器	皿	8.2	1.0	4.2	5		
165	SD32	古瀬戸後期IV		直線大皿	26.6	(4.8)	-	1	灰	
166	SD32	古瀬戸後期IV		直線大皿	25.8	(4.7)	-	3	灰	
167	SD32	古瀬戸後期IV古		折目付大皿	29.6	(3.1)	-	1	灰	
168	SD33	古瀬戸後期IV新		折目付大皿	28.0	3.4	-	1	灰	
169	SD32	古瀬戸後期IV		折目付大皿	-	(7.9)	(17.0)	-	灰	
170	SD32	古瀬戸後期IV古		線輪小皿	10.8	2.6	4.2	2	灰	外面底部油煙付着
171	SD32	古瀬戸後期III-IV古		片口小皿	-	(3.4)	5.6	-	灰	
172	SD32	古瀬戸後期III-IV古		天目茶碗	11.4	7.0	4.0	1	鉄	
173	SD32	古瀬戸後期IV新		折目付大皿	30.0	(5.1)	-	1	灰	
174	SD32	古瀬戸後期IV新		鉢鉢	29.0	(8.3)	-	1	錆	
175	SD32	脇之島	灰釉系陶器	椀	-	(1.9)	(5.0)	-		墨書
176	SD32		土師器	皿	9.0	1.2	7.0	2	赤ロクロ	
177	SD32		土師器	皿	10.8	2.0	6.0	1	ロクロ	
178	SD32		土師器	内耳鍋	28.0	(4.5)	-	1		
179	SD32ベルト		土師器	羽付釜	40.0	(3.4)	-	1		
180	SD33	常滑10型式		壺	38.0	13.6	-	3		15C
181	SD28	古瀬戸後期III		筒型容器	14.6	(6.7)	-	2	灰	
182	SD28	古瀬戸後期IV新		折目付大皿	32.6	9.8	(14.0)	2	灰	
183	SD28	古瀬戸後期IV		線輪小皿	9.6	1.6	4.2	3	灰	
184	SD28	古瀬戸後期IV新		線輪小皿	9.5	1.6	5.2	4		灰
185	SD27	生田	灰釉系陶器	皿	11.3	2.4	4.4	9		
186	SD28		土師器	皿	6.8	1.2	-	3		
187	SD28		土師器	皿	7.0	1.4	(4.4)	5		赤ロクロ
188	SD27		土師器	皿	10.6	(2.1)	-	2	灰	
189	SD28		土師器	皿	12.0	(1.6)	-	2	ロクロ	
190	SD28		土師器	皿	11.6	(1.7)	-	2	ロクロ	
191	SD28		土師器	皿	-	(1.3)	(7.0)	-		
192	SX09南北ベルト10層	古瀬戸後期IV古		天目茶碗	12.4	(5.8)	-	2	鉄	
193	SX09	古瀬戸後期IV新		天目茶碗	12.4	(5.5)	-	3	鉄	
194	SX09（土器）	古瀬戸後期III		天目茶碗	11.0	(3.4)	-	2	灰	
195	SX09（土器）・検出	古瀬戸後期IV新		天目茶碗	-	(4.0)	4.0	-	鉄	
196	SX09南北ベルト9層	古瀬戸後期III		天目茶碗	-	(3.5)	3.2	-	鉄	
197	SX09（土器）	古瀬戸中期II		平底未広椀	10.8	5.0	4.6	8	灰	
198	SX09	古瀬戸後期IV		平鉢	17.0	(4.0)	-	2	灰	
199	SX09（土器）トレンチ	古瀬戸中期IV		線輪小皿	-	(3.1)	5.4	-	灰	
200	SX09	古瀬戸後期II		卸皿	14.2	(3.2)	-	2	灰	
201	SX09 中央トレンチ			折線中皿	15.8	(2.5)	-	2	灰	
202	SX09（土器）	古瀬戸中期III		折線中皿	18.0	(3.9)	-	2	灰	
203	SX09（土器）	古瀬戸前期II		洗	21.0	(7.6)	(15.4)	2	灰	
204	SX09トレンチ	古瀬戸前期II		洗	27.0	(5.0)	-	2	灰	
205	SX09（土器）	古瀬戸中期I - II		木明	(22.5)	(7.0)	-	2	灰	
206	SX09	古瀬戸後期		水指	15.6	(9.8)	-	3	鉄	
207	SX09トレンチ	（15世紀～）	白磁	口禿皿	9.6	2.5	4.2	1		
208	SX09	古瀬戸前期III-中期II		入子	15.2	(2.1)	-	2		
209	SX09（土器）	古瀬戸後期I		折縁深皿	21.2	5.2	8.8	1	灰	
210	SX09（土器）	古瀬戸後期III		直線大皿	28.0	(7.2)	-	2	灰	
211	SX09（土器下）	古瀬戸後期III		折目付大皿	30.0	(7.6)	-	2	灰	
212	SX09（土器）	古瀬戸後期III		折目付大皿	(28.0)	-	(12.0)	1	灰	
213	SX09整地層	古瀬戸後期IV新		折目付大皿	34.0	(2.3)	-	1	灰	
214	SX09中央トレンチ	古瀬戸後期IV新		瀧鉢	27.8	(8.7)	-	2	鉄	
215	SX09整地層	古瀬戸後期IV		鍋	22.2	(3.0)	-	2	鉄	
216	SX09	古瀬戸後期IV		内耳鍋	26.4	(7.4)	-	3	錆？	
217	SX09（炭化物層上）	古瀬戸後期IV		土瓶・蓋	-	(3.5)	3.5	-	錆	
218	SX09（土器）		青磁	碗	15.0	(2.7)	-	1		
219	SX09（土器）・SX10（炭化物層）	古瀬戸中期I - II		小型の瓶子（？）	2.8	-	-	6	鉄	
220	SX09南北ベルト9層	古瀬戸後期II - IV		瓶子	-	(12.5)	-	-	鉄	
221	SX09（土器）	古瀬戸後期II		四耳壺	14.0	(3.6)	-	2	灰	
222	SX09整地層	古瀬戸後期IV		四耳壺	-	(10.9)	-	-	灰	
223	ＳＸ09トレンチ	古瀬戸前期II	灰釉系陶器	四耳壺	-	(2.5)	6.4	-	灰	
224	SX09	古瀬戸後期II - IV		口広有耳壺	-	(2.9)	9.4	-	鉄	
225	SX09整地層	古瀬戸前期III - IV		瓶子（梅瓶）	-	(8.6)	(11.2)	-	灰	
226	SX09整地層	古瀬戸後期I - II		四耳壺	-	(5.5)	5.5	-	灰	
227	SX10（溝状）・SX09（土器）	常滑6a型式か		壺	(16.8)	(10.4)	-	5		
228	SX09	常滑（時期不明）		壺	20.0	(8.0)	-	2		
229	SX09	常滑（時期不明）		壺（底部）	-	(4.8)	(15.0)	-		

E -	遺構番号	産地・時期	材質	器種	口径(cm)	器高	底径	残存/12	釉薬	備考
230	SX09	常滑8（9）		壺	-	(6.2)	-	1		
231	SX09トレンチ	常滑7（bb）		壺	-	-	-	1		
232	SX09	常滑10型式？		壺	31.4	(4.3)	-	2		
233	SX09（土居）		土師器	羽付釜	(23.4)	(2.8)	-	1		
234	SX09（南北ベルト4層）		土師器	羽付釜	24.0	(2.5)	-	2		
235	トレンチ		土師器	羽付釜	(24.4)	(4.1)	-	1		
236	SX09		土師器	内耳鍋	-	(4.5)	-	-		
237	SX09トレンチ		土師器	皿	7.8	1.1	6.2	2	非ロクロ	
238	SX09トレンチ		土師器	皿		(0.6)	5.6	-	ロクロ	
239	SX09整地層	17c末		焼締擂	12.0	(2.3)	-	1	鉄	
240	SX09			丸瓶	10.0	(4.9)	-	1	長石	
241	検II		土師器	羽付釜	-	-	-	-		
242	検III		青磁	碗	14.8	(3.4)	-	1		連弁文、龍泉窯系
243	SX08表土	近世		瓶類丸瓶	10.4	(5.7)	-	9	灰、鉄	18世紀前半か？
244	SX08	古瀬戸中期III		灰皿系碗	-	(2.3)	4.2	-	灰	切り離しただけの高台
245	SX08表土	美濃		灯明皿	8.0	(2.7)	(6.4)	3	鉄	
246	検I		染付	加工円盤	4g			2.4×2.3cm		周囲断面ケズリ
247	検I	近世？		加工円盤	11.5g			3.1×2.4cm	鉄	
248	検I	唐津	陶器	加工円盤	3.4g			2.2×1.9cm		
249	検I		土師器	土錘	2.9g			5.0×0.8cm		やや硬質の焼成
250	SX09（土居）・検III		土師器	土錘	1.6g			3.3×0.8cm		
251	SX10（包含層）		土師器	土錘	1.9g			3.0×0.9cm		
252	SX10（包含層）		土師器	土錘	1.6g			3.0×0.8cm		
260	検I		土製品	銭						万寿図版 No.260

石製品

S -	グリッド	遺構番号	種別	石材	備考
253	XF2p・XF1p	SX09・検I	石鍋	滑石	
254	XF3i	北東トレンチ	硯	頁岩	
255	XF2n	SK40	砥石	凝灰岩	研磨面3
256	XF3j	SK41	砥石	砂質凝灰岩	研磨面3
257	XF2p	SX09（土居）	砥石	凝灰岩	
258	XF3n	SX10周辺（包含層）	砥石	凝灰岩	
259	XF4g	SX08トレンチ	砥石	凝灰岩	研磨面3

遺跡遠景（西から）

遺跡上空より（平成10年5月撮影）

図版1

A区（西から）

B区西半（西から）

C区（西から）

D区（西から）

SX09（土塁）検出状況

左上　SX09断面（南東から）

左下　SX09・SX10断面（東から）
セクション右手が初期盛り土部分、
左黒色土層がSX10

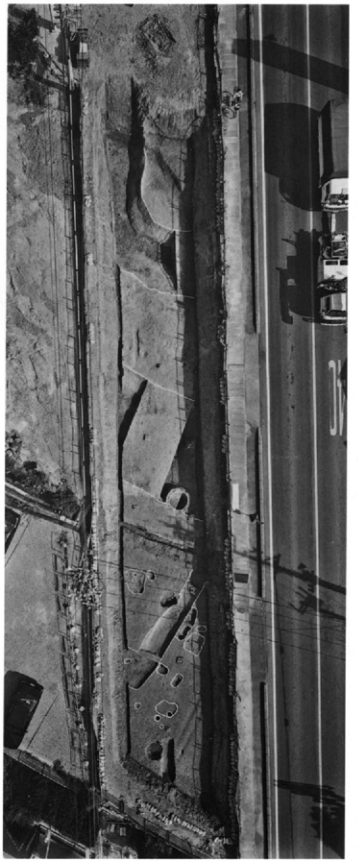
右上　SX10東西ベルト

右下　SX10炭化物層の落ち込み
（西から）

上　SD32-a 断面（東から）

中　SD32-a,-b 断面（南から）
SD32-b 右肩に角礫の層がみえる

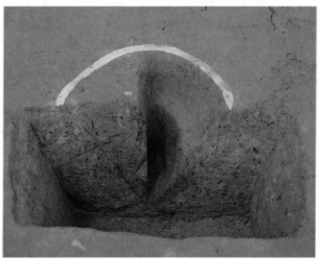
下　SD36（南東から）

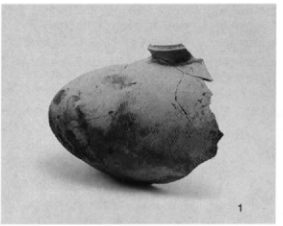


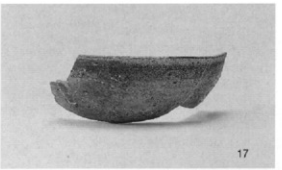
D 区全景（左手が北）

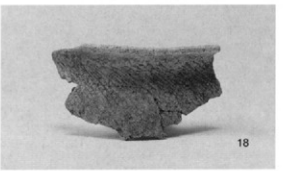
上　B区西半（左は交差点をはさんでC区へ続く）

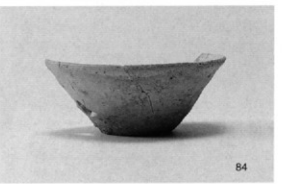
中左　SK16　　中右　Pit39　　下左　A区下層横瓶検出状況　　下右　Pit38

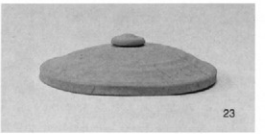


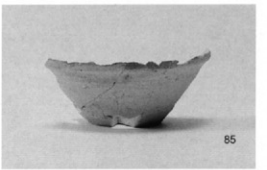












図版6

197

160

142

220

219

193

78 79

141

80

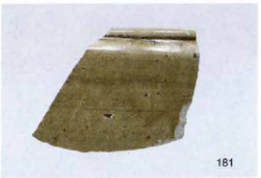
222

図版 7

149

184

75


181

227

180

182

150

203

76

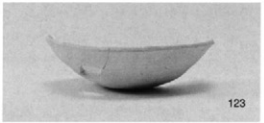
245

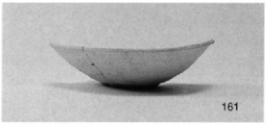
243

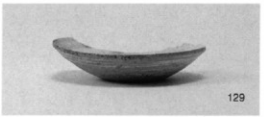
図版 8

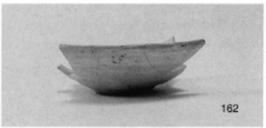
34

86


123

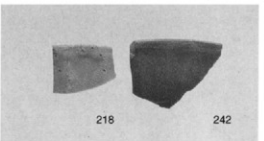

161

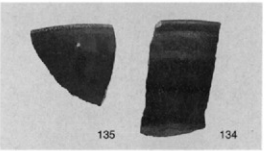

129

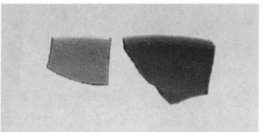

162

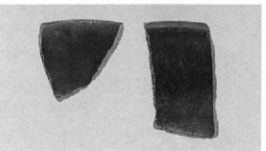
133

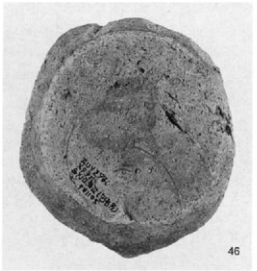
172


218
242

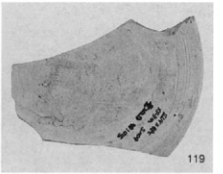

135
134

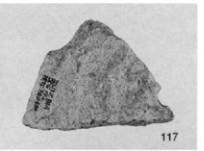





46

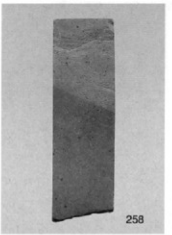
47


119

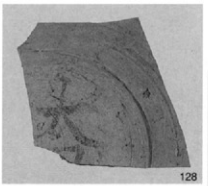

117

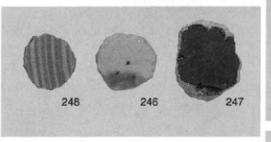
260

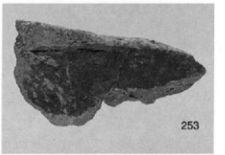
113

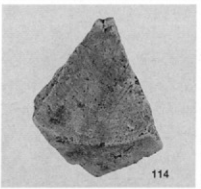

258

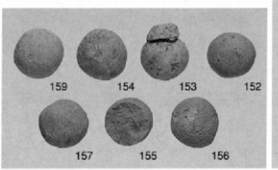
254

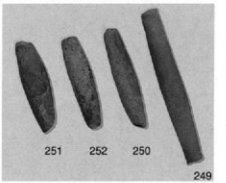

128


248 246 247


253


114


159 154 153 152
157 155 156


251 252 250 249

図版10

能見城跡

東加茂郡旭町大字榊野

例　言

1. 本書は愛知県東加茂郡旭町大字榊野字桜埜に所在する能見城跡（『愛知県遺跡地図』（Ⅱ）知多・西三河地区による遺跡番号は69031、旭町古城跡番号は8、『愛知県中世城館跡調査報告Ⅱ(西三河地区)』による番号は070-011）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施し、整理報告書作成は事業を引き継いだ財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査期間は平成10年5月～同年10年9月である。
4. 発掘調査は木下　一（主査）、花井　伸（調査研究員）、藍山誠一（調査研究員）が担当した。
5. 調査・報告書作成に際して次の機関から御協力を得た。
   愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部、旭町教育委員会
6. 調査・報告書作成に際して次の方々の御教示、御協力を頂いた。記して感謝の意としたい。
   安藤昭夫、安藤敬子、安藤千八子、安藤亨、安藤房子、池野みち子、石原久雄、柴田鋼三九、鈴木茂夫、鈴木鎮夫、鈴木任、千田嘉博、七原恵史、原田保治、深見とき子、松井新一、三浦丈一、三浦弘子、山本幸平、山本文雄　　（五十音順・敬称略）
7. 平成10年7月12日（土）には、能見城跡の発掘調査現場において、愛知県中世城郭研究会の方々と能見城跡検討会を行った。9名の参加者があり、貴重な御教示をを賜った。記して感謝の意としたい。
8. 平成10年8月22日（土）午後2時より現地説明会を実施し、約150名の参加者を得た。
9. 報告書作成に関わる整理作業には藍山誠一・武部真木（本センター調査研究員）があたり、阿部佐保子（研究補助員）、加藤豊子（整理補助員）、服部里美（整理補助員）の協力を得た。
10. 写真図版の撮影は、遺構を藍山誠一・花井　伸が、遺物は深川　巡が撮影した。
11. 本報告の編集は藍山誠一が中心に行い、武部真木の協力を得た。
    本報告の執筆は、木下　一、花井　伸、堀木真美子、武部真木、藍山誠一が行った。
12. 能見城跡の調査前全景と遺構の立体図面は大鋼恵美（中日本航空株式会社）氏により作製していただいた。記して感謝の意としたい。
13. 本報告で使用している遺構略記号は以下の通りである。
    SD…溝、SK…土坑、ST…耕作地、SX…土塁状遺構・曲輪・階段状遺構、SZ…土坑墓
14. 本報告で使用する遺構埋土等の色調については、1989年度版『新版標準土色帖』小山正忠・竹原秀雄編著を参考に記述した。
15. 遺構の空中撮影、及びその図化は中日本航空株式会社による。
16. 調査区の座標は、建設省告示の国土座標第Ⅶ系に準拠する。
17. 調査の実測図、写真の記録は財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
18. 調査による出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

能見城跡　目次

第1章　前　言　（藤山）…… 1
1. 遺跡の位置
2. 調査に至る経緯と経過
3. 調査方法
第2章　地理的・歴史的環境　（花井）…… 2
1. 地理的条件
2. 歴史的環境
第3章　遺　構 …… 4
1. 地形測量の結果（藤山）
2. 発掘調査の成果（藤山）
3. 調査の概要・検出された遺構
能見城の時期（藤山）
畑の時期（藤山）
土壙墓　（堀木）
第4章　遺　物　（武部）…… 22
1. 遺物組成と出土分布
2. 陶磁器類
3. 石・金属製品
第5章　まとめと考察 …… 26
1. 能見城跡の考古学的性格　（藤山）
2. 出土遺物の構成　（武部）
3. 耕作地遺構　（藤山）
付論　「能見城跡の城主について」（木下　一）…… 28

付表・図版

遺物登録一覧　（1）
写真図版　（1-5）

図版目次

写真図版 1　調査区全景・SX01
写真図版 2　SX02・SX03
写真図版 3　SX04・畝状遺構全景
写真図版 4　ST04,05,06・ST07,08・SZ01
写真図版 5　出土遺物
図版 6　調査前の能見城跡
図版 7　能見城跡遺構図

挿図目次

第 1 図　調査区位置図（1/10.000）
第 2 図　遺跡分布図（1/20.000）
第 3 図　能見城跡縄張図
第 4 図　能見城跡地形測量図（1/500）
第 5 図　遺構全体図（1/400）
第 6 図　基本層位 1（a-b-c）（1/80）
第 7 図　基本層位 2（d-e-f）（1/80）
第 8 図　基本層位 3（g-h-i）（1/80）
第 9 図　基本層位 4（j-k-l）（1/80）
第 10 図　基本層位 5（m-n-o）（1/80）
第 11 図　基本層位 6（p-q,r-s）（1/80）
第 12 図　SX04 遺構図（1/100）
第 13 図　畝状遺構全体図（1/400）
第 14 図　SZ01,02,03 平面・断面図（1/20）
第 15 図　出土頭骸骨・残存部模式図
第 16 図　出土遺物組成と古瀬戸器種・時期別一覧
第 17 図　遺物図版（陶磁器）
第 18 図　遺物図版（土師器皿）
第 19 図　遺物の出土分布遺物
第 20 図　松平家の分立図
第 21 図　鈴木系図

第1章　前　言

1. 遺跡の位置

能見城跡は愛知県東加茂郡旭町大字榊野字桜型に位置する遺跡で、南約2.0㎞には国道158号線が走り、国道158号線から北に分かれる県道土岐・足助線と西からつづく県道平沢・御蔵線の合流する南西に隣接する。本遺跡は直線距離にして足助町旧町並みから北東約7.3㎞、旭町小渡から南約4.5㎞にある。

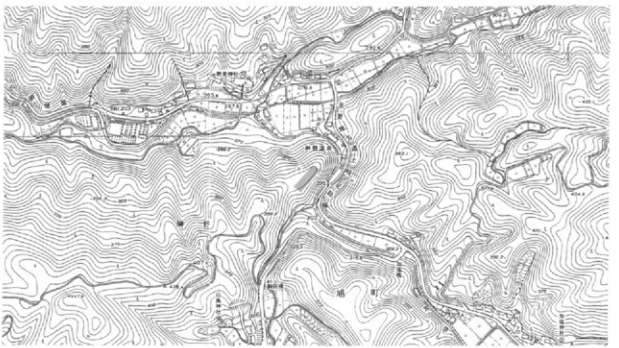
2. 調査にいたる経緯と経過

愛知県土木部道路建設課において計画された県道土岐足助線建設に際し、その予定地内に中世の城館跡である「能見城跡」（遺跡番号県69031、旭町古城跡8、愛知県中世城館跡番号070-011）が所在しており、事前に発掘調査し、記録保存する必要性が認められた。そのため新県道建設に先立って、愛知県土木部より愛知県教育委員会をとおして委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが平成10年5月から同年9月までの期間で、能見城跡の発掘調査を実施した。調査面積は2000㎡である。

発掘調査終了後、平成11年度に出土遺物の整理作業、及び報告書作成を行った。

3. 調査方法

始めに遺跡全体に茂っていた樹木や下草、及び植物の腐食層を人力により除去した後、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、遺跡のある丘陵尾根先端部分の地形測量を行った。次に遺跡の形状に合わせてトレンチを設定し、基準層位を確認した上で機械掘削が困難な平坦面2（SX02）を除き、現地表面から表土のみをバック・ホウにより除去した。その後、手掘りで遺物包含層を掘削して遺構検出する方法をとった。調査の進行上、基本的に遺構測量はヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1／50基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。　（藤山誠一）



第1図　調査区位置図（S=1/10,000）

第2章　地理的環境・歴史的環境

1　地理的条件

能見城は東加茂郡旭町大字榊野にある戦国時代の山城である。東加茂郡は愛知県の北部にあたる。標高300～1000ｍの山々が続き、足助町中心部で標高120ｍの概ね東高西低の地形となる。郡内を流れる中小の川は矢作川の支流であり、各川沿いに城が点在する。集落は、谷や小盆地に点在している。

能見城は能見集落の南、山の尾根の突端にあり、標高330ｍ前後である。北側から東側にかけて矢作川の支流の阿摺川、南側は阿摺川の支流の大井川が流れ、川筋からの高さは50ｍにもなる天然の要害である。

2　歴史的環境

能見城のある榊野の広見遺跡では、昭和54年の圃場整備事業が実施されるに当たって、遺跡の範囲確認調査が行われた。そこで多数の縄文土器片が出土し、その中に押型文土器片が含まれていた。これは縄文時代早期に属し、旭町内の土器としてはもっとも古いものである。広見遺跡は阿摺川に面した谷底の河岸段丘上にあり、平坦部が広く水害や崖崩れの心配がないため、生活するには都合のよい地形といえる。11世紀から12世紀初頭には、旭町は、皇室領である高橋新庄に入っていたものと推定される。室町時代では、高橋新庄の地域は足助庄と呼ばれるようになり、旭町の多くは足助庄の介木郷と阿摺郷に分かれていた。このころにできた集落が現在まで続いていくことになる。旭町誌に掲載されている松井孟採集結果により作成された遺物出土一覧表によると、須恵器は少なく、平安時代初頭までは旭町には生活する人々が少なかったと思われる。しかし、灰釉陶器や山茶椀の出土地点が多いことから、鎌倉時代に人口が飛躍的に増加したといえる。旭町の場合、尾張や三河で生産された猿投系の山茶椀だけでなく、東濃で生産された美濃系の山茶椀が多くみられる。美濃国とは矢作川で隔てられているものの、東美濃の山茶椀の生産地に近いためであると思われる。

室町時代中期になると多くの土豪が生まれ、「山城」と呼ばれる城砦がつくられた。主なものとしては足助鈴木氏の本城である真弓山城があり、阿摺川中流ではもっとも大きい城である。鈴木氏一族が支配していた円山城、美濃街道の宿場町で矢作川の渡船場があった小渡城がある。また、宝篋印塔や五輪塔などの古い墓も多い。山城は、当時の道を押さえることができる場所が選ばれていることが多く、山城の分布状況を見ると重要道路をある程度推測することができる。

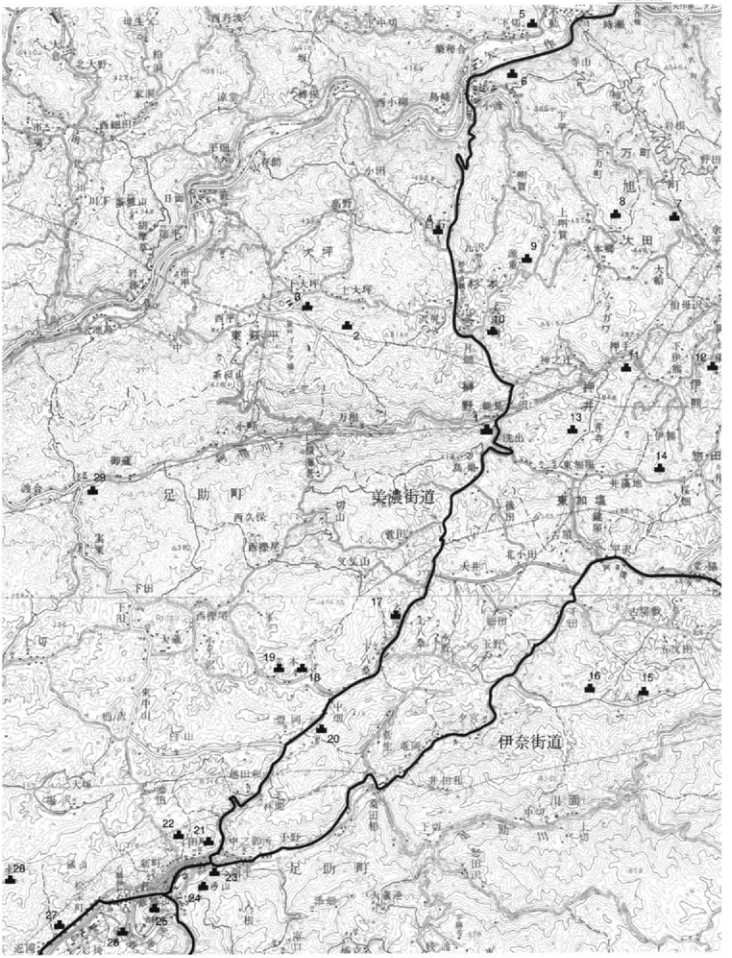
能見城のある榊野は、明治時代に月畑、小沢、能見、鳥ノ巣の4つの村が合併してできた。当時は能見の誠護寺が能見小学校の校舎として使われたり、野見神社付近に郵便局が設置されたことから、明治末まで榊野が旭町の中心であったが、近年では過疎化の傾向にある。

（花井　伸）

参考文献
旭町誌編集研究会1981「旭町誌」愛知県教育委員会1994「中世城館跡調査報告Ⅱ（西三河地区）」
『角川日本地名大辞典』23　愛知

右図凡例

1能見城　2大坪城　3大坪古城　4白石城　5下切城　6小渡城　7万町城　8太田城　9源重城
10大垣内城　11押手城　12槙本城　13二井寺城　14加塩城　15芦ノ入城　16千ノ田城
17八桑城　18久木殿屋敷　19久木城　20安代城　22城山城　21大観音城　23今朝平村古屋敷
24真弓山城　25飯盛山城　26臼木ヶ峰城　27成瀬城　28黍生城　29円山城



第２図　能見城周辺の主な中世城館と街道（S=1/20,000）

第3章　遺　構

1. 地形測量の結果

概要　城跡と考えられている丘陵の尾根先端部分について測量を行った。能見城跡は丘陵尾根先端の大部分を占める平坦面（以下平坦面1）とそれに伴う曲輪と考えられる北東の傾斜の緩い部分（以下平坦面2、調査時はSX02）、南東の平坦な部分（以下平坦面3、調査時はSX03）からなる。平坦面1のほぼ中央には土塁状の遺構（以下SX01）が位置する。以下各部分について述べる。

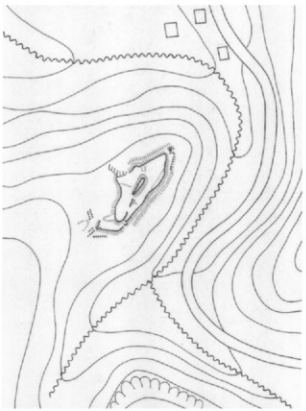
平坦面1　平坦面1の平面は北西部がややへこんだ楕円形で、南北61 m、東西は中央部分で32 mの規模をはかる。平坦面1の中央にあるSX01の西側が標高334 m～335.5 mでSX01の東側に比べて高く、東から西に緩く傾斜する。SX01の東側は標高332 m～334 mで西から東に緩く傾斜する。SX01の北側は333 m～334 mで北に低くなる。SX01南側にはSX01の軸線上に高さ0.7 m程の段差がある。平坦面1の周囲の斜面は傾斜角度が45度以上の急傾斜となっており、北側斜面の一部は幅10 mにわたって斜面土砂が崩落して崖状となっている。平坦面1東側斜面の標高329 m前後から下部において、大型の花崗岩がいくつも露出している。

平坦面1のSX01西側では、SX01の裾部からほぼ西に幅2 m、深さ0.1 m程の溝が2条掘られた痕跡があり、昭和期前半に営まれた桑畑の単位を示すようである。またその2条の溝の南と北には、等高線に現れていない畑の畝の痕跡がほぼ1 mの間隔でほぼ南北に残っていた。SX01の北側にも畝の痕跡は残らないが南北にはしる溝が2条あり、狭い範囲であるが、マウンド状になった畑の痕跡が残る。

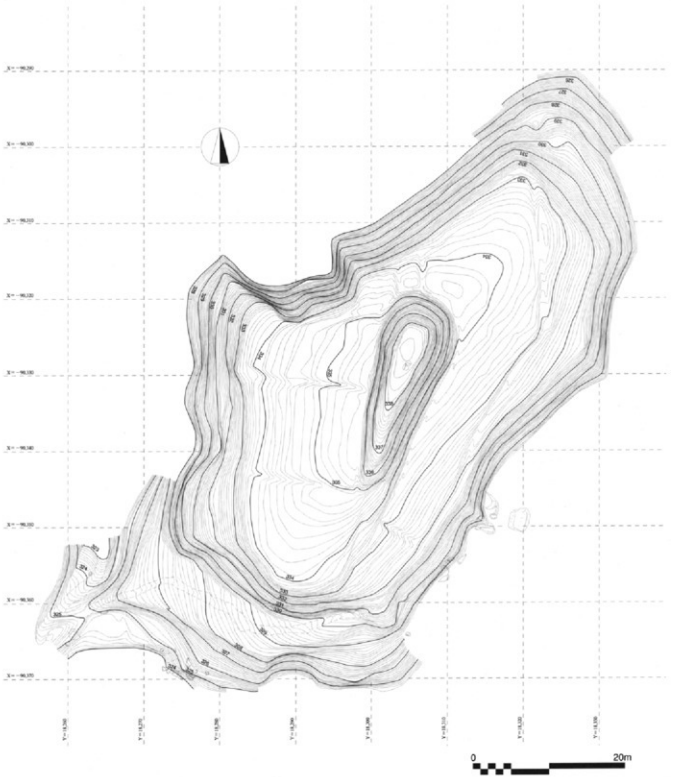
SX01の東側には平坦面1の東端にそって幅1.5 m程の道があり、SX03からSX01に上がる道とつながっている。SX01の南東側にも西側と同様な溝跡が南西にはしる。昭和期前半にはサツマイモ畑となっていた部分である。

SX01　SX01の平面は、隅丸の長い二等辺三角形で、長径28.0 m、短径11.0 m、高さは東側で5.0 m、西側で3.0 mとなる。最高部が標高338.35 mで、主軸方位がN-19°-Eである。最高部に長径35 cm程の3個の板状の河原石が残っていた。

平坦面2　平坦面2は平坦面1の北東に位置するもので、標高329 m～330 mの間に認められる。平坦面1からの比高差は3.5 m前後で、平坦面2は平面三日月形で、長さ8.0



第3図　能見城跡縄張図
「愛知県中世城館跡調査報告」より



第４図　能見城跡地形測量図（S=1/500）

m、幅3.0 mにわたって確認できた。やや傾斜がある。

平坦面3　平坦面3は、平坦面1の南西側に位置するもので、標高327 m～330 mの間に認められる。平坦面3は平面長方形で、現状では長さ35 m、幅7～8 mにわたって確認できた。東から西にかけて緩やかに傾斜している。平坦面3の南西隅部において土橋を介して旧能見村から旧鳥の巣村をつなぐ古道につながる。土橋は、長さ7 m、上面幅1.5 m前後のものである。

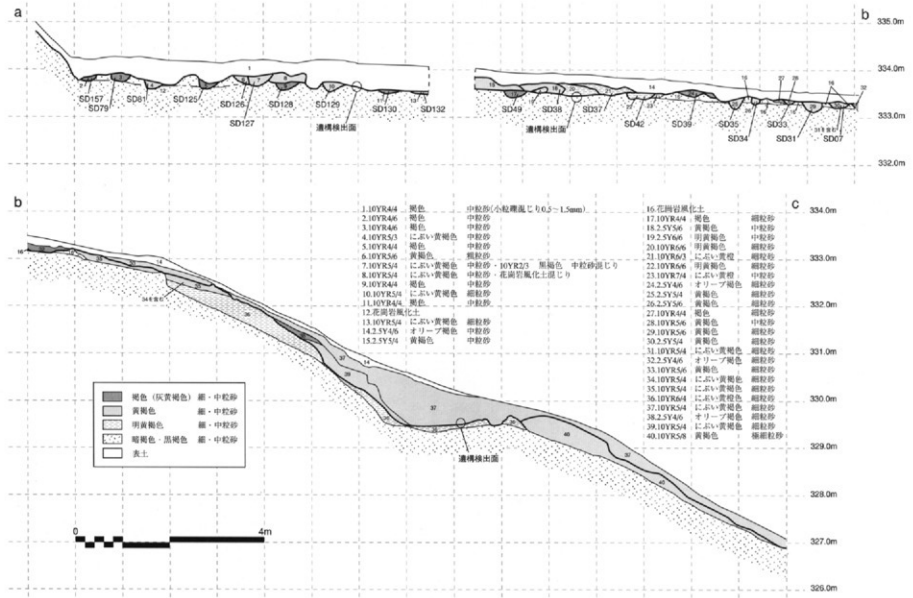
2. 発掘調査の成果

基準層位　地形測量で述べた地表面から近年の耕作や調査前にあったヒノキ等の根による土壌化による表土(にぶい黄褐色～オリーブ褐色細粒砂)があり、その下部は花崗岩やその風化土の地山が現れる。遺構として検出した溝に掘り込まれ、近年の土壌化を免れている土層が20 cm前後残存している所が部分的に確認できた。表土の深さは平坦面1のSX01北側で20 cm～50 cm、SX01西側で30 cm～40 cm、SX01東側で40 cm～50 cm、SX01南側で20 cm～40 cm、SX01の上面で20 cm前後で、平坦面1の東側斜面への変換点付近では1 mを超える堆積があった。平坦面2や平坦面3においても、表土が50 cm～80 cm堆積していたが、平坦面1から平坦面2に下る斜面には、平坦面1から流れ落ちた能見城の時期の遺物を含む土層が30 cm前後堆積していた。

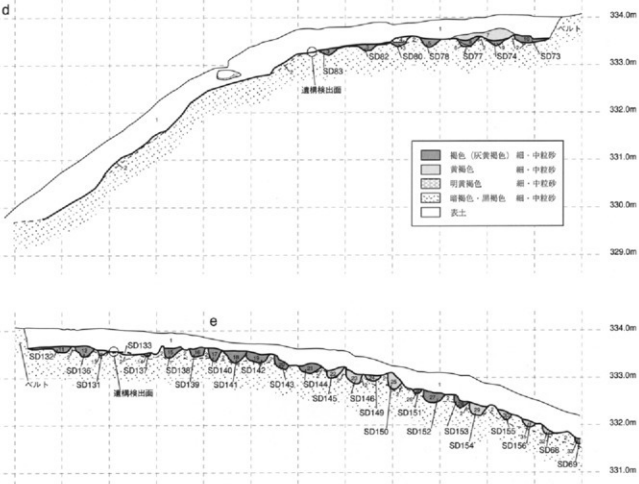
したがって遺構として掘削調査したのは、表土直下の花崗岩やその風化土に掘り込まれ、堆積した溝などで、埋土は古いSTの溝（ST01～ST03、ST06～ST15）が黄褐色・にぶい黄褐色～褐色細粒砂、新しいSTの溝(ST04・ST05）がにぶい黄褐色～褐色・オリーブ褐色の細粒砂で、古いSTの溝の方が明るい色調であった。

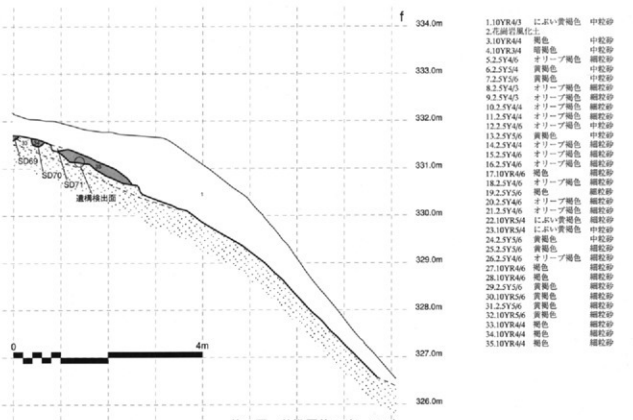
ST02
ST01
ST04
ST03
ST07
SX01
ST06
ST05
ST11
ST12
ST13
ST09
ST14
ST10
ST15
SX04
SZ02
SZ03
SZ01
SX02
0
20m

第5図　遺構全体図

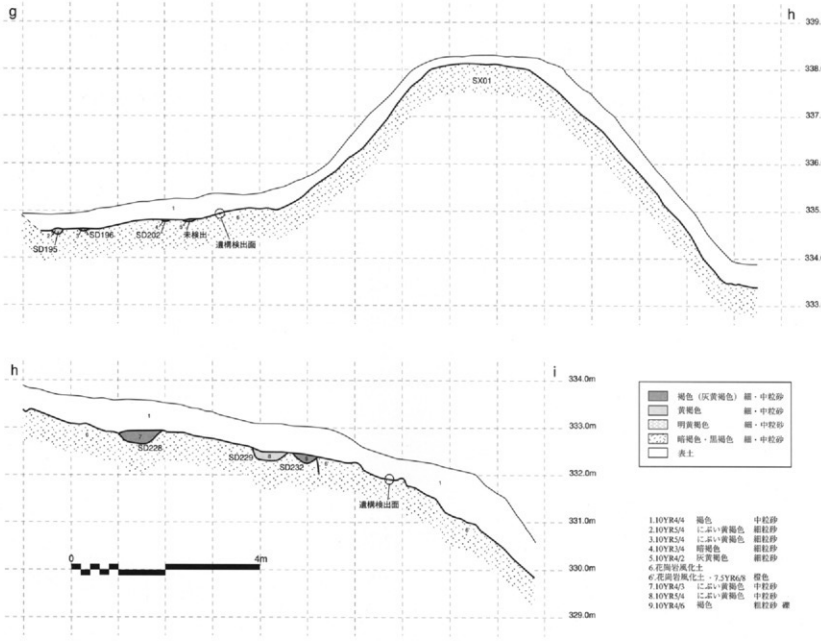


第6図 基準層位1（S=1/80）

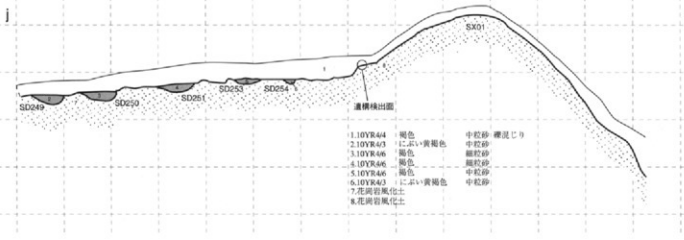


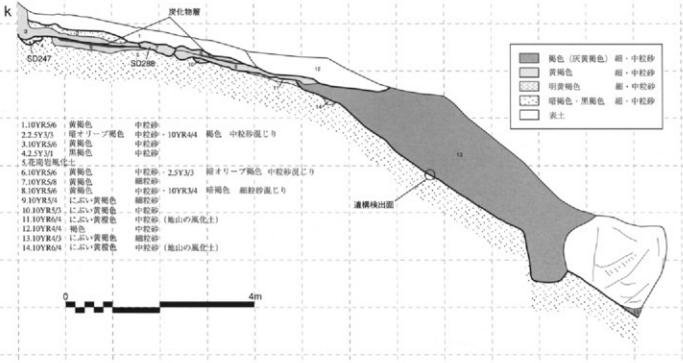


第７図　基準層位２（S=1/80）

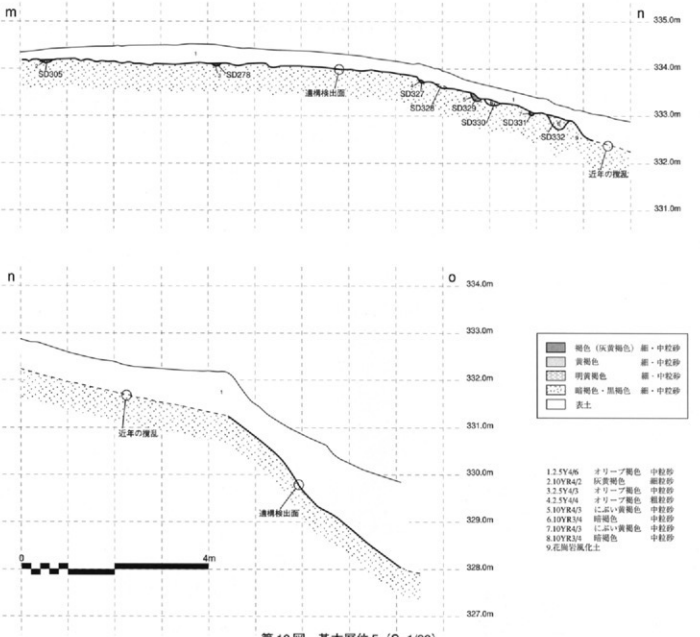


第8図　基本層位3（S=1/80）

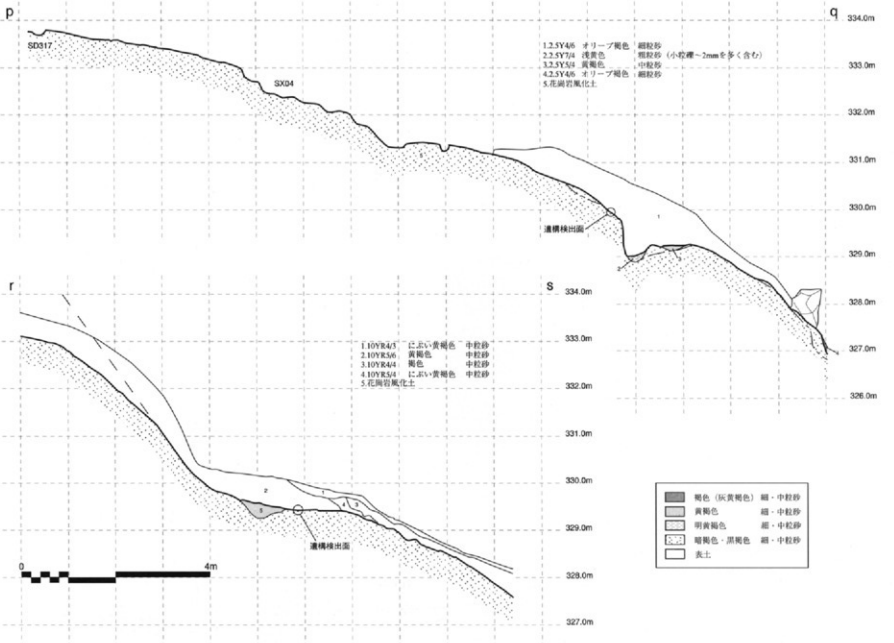




第9図　基本層位4（S=1/80）



第10図　基本層位5（S=1/80）



第11図　基本層位6（S=1/80）

3. 調査の概要、検出された遺構

発掘調査により検出された遺構は、能見城の時期（15世紀後半）と畑の時期（耕作に関係すると思われる溝の掘られる時期、江戸時代以前）の大きく2時期に分けられる。また能見城の後、溝の掘られる前後の時期のものとして土坑墓が3基検出された。

能見城の時期

平坦面1、平坦面2（以下SX02）、平坦面3（以下SX03）、土塁状遺構（以下SX01）、階段状遺構（以下SX04）がある。

平坦面1　平坦面1の規模はほとんど変わらないが、SX01北東及び北の部分において標高333.5m前後、SX01西の部分において標高334.5m～335m、SX01東の部分において標高331m～333.5m、SX01南の部分において標高334m～335mにて地山の花崗岩の面を検出した。地山の傾斜は、SX01付近が高く、その周囲は緩い傾斜で下っていた。平坦面1から周囲の斜面への傾斜変換点は、北東側で標高332.7m前後、北側で標高333m前後、東側北部で333m前後、東側中部で332m前後、東側南部で331m～331.5m、南側で標高333m前後にあり、東側では現地表面より傾斜変換点が約2m山側にある。

この地山面において、多数の溝を平坦面1全面（SX01を除く）で検出した。溝はSX01の裾部に接して地山の傾斜に合わせて掘られ分布していることから、平坦面1の形状は、溝が掘られた時点ですでに現状にかなり近い形になっていた可能性が高い。また土層断面図j－k－l のk－l部分西側において、SD288より層位的に古いと考えられる土層下面に薄い炭化物層（濃い網かけ部）が堆積していることを確認した。炭化物層の時期が明確でないため平坦面1が形成された時期を特定する証拠とはならないが、平坦面1の造成は溝の掘削以前である可能性が高い。

地形測量のところで、SX01の南主軸線上で平坦面1の西側と東側において約70cmの段差があることを述べたが、地山の花崗岩が風化した土を外した所、その部分において階段状遺構SX04を検出した。

平坦面1周囲の斜面の傾斜は平均45°以上あり、斜面というよりは絶壁に近い。

SX01　上面の平坦な部分の最高点は標高338.15m前後にあり、周囲の斜面への傾斜変換点は標高337.5m～338mにある。上面平坦面にあった川原石は地山から約20cm浮いた高さにあったが、川原石自体は古い時期におかれた位置に近い状態で残されていた可能性がある。上面において土坑・溝などの遺構は存在しなかったが、上面の平坦面及び平坦面付近の斜面において古瀬戸後期の陶器（摺鉢）、土師器皿、寛永通宝（1点）が出土し、15世紀後半と17世紀以後まで何らかの行為が行われていたことが分かる。規模形状は現況と同様である。

SX02　平坦面1からの比高差は3.5m前後で、平坦面2は平面三日月形で、長さ17.5m、幅3.0mにわたって確認できた。ほぼ平坦に削り出されている。平坦面1から下る斜面は、標高331m前後において斜面下部が約40°、斜面上部が25°と少し傾斜が変化している。斜面下部の傾斜が能見城本来の傾斜に近いものと思われ、斜面上部は後世に表土が流出した結果と思われる。溝や土坑などの遺構は存在しなかったが、斜面下部において能見城の時期の遺物を含んだ包含層（第6図39層）が堆積していた。

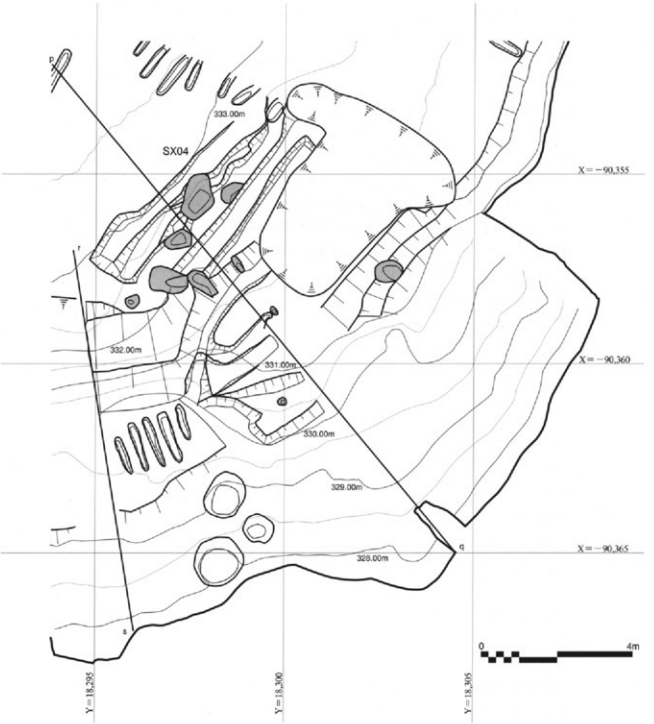
SX03　調査区において東西5m分検出した。平坦面は標高329.5m前後の地山面で検出され、やや南側に緩く傾斜する。平坦面の幅は南北3.5mあり、後述するST15となる溝が7条検出された。

SX04　南北に幅6.4m、高さ1.5mをはかる踏み台6段分の階段状遺構で、地山の傾斜に平行して

踏み台部分を形成する。SX04 部分の平均斜度は 25° で、踏み段部分の幅は約 40 ㎝ある。

畑の時期　耕作に関係すると思われる溝を 341 条検出した。これらは SX02 を除く平坦面から検出されており、溝の長軸方向と分布から溝を 15 のグループに分けた。

ST01　平坦面 1 北東部に展開し、ST02・ST03 の北側で溝が重複する部分がある。溝の切り合いでは、最も新しい。溝の主軸が N-46° -E～N-72° -E の範囲にある 13 条の溝からなり、溝の主軸方位から北側の 3 条（N-65° -E 前後）、中央の 6 条（N-48° -E 前後）、南側の 4 条（N-60° -E 前



第 12 図 SX04 遺構図（S=1/100）

後）に細別される。溝の長径は2.5ｍ前後のものと4ｍ前後のものが多く、最も長いのは5.3ｍをはかる。溝の幅は40㎝～80㎝前後、深さは10㎝～20㎝前後で、溝と溝の間の部分は幅0.2ｍ～0.3ｍ前後と狭い。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は北側5条が北東から南西へ、南側3条が南西から北東へ下る。

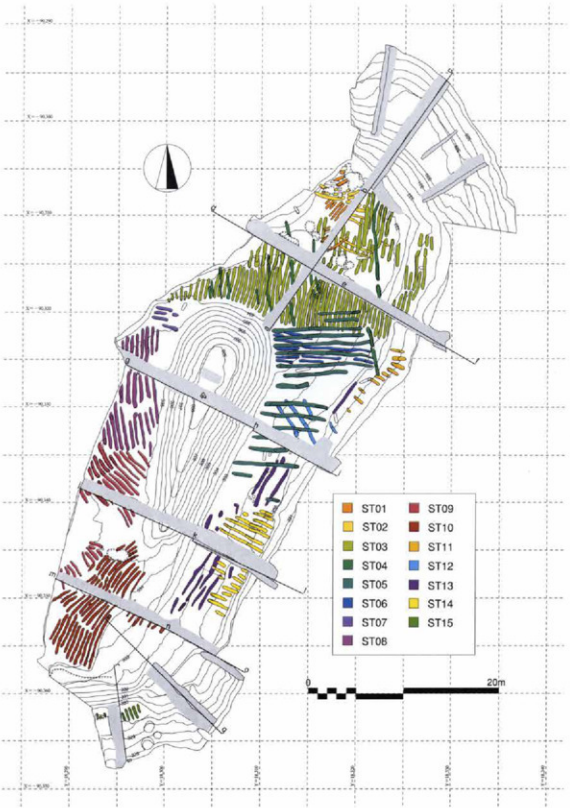
ST02　平坦面1北東部に展開し、ST01・ST03・ST04で重複する部分にある。12条の溝からなる。遺構の切り合いは、ST01より古いが、ST03よりは新しい。ST04と直接の切り合い関係はない。溝の主軸はN-84°-W～N-65°-Wにあり、南側の3条がN-60°-W前後、北側8条がN-80°-W前後の2群に分けられる。溝の長径は6.0ｍ前後のものが多く、最長で7.6ｍのものがある。溝の短径は40㎝～60㎝、深さは10㎝～20㎝前後で、溝と溝の間の部分の幅は南側の2条は80㎝の間があるが、他は20㎝～30㎝と比較的狭い。溝は地山の傾斜と直行する方向に掘られており、溝底の傾斜は北側3条が東から西へ、南側6条が西から東へ下る。

ST03　平坦面1北部に展開し、傾斜のほとんどない平坦部では溝が密集し溝と溝の間の部分の幅が20㎝～30㎝で、平坦面1の西側や東側のやや傾斜のある部分では50㎝前後とやや広くなる。70条の溝からなる。ST01・ST02・ST04・ST05と重複する部分にあり、切り合いは、最も古い。溝の主軸はN-20°-W～N-32°-Eと角度に幅があるが、N-5°-E～N-15°-Eの間にほとんど入り、よく揃っている。溝は大きく南側と北側で細別が可能であるが、ST03北側は遺構の残りが悪いため、1群で考えている。溝の長径は5.0ｍ前後のものと10.0ｍ前後のものが多く、最長で14.2ｍのものがある。溝の短径は40㎝～80㎝、深さは10㎝～20㎝前後である。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は南側が北から南へ、北側が南から北へ下る。

ST04　平坦面1北部に展開しST01～ST03・ST05・ST06と重複する位置にある。切り合いでは最も新しい。一番新しい溝のためか広い範囲に分布するが密度は薄く、14条の溝からなる。溝の主軸はN-13°-W～N-0°-EWで、N-8°-W～N-2°-Wの間が多い。溝の長径は最長16.6ｍの長さがあるが、その他は部分的な検出に留まっており、長径は不明なものが多い。溝の短径は50㎝～90㎝、深さは10㎝～20㎝前後である。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は西側11条が南から北へ、東側3条が北から南へ下る。

ST05　平坦面1SX01東の部分に展開し、ST03・ST04・ST06・ST12・ST13で重複する部分にある。17条の溝からなる。遺構の切り合いは、ST03・ST06・ST12・ST13より新しいが、ST04よりは古い。溝の主軸はN-90°-EW～N-86°-Wにあり、ほぼ1群と考えられる。溝の長径は13.0ｍ前後のものと20.0ｍ前後のものが多く、最長で20.6ｍのものがある。溝の短径は50㎝～90㎝、深さは10㎝～20㎝前後で、溝と溝の間の部分の幅は0.6ｍ～2.2ｍと幅がある。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は16条が西から東へ下る。

ST06　平坦面1SX01東の部分に展開し、ST05の北側で重複する。8条の溝からなる。遺構の切り合いはST05より古い。溝の主軸はN-90°-EW～N-75°-Wにあり、ほぼ1群と考えられる。溝の長径は最長で20.4ｍあるものがあり、他は3.6ｍ～8.3ｍであるが、8条の溝の内同一の主軸となるものは本来1条かも知れない。溝の短径は50㎝～70㎝、深さは10㎝～20㎝前後で、溝と溝の間の部分の幅は0.5ｍ～1.1ｍとやや幅がある。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は7条が西から東へ下る。



第 13 図　畝状遺構全体図（S=1/400）

ST07　平坦面1SX01西の部分、ST03の南西隅に隣接する位置のため狭い範囲に分布する。平坦面1の北端で残りが悪く、5条の溝のみ検出した。溝の主軸はN-84°-W～N-71°-Wにあり、1群と考えられる。溝の長径は3.5ｍ～3.9ｍで、短径は50㎝～60㎝、深さは5㎝～10㎝前後と浅い。溝と溝の間の部分の幅は0.4ｍ～0.8ｍで、溝は地山の傾斜と直行する方向に掘られており、溝底の傾斜は3条が東から西へ下る。

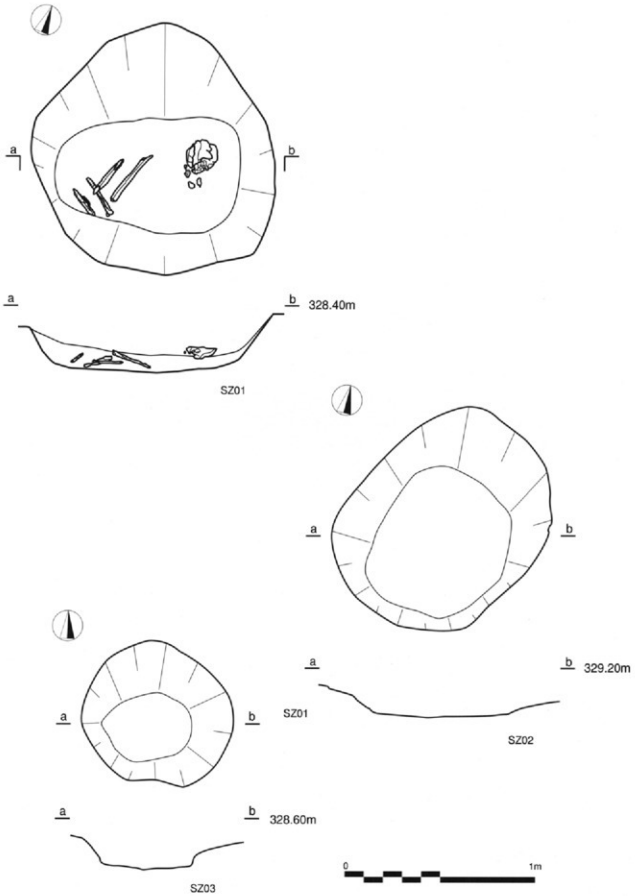
ST08　平坦面1SX01西の部分、ST07の南、ST09の北に隣接する。25条の溝からなる。溝の主軸はN-13°-W～N-3°-Eにあり、溝の切れる部分からN-1°-W～N-3°-Eの北側8条、N-10°-W～N-0°-EWの中央にある6条、N-13°-W～N-2°-Wの南側の11条の3群と細別できる。南側の溝が溝の北側をやや西に向ける。溝の長径は最長で10.3ｍのものがあるが、5.0ｍ～7.5ｍ前後のものが多い。溝の短径は50㎝～80㎝、深さは5㎝～15㎝前後で比較的浅い。溝と溝の間の部分の幅は0.3ｍ～0.8ｍである。溝は地山の傾斜と直行する方向に掘られており、溝底の傾斜は北側の溝14条と南西側の溝4条が南から北へ、南東側の溝4条が北から南へ下る。

ST09　平坦面1SX01西の部分、ST08の南、ST10の北に隣接する30条の溝からなる。ST09の中央部分は近年の樹木の攪乱により溝が検出できなかった。溝の主軸はN-13°-W～N-3°-Eにあり、やや不明瞭であるが溝の切れる部分や並びから考えると北西側の二群の溝、南西側の一群の溝の三群に細別できそうである。溝の長径は最長で10.5ｍのものがあるが、南側の3.0ｍ～4.0ｍ前後の溝と北側の7ｍ～9ｍの溝に分かれる。溝の短径は50㎝～90㎝、深さは10㎝～20㎝前後で、溝と溝の間の部分の幅は0.4ｍ～0.8ｍである。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は南東から北西に下る溝が17条、北西から南東に下る溝が7条ある。

ST10　平坦面1SX01南の部分、ST09の南に隣接する。ST10東側の7条の溝はST13と中間の位置にあるが、ST10の中に含めると39条の溝からなる。溝の主軸はN-16°-E～N-59°-Eにあり、溝の切れる部分や並びからN-31°-E～N-52°-Eの北東側10条、N-23°-E～N-59°-Eの中央にある11条、N-16°-E～N-26°-Eの南西側の11条、その東側のN-28°-E～N-52°-Eの4群に細別できる。北東側の溝が溝の北側をやや東に向ける。溝の長径は2つの溝が重複したものと思われる溝で最長14.8ｍのものがあり、他は7.0ｍ～9.0ｍ前後のものが多い。溝の短径は50㎝～70㎝、深さは5㎝～20㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は0.2ｍ～0.5ｍで他のSTに比べて間の幅が狭い。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は1条の溝を除いて地山の傾斜に沿って北東から南西に下るものが32条ある。

ST11　平坦面1SX01東の部分、ST05・ST06の東に隣接する。ST04と考えられる溝1条に切られている。10条の溝からなる。平坦面1の縁辺に位置するためか、溝の残りが悪く溝の主軸はN-85°-W～N-37°-Wとばらつきがある。溝の長径は最長3.1ｍで、2.0ｍ～3.0ｍの短い溝が多い。溝の短径は50㎝～90㎝、深さは5㎝～20㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は0.2ｍ～0.8ｍで、南側の溝で1.4ｍ離れたものがある。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は全て西から東へ下る。

ST12　平坦面1SX01東の部分、ST05と重複する。ST12は4条の溝しかなく、本来はもっと広い範囲に広がっていた可能性がある。遺構の切り合い関係ではST05の溝より古い。溝の主軸はN-35°-W～N-25°-Wにある。溝の長径は最長11.2ｍのものがあるが、短い溝は2.9ｍからあり、溝の長さ



第14図　SZ01,02,03 平面・断面図（S=1/20）

にばらつきがある。溝の短径は50㎝～70㎝、深さは10㎝～20㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は1.5ｍ～2.0ｍで他のSTに比べて間の幅が広い。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は全て北西から南東に下る。

ST13　平坦面1SX01東の部分、ST05・ST14と重複し、ST10東側の北に隣接する。16条の溝からなる。溝の主軸はN-27°E-～N-37°-Eにあり、北東に離れた1条の溝を除いて溝の分布や並びからST05の溝に切られるN-27°-E～N-32°-Eの北東側4条、ST14の溝に切られるN-32°-E～N-37°-Eの南西側9条の2群に細別できる。溝の長径は最長で14.8ｍのものがあり、他は7.0ｍ～9.0ｍのものが多い。溝の短径は40㎝～90㎝、深さは10㎝～20㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は0.4ｍ～1.0ｍである。溝は地山の傾斜と直行する方向に掘られており、溝底の傾斜は不明瞭なほぼ傾斜のないものを除くと南東側の溝で南から北へ5条、北から南へ1条下る。

ST14　平坦面1SX01南東の部分、ST13と重複する位置に分布する。21条の溝からなり、溝の主軸もN-68°-W～N-59°-Wにあり、1群と考えられる。溝の長径は最長10.4ｍのものがあり、2.0ｍ～4.0ｍのものと7.0ｍ～10.0ｍのものが多い。溝の短径は50㎝～80㎝、深さは10㎝～30㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は0.2ｍ～1.3ｍと他のSTに比べて不均等である。溝は地山の傾斜と平行する方向に掘られており、溝底の傾斜は全て地山の傾斜に沿って西から東へ下る。

ST15　SX03において8条の溝を検出した。SX03（平坦面3）は発掘調査していない部分があり、調査区の西に広がる可能性が高い。溝の主軸はN-22°-W～N-11°-Wにあり、溝の長径は1.9ｍ～2.8ｍで地山の傾斜に平行する方向に掘られているためSX03の幅以下である。溝の短径は40㎝～60㎝、深さは5㎝～15㎝前後である。溝と溝の間の部分の幅は0.15ｍ～0.5ｍで他のSTに比べて間の幅が狭い。溝底の傾斜は1条の溝を除いて地山の傾斜に沿って北から南に下る。

土坑墓　SX03の南西下方の緩斜面にて土坑を3基（SZ01～SZ03）検出した。3基の内1基から人骨が出土したことから、他の2基も含めて土坑墓と考えた。土坑上部は近年の撹乱により流出していたが、その下部にあたる部分を地山面にて検出できた。遺構の埋土はにぶい黄褐色～褐色細粒砂であった。

SZ01　平面円形の土坑で、長径1.30ｍ、短径1.25ｍ、深さ0.67ｍ、断面をとった地点で深さ0.25ｍをはかる。土坑底部の大きさは長径1.00ｍ、短径0.60ｍで、やや丸みのある平底であった。土坑底部からやや浮いた状態で人骨が出土した。人骨は土坑東側に頭蓋骨、西側に大腿骨、脛骨が残存していた。

SZ02　平面楕円形の土坑で、長径1.20ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.48ｍ、断面をとった地点で深さ0.12ｍをはかる。土坑底部の大きさは長径0.75ｍ、短径0.70ｍで、やや丸みのある平底であった。

SZ03　平面円形の土坑で、長径0.80ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.52ｍ、断面をとった地点で深さ0.20ｍをはかる。土坑底部の大きさは長径0.50ｍ、短径0.35ｍで、やや丸みのある平底であった。

（藤山誠一）

人骨　能見城の発掘調査において、SZ01の土坑内から１体分の人骨が出土した。ここでは、その人骨の形態学的な記載を行う。

埋葬形態：右腓骨と右脛骨が連続しない、下肢骨の位置が解剖学的な位置にないこと、頭蓋骨が逆さまの状態で出土したことなどから、桶などを使用した座位で埋葬された可能性がうかがえる。供出する遺物はない。

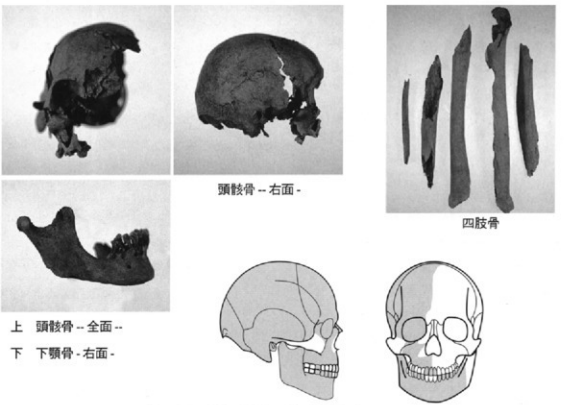
保存状態：残存していた部位は頭蓋骨右側および下顎骨、四肢長骨の骨体部などで、いずれも保存状態は不良で計測に耐えられるものではなかった。

頭蓋骨：上顎右半部、右前頭骨右半部、右側頭骨、右頭頂骨、後頭骨右半部が残存する。冠状縫合、人字縫合、矢状縫合の一部が癒合している。下顎は左関節枝付近が欠損するのみである。確認される歯式は以下の通りである。

＊:歯槽閉鎖　○:遊離歯　△:脱落歯

左右下顎第1,2門歯、左第２大臼歯に完全な歯槽閉鎖がみられ、左第１大臼歯には若干の歯槽閉鎖が見られた。また、遊離歯として、右下顎切歯、右下顎第1,2小臼歯、右下顎第１大臼歯、左下顎切歯、左下顎第1,2小臼歯、左下顎第１大臼歯、右上顎第1,2門歯、右上顎第１大臼歯、左上顎第１門歯の一部が確認された。上顎門歯以外は咬耗が激しい。

後頭骨突起および眉上弓の隆起、縫合の癒合の程度などから、熟年の男性である可能性が指摘できる。（堀木真美子）



第15図　出土頭骸骨・残存部模式図

第4章　遺　物

1. 遺物組成と出土分布

出土遺物は土師質皿・陶器・磁器・石製品（砥石）・金属製品（銭貨、不明）などP-18コンテナで7箱程度である。土師質皿、陶磁器については器種／産地／時期別に分類し破片数（接合前）のカウントを行った。（陶磁器の分類は瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に御教授いただいた）

出土遺物中で最も多くを占めるのは土師器皿であり、破片数で80.7%となる。破損し易く他の陶磁器類に比べて実体以上の数値を示す場合もあるが、コンテナに整理して3箱弱の分量である。次いで瀬戸美濃産陶器（9.2%）、灰釉系陶器椀、皿類（3.2%）、常滑産の壺・甕類（2.9%）、その他に近世以降の陶磁器（2.6%）、瓦（0.6%）と続く。土師器の煮沸具は少なく僅かに6点（0.6%）であった。（第16図）

出土遺物の大半は遺構に伴うものでなく、地山に比較的近い包含層下層で検出された。瀬戸美濃産陶器および常滑産陶器は、調査区南側の階段状遺構付近を除いた調査範囲全体に平均して広がっており、分布に特徴は認められない。土師器皿は若干の集中地点が2ヶ所あり、平坦部1のSX01東側と、平坦部1北東端から斜面にかけての範囲に主に分布する（第19図）。耕作によって堆積層が攪拌されていることが予想されるが、瀬戸美濃産陶器、常滑産壺・甕類と土師器皿の分布とでは様相が異なる。少なくとも平坦部上で空間の利用形態に何らかの違いがあったものと思われる。

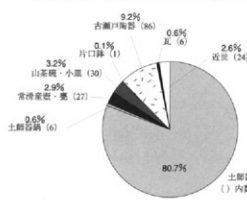
2. 陶磁器類

灰釉系陶器（12～18）：尾張型では瀬戸以外に藤岡産と思われる資料が若干含まれるが、胎土が緻密で薄手の北部系の椀が大半である。口径は10～11cm、器高3.5～4cm前後で、高台は低く底部内よりに平面では不整円形につく。大洞東段階にまとまりがみられる。16は内面口縁部付近に油煙煤が付着しており燈明皿に使用されたと思われる。

瀬戸・美濃産陶器（1～10,20～28）：8,9は古瀬戸後期Ⅳ古段階の緑釉小皿。10は耳付水注。掲載図版以外に四耳壺、土瓶・釜類などの器種がある。盤類、皿類は鉄釉の施されるものが多く、後期Ⅳ新段階にまとまりをもち、大窯段階以降の資料はみられない。天目茶碗、擂鉢、折縁深皿、直縁大皿などが山頂に持ち込まれている。

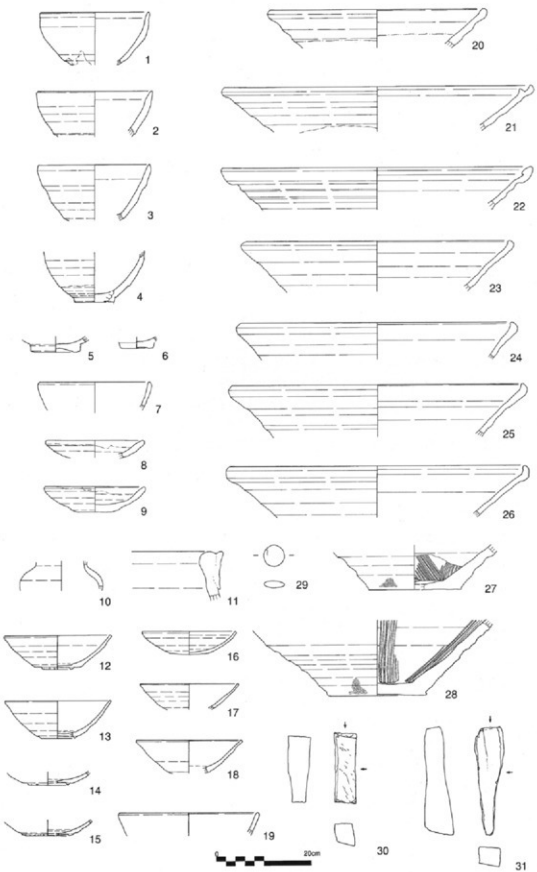
常滑産陶器（11）：水甕などへの使用が想定される大型の壺・甕類であるが、非常に少なく全体でも27点であり、このうち図化できた口縁部片は1点であった。（常滑編年11型式段階）

貿易陶磁器（19）：明瞭でないが鎬蓮弁文を有する龍泉窯系の青磁碗の口縁部片1点がある。

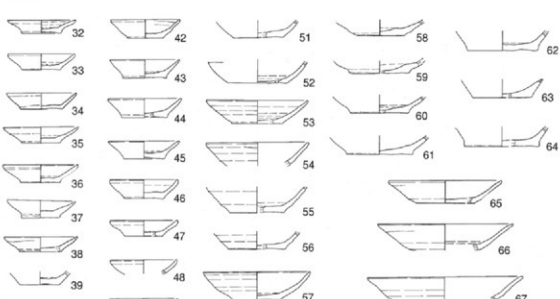


器種＼古瀬戸	後期前半	後期II	後期後半	後期IV古	後期IV新	大窯か？	不明	合計
天目茶碗	1	1	0	0	4	3	2	11
平碗	0	0	0	0	0	0	1	1
緑釉小皿	1	0	0	4	0	0	0	5
折縁皿	0	0	0	0	0	0	1	1
擂鉢	0	0	1	0	28	0	0	29
折縁深皿	0	0	1	0	0	0	0	1
折目付大皿	0	0	0	0	1	0	0	1
直縁大皿	0	0	0	0	3	0	0	3
盤類	0	0	0	0	0	0	11	0
耳付水注	0	0	1	0	0	0	0	1
四耳壺	0	0	1	0	0	0	1	1
古瀬戸器種不明	0	0	0	0	0	0	5	0
合計	2	1	4	4	36	3	21	52

第16図　出土遺物組成と古瀬戸器種・時期別一覧



第 17 図　遺物図版（陶磁器）



第18図　遺物図版（土師器皿）

土師質皿；殆どが底部にロクロ糸切り痕を残す。外面口縁部に近い位置で螺旋状に沈線がめぐり、粘土紐積み上げ・ロクロ整形の工程をとるものと思われる。

器形、口径と器高の分布から以下Ⅰ～Ⅴ類に分類して詳述する。

Ⅰ類）出土点数が最も多い。全体の62.3パーセントを占める。口径9cm未満、器高は2cm以下で体部は短く直線状に開く。底部がやや突出し厚みをもつ個体が多い。底部径は4.0～4.6cm。体部内面はコテナデ、見込および底部との境に段を残すものが多い。外面はヨコナデ。口縁端部は細く延びるもの、端部外面にナデの面をもつものとがある。（33,38）では体部上位に沈線がみられる。

Ⅱ類）底径6.2～7.8cm、口縁部が残存する資料はないが器高1.6cm前後と推定される。内面はコテナデ、緩いカーブを描いて底部から体部へ続き器壁はここで厚みをもつ。体部はあまり広がらず、先端にむかって急激に細くなる。白っぽい胎土の個体が目立つ。

Ⅲ類）口径9～12cm、器高2cm以上で底部と体部の厚さはほぼ一定。体部は下半が丸くやや内彎気味。体部内面はコテナデ、見込に工具による段を残す。底部外面に板目状の圧痕を残すものがある。Ⅰ類に次いで破片数は多い。（52,54,55）では体部上位に沈線がみられる。

Ⅳ類）口径が12cm以上と大きいもの。（65）は12cm、（66）は14.4cm、（67）は16.6cmを測る。Ⅲ類に比べ口縁部がやや肥厚し外反する傾向がみられ、器高は低く抑えられる。成形・調整等はⅢ類に同じで、今のところⅢ類の底部との区別は不明。

Ⅴ類）出土数は少ない。成形にロクロを使用し、内面にロクロ目を明瞭に残す。手持ちして底部外面を不定方向に削る。

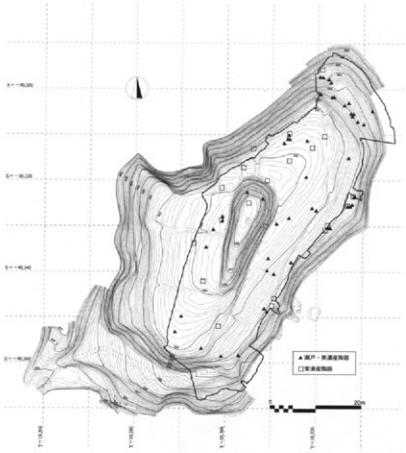
3. 石・金属製品

砥石（71,73）：時期は不明だが、畑地耕作時期まで下る可能性がある。石材は凝灰岩。

碁石（75）：泥岩製の薄い円盤状を呈する。1点のみ。

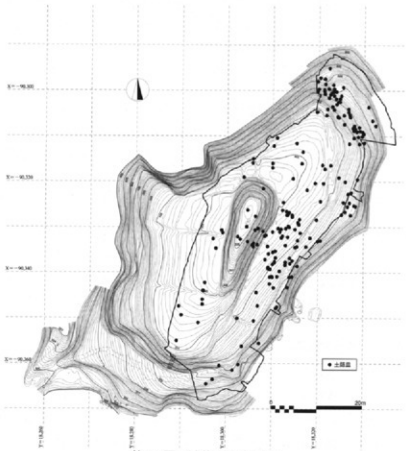
鉄製品（71）：長さ14.6cm、最大幅1.2cmあり、鉄釘と思われる。基部末端に孔がある。時期不明。

銭貨（70）：包含層より元祐通寶と寛永通寶各1点が出土した。（武部真木）



70
(S=2/3)

75 (S=1/3)



第19図　遺物の出土分布

第5章　まとめと考察

1. 能見城跡の考古学的成果

規模と形態　やや上方の土が流下しているため、当時の正確な姿は不明であるが、上屋を除くとほぼ現況に近い規模（南北83ｍ、東西32ｍ）と形態（平坦面が3面と土塁状遺構が1基、階段状遺構1基の構成）を持っていたものと思われる。またSX01南の部分で平坦面1の東側から西側へ階段状遺構SX04を介して上がっていく形になっている。一方で平坦面1の北側から東側にかけては明確な段差がない。

遺物の出土状況　平坦面1では調査した面積・遺構の分布などの関係もあるがSX01の東側が多く、SX01の西側・南側で少ない。また先述したようにSX02で多く、SX03で遺物の出土が少ない。SX01の上面付近において能見城の時期の遺物が出土している。（藍山誠一）

2. 出土遺物の構成

能見城出土の主な遺物の年代観は、瀬戸美濃産陶器より古瀬戸後期Ⅳ段階、15世紀後半～末に位置づけられる。瀬戸窯で古瀬戸陶器の生産が最も活発であった時期にあたる。鍋・釜などの煮沸具、擂鉢や盤類、緑釉皿、天目茶碗など調理具、供膳具ともに比較的器種は多様であり一定量の出土がみられる。ここでの生活を裏付ける資料となっている。

遺物の組成では土師器皿の割合が突出して大きいことが特徴であるが、これが日常生活の中で使用されたものか、あるいは特殊な使用方法があったのか俄には判断できない。Ⅰ～Ⅴ類に分類した土師器皿はすべて15世紀代の時期の資料と考えられる。出土分布ではその他陶器類とは異なり若干の集中地点がみられる。これを当初の廃棄状況に近い状態とするならば、多数の皿を使用後一括廃棄した状況も想定できるのではないだろうか。（武部真木）

3. 耕作地遺構

溝の特徴

溝の性格を考える前に能見城跡で見つかった溝（ST）の特徴を以下に述べる。

1. 溝の長径は、20.0ｍを越すものもあるが、7.0ｍ～9.0ｍ前後が多いようである。
2. 溝はSTの違いによって幅の違いはあるが、概ね地山面にて0.5ｍ～0.7ｍ前後で、溝の断面形状が「U」字状であるため上端での幅は1ｍに近いものになる可能性がある。
3. 溝の深さは地山面では深さ10㎝～20㎝前後であるが、現地表面を当時の地表面に近いと考えるならば深さ80㎝前後になる。
4. 溝の分布では異なるSTが重複する場合があり、平坦面1SX01東のSTではST毎に規則的な前後関係が見られる。
5. 同じST内では、溝の端部が重複してつながるものがあると思われるが、平行しているもの同士では重複がない。溝と溝の間の幅には0.2ｍ～2.2ｍまで幅がある。
6. 1つのST内においても溝の分布や、切れ目、長軸方位により2～3の群に分類できるものがある。
7. 溝はSX01の裾部に接して掘られている。
8. 溝が地山の傾斜に直行しているSTが4群、地山の傾斜に平行しているのが11群あり、溝底の傾斜はほとんどが地山の傾斜に沿って掘られている。

溝の性格（使われ方）

溝の形成過程の問題として、近年の樹木の根も地山に比べて柔らかい溝の中に根を伸ばしているものが多く見られ、溝が使われた時期にも同様に植物の影響によって調査で見つかるような形になった可能性がある。そのため現在考えていることは当時の人々が使用した、あるいは使用した結果であるのかという点である。溝の特徴の2及び5から考えられることは、溝が上層で隣接する場合は、その溝はくっついていた可能性が高い。よって検出された溝が各STにおいて全て存在したとしたら、当時使用されたのは溝と溝の間に残る畝状の部分ではなく、溝を利用した可能性が高い。（藤山誠一）

付論　能見城主について

—地域史からみた能見城—

1）はじめに

旭町は矢作川によって左岸と右岸に分けられる。室町時代、左岸は三河国加茂郡足助庄、右岸は美濃国恵那郡遠山庄に含まれていた。16世紀になると足助庄は足助鈴木氏、遠山庄は中津川の遠山氏の勢力下に入っていた。

足助は当時から信州へ向かう伊那街道と美濃国明智、岩村へ向かう美濃街道、尾張、西三河南部、東三河へ向かう街道が通じ、交通の要衝であった。そのため、松平氏や今川氏、武田氏の侵攻をしばしば受けることとなった。

能見城は足助の北８ｋｍ、美濃街道が阿摺川と交差する点に位置している。阿摺川沿いに足助を迂回し尾張に抜けることもでき、街道を押さえる重要な役割を負っていた。能見城周辺には足助町に35、旭町21の山城が確認されている。それぞれが互いに田道で結ばれ、連携し合っていたと考えられる。註1

2）能見二郎左右衛門光親について

能見城が使用されていた15世紀初頭から後半、能見城は誰の勢力下にあったのであろうか。能見城の記録として旭村誌（大正２年）に次のような一文があるのみである。

「野見城址　大字榊野字野見ニアリ能見二郎左右衛門光親ノ居城ニテ祖地三段歩光親ハ後額田郡へ移リ西能見ニ住ス同地ニ観音寺アリ其墓表ニ法諡本光院天文五年四月十五日卒ス蓋八十餘歳ト」註2

天文５年は1536年にあたりその年に80余歳で死去したことから、光親は1450年前後に生まれたことがわかる。能見城が使用されていた期間と光親の生存期間には重なる部分があり、この記述は正しいように思われる。

江戸時代にまとめられた「寛政重修諸家譜」に光親についての記載がある。第二巻清和源氏義家流松平庶流略図に「松平次郎光福が祖　次郎右衛門　能見の松平と称す」第三十三巻松平能見の項に「次郎右衛門光親は信光君の八男なり。三河国額田郡能見に住せしより能見の松平と称す」「次郎右衛門　母は某氏　三河国額田郡能見阿知波等を領す。天文五年四月十五日死す。法名浄賢。能見の観音寺に葬る」とある。光親は松平三代信光の八男として生まれ、信光の岩津進出を助け、自身は岡崎北部の能見周辺を支配していた。能見松平はその後も松平、徳川宗家に使え、大名旗本として栄えている。

第20図　松平庶家の分立図
（「新編　岡崎市史」中世２　P.441より）

岡崎城の北1kmほどに能見町がある。矢作の長者がここで能狂言を催したことから名づけられたという。能見松平の居城が神明社の西あたりにあったと伝えられ、その西に光親の墓がある観音寺がある。

死亡年月日その他の記述は「寛政重修諸家譜」と旭村誌は完全に合致している。両者を併せれば、最初旭町の能見を治めていた光親が、信光に従い額田郡の能見へ移りそこで死去したことになる。

しかし、ここで疑問に残ることは旭村誌が言っている能見松平発祥地である旭町の能見について、「寛政重修諸家譜」がまったく触れていない点である。また、この地域に勢力を広げた鈴木氏との関係はどうだったのであろう。そこで、15世紀の松平氏、鈴木氏の動きについて以下で述べたい。

3）松平氏の動き

松平氏（徳川氏）は豊田市松平町から起こった。「寛政重修諸家譜」によれば初代親氏が「はじめて三河国松平郷にうつり住せたまひ、松平と称す」二代泰親が「はじめて岩津城を築き、また岡崎に城をきづきて移り住し給ふ」とある。親氏入郷の状況についてはよくわからず、また、その時期ももっとも早いものと遅いものでは100年以上の差がある。しかし、泰親については岩津の神社に泰親建立時の銘文写しが残り、15世紀中頃の人物であることがわかっている。[註3]

三代信光は「三河国安城を攻めとり、又岩津の城に住し給ふ」とある。松平氏発展の基礎を築いたと言われ、大給（豊田市）保九（幸田町）を攻め取り、ついで岡崎、文明元年（1469）安城城を占領した。信光の子どもには系図上10名が挙がっているが、実子だけではなく占領地の土豪を取り込んでいったと考えられる。以下光親を除いて信光の子を上げる。

家守　松平哲吉守謨が祖　左京亮　竹谷の松平と称す。

忠親　信光君の譲をうけて安城に住し給い…のち岩津城を太郎親長、細川城を次郎乗元に譲られ…　昌龍 因幡守

與副　松平紀伊守信彰が祖…形原の松平と称す。

光重紀伊守　大草の松平と称す。

光英　八郎右衛門

忠景　初元芳…信光君の七男に弥三郎元芳をかけ之を五井渓溝の祖とし…

家勝　美作守[註4]

親正　修理進

ここで着目したいことは、信光とその子たちの領地が松平の地から三河南部に広がっていることである。上記の図は信光以降の松平氏の勢力範囲を示したものである。これからも同様のことが言える。松平の勢力が南に広がっている中で、光親一人が北へ20km以上離れた地に領地を持つだろうか。能見と能見が同字または音が近いことから、権威をつけるために松平氏の系図に繋げたのではないかという疑問を拭いきれない。次に鈴木氏との関係について考えたい。

4）鈴木氏の動き

豊田市矢並町に二つの城跡がある。矢並上本城、矢並下本城と呼ばれ、西三河北部に勢力を拡大していった鈴木氏の城である。三河鈴木氏の祖は鈴木平内大夫重善、世を遁れて善阿弥と号したと言われる。永久の乱後、豊田市北部に広がる高橋庄地頭に中条氏が入る。鈴木氏はその被官衆のひとりとして成長する。

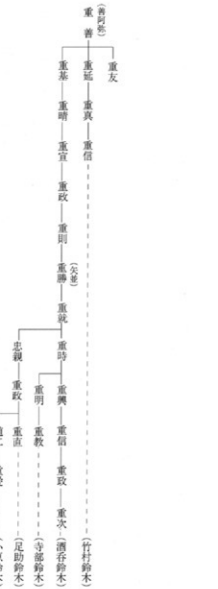
「寛政重修諸家譜」では重善は源平期と人物として記述されている[註5]。別に猿投神社文書に「矢並郷平内大夫入道善阿」が登場する。貞和二年（1346）中条秀長の命を受け神宮寺の造営に当たるのが善阿弥（重善）である。「寛政重修諸家譜」は系図を意図的に古く見せる疑いがあり、猿投神社文書から重善は南北朝時代の人と考えるのが妥当であろう。

それでは能見城が使用されていた15世紀初頭から後半にかけて、鈴木氏の動きはどうであっただろう。「参陽松平御伝記」に、矢並の鈴木左京進重勝の娘が松平親忠（信光の子）の内室になっている記述がある。このことから、当時鈴木氏は松平氏と同等の力をもっていたこと、友好的な関係であったことがわかる。

鈴木氏が中条氏の被官衆の一員から有力国衆として西三河北部を勢力圏とするまでにいたる過程はまったくわからない。しかし、以後、鈴木氏は矢並を出発点として市木から寺部へ、酒呑、則定から足助、さらに小原へ、その他古瀬間・九久平・竹村・八桑・阿摺、遠くは八名郡まで一族を広げている。

鈴木氏はやがて松平氏に取り込まれていく[註6]。足助鈴木氏について言えば、大永5年（1525）に清康に攻められそれ以後麾下に属す。この時期に松平氏の勢力が北へ広がってきたと言える。しかし、それ以前の両者の関係は対峙していただろうが、松平氏は西三河の地を南下、鈴木氏は北上と大雑把に棲み分けができていたのではないだろうか。

以上のことから、鈴木氏の勢力下にあって能見だけが松平氏によって治められることは考えにくい。人物は特定できないが、鈴木氏になんらかの縁がある者と考えることが自然であると思われる。



第21図　鈴木系図
（『豊田市史』1 P.542より）

5）おわりに

今、能見城は街道の分岐点に位置し街道を押さえる重要な役割を負いながら、なぜその後の戦国大名の攻防にさらされる前に役割を終えてしまったか疑問が残っている。近世には城山の北麓で年貢を集めた蔵屋敷が置かれたといわれ、依然重要な街道であったことは違わないにもかかわらずである。この地を舞台に活躍した戦国大名の動きからその疑問を明らかにしていかなければならない。

（木下　一）

註 1　城から城への移動を試すため、能見城から北の大垣内城まで尾根道を歩いた。道は昭和 30 年代まで地元では使用されており、完全に残っていた。一旦尾根に上がってしまえば高低差も少なく歩きやすく、私たちの足で 1 時間半程度で着いた。

註 2「旭町誌」も同様の記述であり、郷土誌「歌鳥のくらし」でも「城主は松平親氏氏より三代にわたり、その後岡崎市に移り能見町が生まれる」とあり、子孫が祖先の地を訪ねてきたと記されている。

註 3　岩津若一神社の銘文写しに「奉二造立一三河国額田郡岩最若一王子霊社一宇　干レ時応永三十三年丙牛十二月十三日　大檀那用金（泰親）」とあり、泰親が 1426 年以前に岩津に進出していたことがわかる。

註 4　大樹寺文書に「丸根美作守家勝」とある。「高橋村史」には豊田市野見町の丸根城主が家勝であると言っている。「豊田市史」もその可能性について触れている。「岡崎市史」は丸根城を岩津南部と考えている。

註 5「寛政重修諸家譜」での重善の記述について一部抜粋する。

「重善は紀州鈴木氏の 37 代、三河の初代に当たる。源義経への志が深く、義経が頼朝と対立し奥州へ逃れた際、文治五年（1189）奥州に下ろうとしていた。三河矢作の宿まできた時、不幸にして脚気を患い、ここ数日逗留している内に高館が落城し、下向をあきらめこの地に永住を求めた」

註 6　明応二年（1492）、寺部城主鈴木重時らが岡崎の井田野で松平親忠と戦い破れている。この合戦を伝える資料が少なく、その理由につてはわからない。また、寺部鈴木氏は後に家康によって滅ぼされる。

参考文献

旭町誌編集研究会　1981「旭町誌」
足助町誌編集委員会　1975「足助町誌」
小原村誌編集委員会 1964「小原村誌」
豊田市　1976「豊田市史」
岡崎市 1988「岡崎市史」
高橋村史編纂委員会 1985「高橋村史」
続群書類従完成会　1980「寛政重修諸家譜」
愛知県教育委員会　1994「中世城館跡調査報告Ⅱ（西三河地区）」
平凡社 1981「愛知県の地名」

遺物登録一覧

図版No.	出土地点	器種	時期・産地	口径cm	器高cm	底径cm	釉薬	その他
1	検1	天目茶碗	鼓期IV新	11.4	*5.6	*	鉄釉	底部露胎
2	SK	天目茶碗	鼓期II	12	*4.8	*	鉄釉	底部露胎
3	T.6東斜面	天目茶碗	鼓期IV新	11.8	*5.9	*	鉄釉	底部露胎
4	T.6東斜面	天目茶碗	鼓期I・II	*	*5.4	4.2	鉄釉	底部露胎
5	T.4.E	天目茶碗	鼓期IV	*	*1.7	3.8	鉄釉	底部露胎
6	T.4.E	天目茶碗	鼓期IV	*	*1.2	3.5	鉄釉	底部露胎
7	検1	天明	鼓期	12.6	*3.0	*	鉄釉	
8	検1／T.2	緑釉皿	鼓期古古	10.1	*1.9	*	鉄釉か	
9	検1	緑釉皿	鼓期古古	10.4	2.7	3.4	鉄釉か	
10	検1	耳付水注	鼓期II・IV	*		*	鉄釉	
11	検1	常滑壺甕	常11	*	*5.2	*		
12	検1／SX01	山茶椀	大渕東	11.2	3.7	3		
13	T.4.E	山茶椀	大渕東	11.4	4	3.6		
14	検1	山茶椀	大渕東	*	*1.5	4		
15	検1	山茶椀	大渕東	*	*1.7	4.6		
16	T.2	山茶椀	生田	9.8	2.5	4		
17	検1／SX01	山茶椀	大渕東～脇之島	10.2	*2.8	*		
18	検1	山茶椀	脇之島	11	*3.5	4.6		
19	検1	青磁碗	鼓東浜B-3					
20	検1	直縁大皿	鼓期IV新	22.6	*4.1	*	灰釉	
21	検1	卸目付大皿か？	鼓期IV新	32.2	*4.8	*	鉄釉	
22	検1	擂鉢	鼓期IV新	32.6	*4.5	*	灰釉	
23	検1	直縁大皿	鼓期IV新	27.8	*5.4	*	施釉	
24	検1／SK内	擂鉢	鼓期IV新	28.6	*3.9	*	施釉	
25	検1	擂鉢	鼓期IV新	30.6	*3.6	*	施釉	
26	SX04名渕東部	擂鉢	鼓期IV新	31	*5.5	*	施釉	
27	検1	擂鉢	鼓期IV新	*	*4.8	9.7	施釉	
28	検1／SX01	擂鉢	鼓期IV新	*	*8.1	10.2	施釉	
29	検1	砥石						S-29
30	表土	砥石						S-30
31	包含層	砥石						S-31

図版No.	出土地点	器種	分類	口径cm	器高cm	底径cm	胎土・色		その他
32	検1	土師器皿	I	7.2	1.4	4.2	灰白	5YR8/2	
33	検1	土師器皿	I	7	1.7	4.2	灰白	7.5YR8/2	
34	検1	土師器皿	I	7.4	1.7	4.6	灰白	7.5YR8/2	沈線
35	検1	土師器皿	I	8	1.7	4	淡橙	5YR8/3	
36	検1	土師器皿	I	7.8	1.9	4.2	浅黄橙	7.5YR8/3	
37	検1	土師器皿	I	7.1	1.8	4	灰白	7.5YR8/2	
38	検1	土師器皿	I	7.8	1.6	4.4	にぶい黄	10YR7/2	沈線
39	検1	土師器皿	I	*	*1.4	4	にぶい黄	5YR7/4	
40	検1／SX01	土師器皿	I	*	*1.4	3.8	浅黄橙	7.5YR8/3	
41	検1	土師器皿	I	*	*1.9	4	浅黄橙	7.5YR8/3	
42	検1	土師器皿	I	7.4	2	4	灰白	5YR8/2	沈線
43	検1	土師器皿	I	7.3	2	4.6	浅黄橙	7.5YR8/3	
44	検1	土師器皿	I	7.8	2	5.8	浅黄橙	7.5YR8/3	
45	検1	土師器皿	I	7.5	1.9	4.4	淡橙	5YR8/3	
46	検1／SX01	土師器皿	I	7	2	4.2	にぶい橙	7.5YR7/3	
47	検1	土師器皿	I	7	1.7	4	浅黄橙	7.5YR8/3	
48	検1	土師器皿	I	7	*1.5	*	浅黄橙	7.5YR8/3	
49	検1／SX01	土師器皿	I	7.1	1.8	4	灰白	7.5YR8/2	
50	検1	土師器皿	I	*	*1.3	4	灰白	7.5YR8/1	
51	T.3	土師器皿	II	*	*1.9	5.4	灰白	10YR8/1	
52	検1	土師器皿	II	*10.2	*2.3	6.2	浅黄橙	7.5YR8/3	沈線
53	SX01	土師器皿	II	10.6	2.5	5.4	灰白	10YR8/2	
54	検1	土師器皿	II	10.8	*2.5	*	浅黄橙	7.5YR8/4	沈線
55	検1	土師器皿	II	*10.4	*2.7	5.8	灰白	7.5YR8/2	沈線
56	検1	土師器皿	II	*	*1.9	6	浅黄橙	7.5YR8/4	底部板圧痕
57	検1	土師器皿	II	11.2	3	5	灰白	7.5YR8/2	
58	検1	土師器皿	II	*	*1.7	5.2	灰白	5YR8/2	底部板圧痕
59	検1／SX01	土師器皿	II	*	*1.3	6.4	浅黄橙	7.5YR8/4	内面煤
60	検1	土師器皿	II	*	*2.2	6	灰白	10YR8/1	
61	検1	土師器皿	II	*	*2.0	6.8	灰白	10YR8/1	底部板圧痕
62	T.2	土師器皿	II	*	*2.1	7.4	灰白	10YR8/2	
63	検1 T.2北西斜面	土師器皿	II	8.5	*2.0	6.2	灰白	7.5YR8/1	
64	検1	土師器皿	II	*	*2.1	7.8	灰白	7.5YR8/2	
65	検1	土師器皿	IV	12	2.4	6.2	灰白	10YR8/1	沈線
66	検1／SX01	土師器皿	IV	14.2	*2.8	*7.4	鈍灰黄	2.5Y4/2	沈線
67	検1	土師器皿	IV	16.4	*2.6	*	灰白	7.5YR8/2	
68	検1	土師器皿	V	15.6	3	10.4	浅黄橙	7.5YR8/3	底部ケズリ
69	検1	土師器皿	V	*	*1.8	3.9	にぶい橙	5YR7/3	底部ケズリ

図版No.	出土地点		長さcm	幅cm			
70	検1／SX01	滝水通貨					M-70
71	包含層	鉄刻	14.6	1.2			M-71

上　全景（南西より）／下　SX01（北東より）

SX03（東より）

SX02（南より）

SX02の造成（南東より）

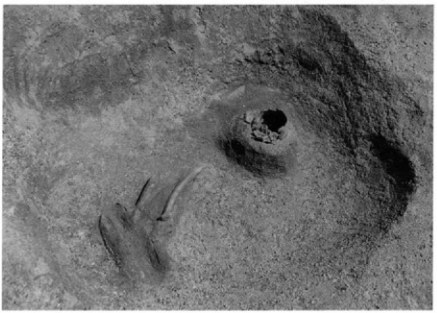
SX04 階段状遺構（東より）

SX04（北より）

全景　溝の広がり（北より）

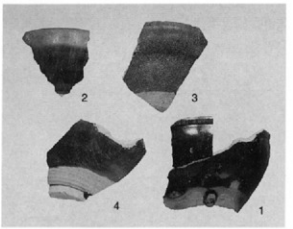
ST04 ST05 ST06（西より）

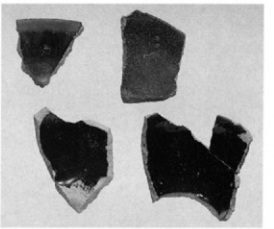
ST08 ST09（東より）

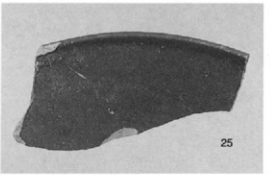


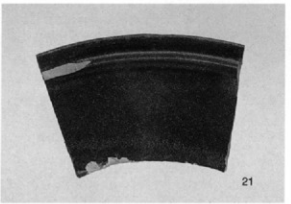
SZ01（南より）

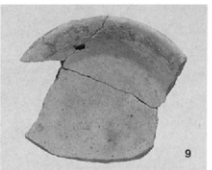
写真図版 4





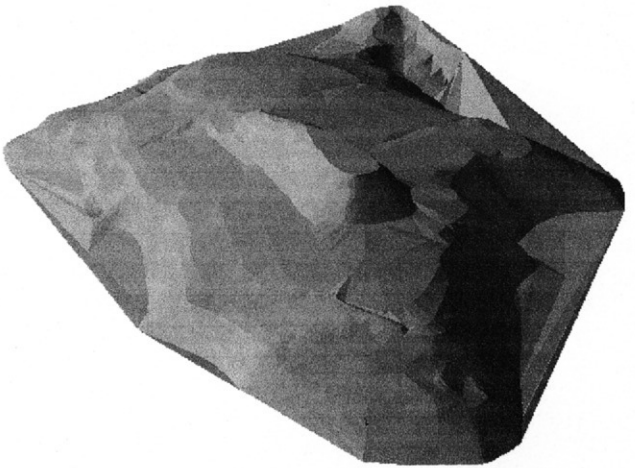






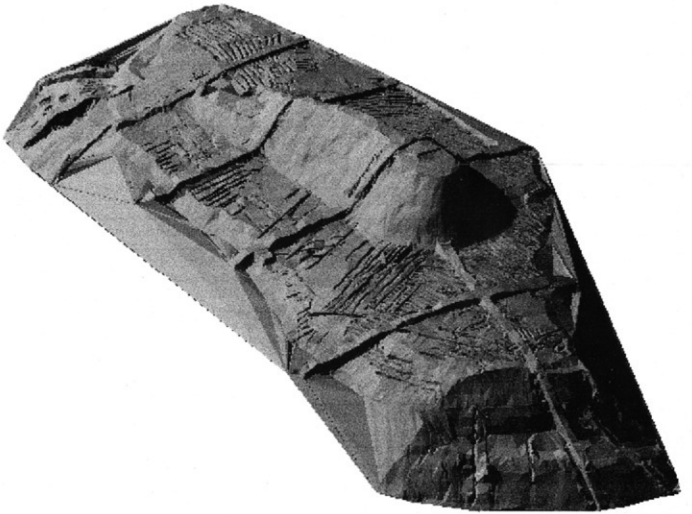
土師器皿

写真図版5



調査前の能見城跡

図版6



能見城跡遺構図

図版 7

報告書抄録

ふりがな	やざこじょうあと・のうみじょうあと
書名	岩作城跡・能見城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第89集
編著者名	武部真木（編集）・森　勇一・木下　一・花井　伸・堀木真美子・鬼頭　剛・蔭山誠一
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦　2000年9月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積㎡	調査原因
岩作城跡（いずさじょうあと）	愛知郡長久手町大字岩作字城ノ内・早稲田（あいちぐんながくてちょう・いずさ・しろのうち・わせ）	23304	15027	35度10分40秒	137度03分07秒	199904～199911	1,800㎡	県道田籾・名古屋線道路改良工事に伴う事前調査
能見城跡（のうみじょうあと）	東加茂郡旭町大字榊野（ひがしかもぐんあさひちょう・さかきの）	8	69031	35度11分09秒	137度22分05秒	199905～199909	2,400㎡	県道土岐・足助線道路改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩作城跡	集落	奈良・平安	掘立柱建物跡	須恵器・土師器	
	城館跡	鎌倉・室町時代	土抗 土塁・堀跡	鉄滓 灰釉系陶器・瀬戸美濃産陶器・常滑産陶器	
能見城跡	城館跡	室町時代	物見櫓？ 曲輪	瀬戸美濃産陶器 常滑産陶器 土師器皿	
	墓地	16世紀～江戸時代			人骨1体
	耕作地		畝状遺構	寛永通寶	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第89集

岩作城跡・能見城跡

2000年9月29日

編集・発行　愛知県埋蔵文化財センター
印刷　西濃印刷株式会社